

県営蓼科ダム埋蔵文化財発掘調査報告書

—茅野市内—

ささはらうえだいいち いせき
笹原上第1遺跡
ささはらうえだいに いせき
笹原上第2遺跡

2005. 1

長野県諏訪建設事務所

長野県埋蔵文化財センター

県営蓼科ダム埋蔵文化財発掘調査報告書

—茅野市内—

ささはらうえだいいち いせき
笹原上第1遺跡
ささはらうえだいに いせき
笹原上第2遺跡

2005. 1

長野県諏訪建設事務所

長野県埋蔵文化財センター



笹原上第1遺跡 航空撮影



笹原上第2遺跡 航空撮影

序

県営蓼科ダムは、諏訪湖に流入する上川の治水ダムとして、昭和48年度より予備調査がはじめられ、昭和62年度からは実施計画調査に移行し、平成3年度に建設計画が採択されて事業着手となりました。

建設予定地の茅野市は、縄文時代を中心とする大きな遺跡が存在することで全国的に著名であります。特に、特別史跡に指定されている尖石遺跡は、縄文時代集落研究の発端となった遺跡で、今も多くの人々が訪れ、4000年から5000年前の縄文の世界に思いを馳せています。また、国宝である「縄文のビーナス」や「仮面土偶」が発見されるなど、全国的な話題に事欠かない地であります。

本事業実施予定地内には、遺跡は周知されていませんでしたが、周辺の状況を考え合わせると、遺跡がないとは考えられませんでした。そうした中、長野県教育委員会が試掘調査を行った結果、予定地内から笹原上第1遺跡と第2遺跡の2遺跡が発見され、改めて遺跡の宝庫であることが浮き彫りになりました。

両遺跡は、縄文時代集落が密集する地より、八ヶ岳山麓寄りの若干標高が高い地に位置しております。こうした場所から、今回の調査で陥し穴ととらえられる遺構が少なからず発見されたことは、縄文人の生活や行動様式を解明する上で、大切な情報が得られたこととなります。



一方、本事業は田中知事の「脱ダム」宣言後、3年にわたって多方面からの検討がなされ、最終的に事業は中止されました。今回実施した発掘調査の成果は、八ヶ岳西南麓の縄文文化をより具体的に解明するための大切な資料であります。ダム建設事業は中止されましたが、関係者のご理解があってこうして発掘調査報告書として公表できることはうれしい限りであり、今後の研究に大いに役立てていただきたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業そして報告書刊行に至るまで、ご理解とご支援を賜りました諏訪建設事務所、茅野市、茅野市教育委員会など関係諸機関、ご指導いただいた長野県教育委員会、ご協力いただいた地区の地権者・関係の方々、発掘作業や整理作業に献身的に携わっていただいた補助員の皆様方に、心から感謝申し上げます。

平成17年1月14日

財団法人 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
所長 小沢 将夫

例言・凡例

- 1 本書は、長野県諏訪建設事務所による県営蓼科ダム建設に先立ち、緊急発掘調査された茅野市大字豊平地籍に所在する笹原上第1遺跡、笹原上第2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、長野県諏訪建設事務所の委託を受けた長野県教育委員会が(財)長野県埋蔵文化財センターに委託して実施した。
- 3 実際の業務は、上田調査事務所が平成8年度に発掘調査を行い、平成9年度に整理作業が一部終了した。平成9年度をもって(財)長野県埋蔵文化財センターは解散となり、平成10年度からその業務を引き継いだ(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが、平成12年度・13年度・16年度に整理作業を実施し、平成16年度に整理作業および印刷刊行業務を行った。
- 4 上記遺跡の調査および整理概要は、すでに『長野県埋蔵文化財センター年報13・14・17』で紹介されているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 5 本書で掲載した地図は、長野県諏訪建設事務所ダム課作成の蓼科ダム平面図(1:1000)・同ダムサイト仮設備全体配置図(1:2,500)・同ストックヤード造成及び道路計画平面図(1:1000)・建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000および1:50,000)を使用した。なお、今回は旧日本測地系に基づいた。
- 6 測量基準点設置および航空撮影・測量は御新日本航業に委託した。
- 7 本書は、第1章第1節1項を市澤英利調査部長が執筆し、第5章を除くその他は宇賀神誠司の素稿をもとに桜井秀雄が加筆修正及び編集を行った。第5章は桜井が執筆した。また市澤英利調査部長・廣瀬昭弘調査第1課長が全体を校閲した。
- 8 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸氏・関係機関に御指導・御支援を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表する次第である(敬称略、順不同)。
鶴飼幸雄、守矢昌文、小池岳史、澤谷昌英、平出一治、小松隆史、臼田武正、田村 彬
- 9 本書で報告した各遺跡の諸記録類および出土遺物は、本書刊行後に茅野市教育委員会へ移管する。
- 10 遺構実測図のスクリーンパターン等の表現は下記のとおりである。
平面図 網点スクリーンパターンはローム質土で埋められた掘り方をあらわす。
断面図 黒色土  ロームブロック主体土 
- 11 本書に掲載した実測図および遺物写真は、原則として下記のとおりである。
陥し穴・土坑実測図 1:50、土器実測図 1:4、土器拓本図 1:2、大形石器実測図 1:3、小形石器実測図 2:3、土器写真 2:3及び1:2、大形石器写真 1:2、小形石器写真 1:1

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経緯及び調査経過	1
2 調査及び整理体制と実施内容の概要	7
第2節 調査の方法	9
1 発掘調査の方法	9
2 整理の方針と報告書の構成	10
第2章 遺跡の位置と環境	11
第1節 遺跡の位置と地理的環境	11
1 遺跡の位置と地形	11
2 遺跡周辺の地質	11
第2節 歴史的環境	12
第3章 調査結果	17
第1節 基本土層	17
第2節 遺構	17
1 笹原上第1遺跡	18
(1) 陥し穴	18
(2) 土坑	29
2 笹原上第2遺跡	30
(1) 陥し穴	30
(2) 土坑	48
第3節 出土遺物	49
第4章 成果と課題	72
第1節 陥し穴の分類	72
第2節 陥し穴の時間的位置づけ	74
第3節 陥し穴の配列とその意味	76
第4節 陥し穴の「貼壁」について	78
第5章 まとめ	87

写真図版

報告書抄録

第1章 序 説

第1節 調査の経過

1 発掘調査に至る経緯及び調査経過

蓼科ダムは、茅野市大字豊平地籍に上川の治水計画の一環をなす治水ダムとして計画され、平成3年度にその建設が採択され、事業着手となった。

今回のダム建設予定地は特別史跡尖石遺跡を始めとして数多くの縄文時代の遺跡が密集する地帯より若干標高が高く、また森林などに利用されていたため遺跡は周知されていなかった。しかし、西側に広がる台地上には渋川原・細沢・長野夕下・外丸戸遺跡などが知られ、尾根を一つ隔てた北の谷を流下する渋川に沿っては、旧石器時代の遺跡として著名な渋川遺跡をはじめいくつかの遺跡が知られている。こうした周辺状況に加えて、予定地は黒曜石を産出する麦草峠と尖石遺跡を始めとする遺跡密集地帯との中間に位置することから、黒曜石の運搬・交易にかかわる遺跡の存在が予想された。

そこで、長野県教育委員会（以下県教委という）文化課（現文化財・生涯学習課）は、ダム建設予定地内ならびに同時に行われる県道渋の湯・堀線新設部分について、茅野市教育委員会（以下茅野市教委という）の協力も得て、平成7年8月21日から9月6日にかけて遺跡の有無およびその範囲を確認する目的で試掘調査を行った。対象面積270,000㎡に対して、調査は用地買収及び森林の伐採が終了している箇所での踏査による遺物の表面採集、重機を用いたのトレンチまたはグリッド掘削、人力による掘削などの方法により実施された。試掘調査は便宜的にA～Iの6地区に区分して行った。

その結果の報告（1996 長野県教委「蓼科ダム建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書」）によると、予定地内の2地区から、陥し穴と黒曜石の散布地が発見され、2箇所遺跡が存在することが判明した。ただし、2箇所の遺跡ともその範囲は確定できず、用地買収などが完了したところで、試掘調査を行う必要があるとされた。また、未買収未伐採で調査できない部分では、今後試掘調査が必要であるとされた（第2図）。

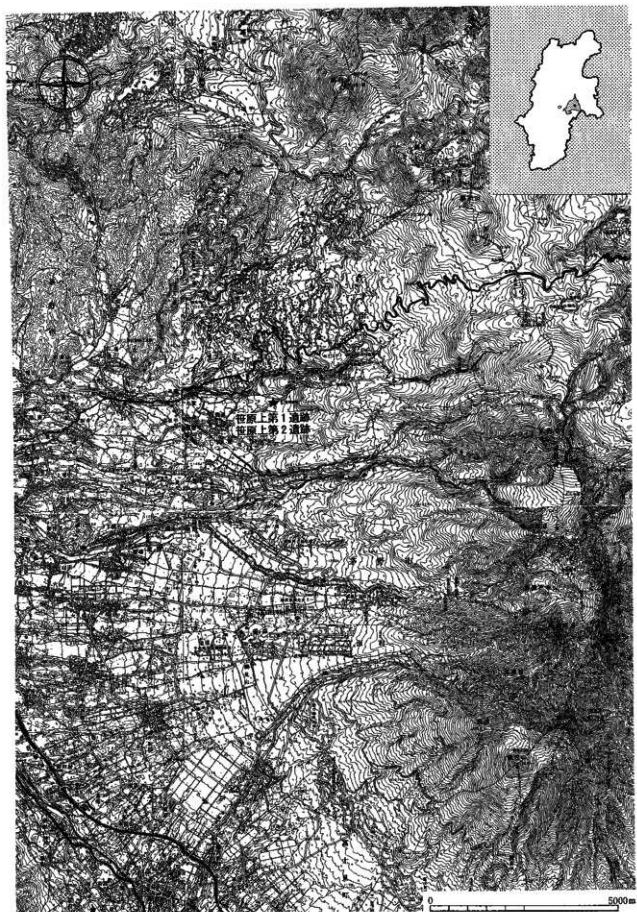
発見された遺跡は、茅野市教委より笹原上第1遺跡（茅野市遺跡番号No.321）、笹原上第2遺跡（茅野市遺跡番号No.322）と命名され、遺跡発見届が提出された。

こうした経過を受けて、平成7年11月、諏訪建設事務所（以下諏訪建という）から埋蔵文化財包蔵地内の土木工事実施届が提出された。同年12月、（財）長野県埋蔵文化財センター（以下埋文センターという）は、事前協議結果にもとづき再遺跡の本調査および試掘調査を受託するよう、県教委文化課（現文化財・生涯学習課）からの通知を受けた。当時、埋文センターは長野調査事務所と上田調査事務所とで業務を行っていたが、諸事情を考慮した結果、上田調査事務所を担当することにした。

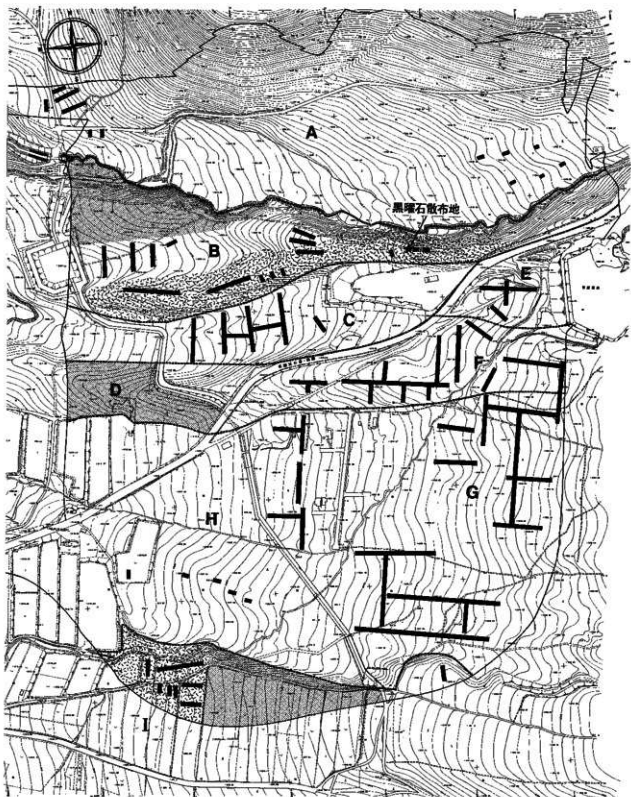
平成8年8月より笹原上第2遺跡の本調査に着手し、試掘調査範囲である北尾根部分にトレンチを入れたところ陥し穴群が発見され、北尾根一帯の面的調査も行った。

また、第1遺跡と第2遺跡の中間部分の試掘調査は、稜線中央の一部で立木トラスト運動があったため、それを避けてトレンチを尾根筋に沿って1本入れ、東端で陥し穴1基を確認した。周辺への展開はもちろんのこと、県道渋の湯・堀線以東にも広がる可能性も推察され、一帯の本調査が必要と判断した。しかし、立木トラスト運動は継続されるとのことから、とりあえず本調査は先送りすることとした。

第1遺跡の調査は東端部から開始した。調査対象範囲の3分の2は試掘対象部分であったが、一帯は連



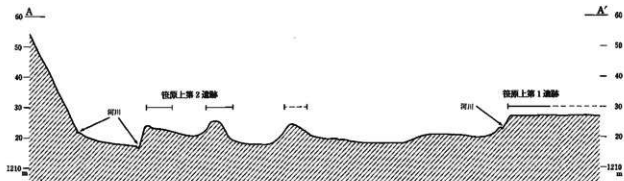
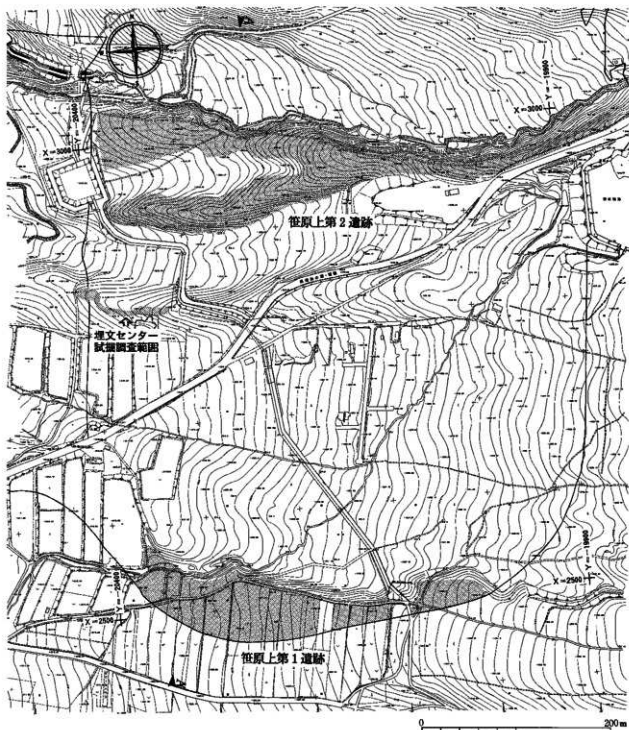
第1図 道路の位置



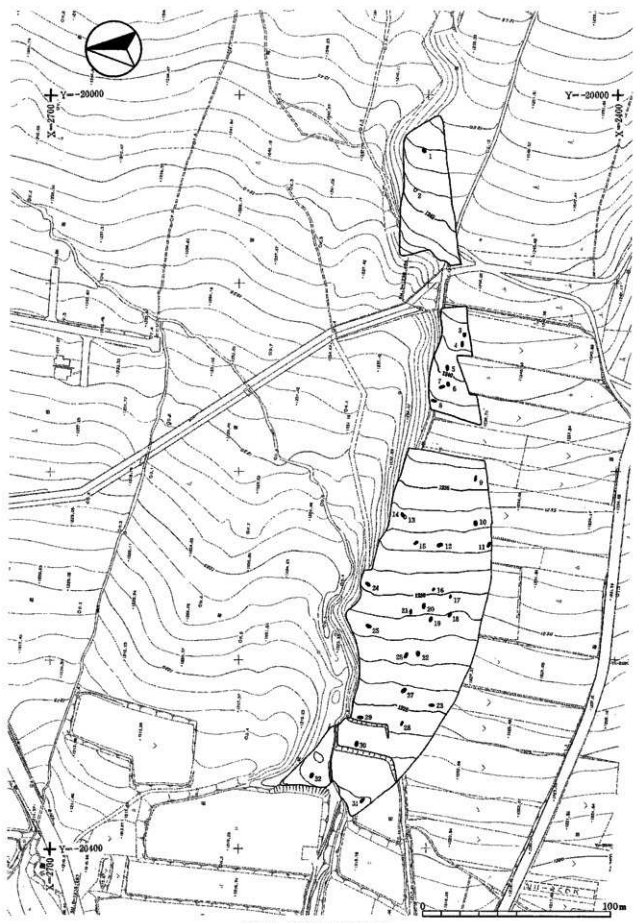
-  本調査必要範囲
-  試掘調査必要範囲

0 200m

第2図 試堀トレンチ



第3図 菅原上第1遺跡、第2遺跡 地形調査範囲



第4圖 第1遺跡 遺構配置



第5圖 第2選跡 遺構配置

続する帯状台地面であることから、遺構の存在が予想でき、面的調査した。

こうした調査経過により、笹原上第1遺跡は13,350㎡、第2遺跡は24,150㎡を面的調査し、平成8年10月末に現場調査を終えた。実働調査日48日、協力いただいた発掘作業補助員数276名である。

平成9年度には両遺跡の整理作業を行い、版下作成、原稿執筆が残された。平成10年度になってダム本体建設予定地の南西部分に計画された仮設ヤード造成に伴う埋蔵文化財の保護協議が行われた。計画地一帯でも、周知の遺跡はなかったが、笹原上第1遺跡の隣接地であることからその広がりが予想できた。そこで、平成11年度、12年度にかけて計画地一帯の試掘調査及び本調査を行うこと、笹原上第1遺跡と第2遺跡の間にある未調査部分についても用地状況などが解決したところで調査すること、本事業にかかわる調査報告書はダム本体分及び仮設ヤード分を含めて刊行することとなったが、仮設ヤード造成計画地及び中間未調査部分の調査は実施することなく経過した。

平成13年2月、田中知事による「脱ダム宣言」がなされ、藝科ダム建設計画も見直しが迫られることとなり、事実上事業推進は凍結された。埋文センターでは、調査を終えた笹原上第1遺跡、第2遺跡に関しての報告書は刊行できるように諸準備を整え、事態の進展を見守ることとなった。

平成15年4月、治水・利水対策推進本部会議で藝科ダム建設中止の方針が承認された。埋文センターでは、このことを受けて、残務整理を担当する諏訪建と興教委文化財・生涯学習課を交えて、今後の対応策を協議し、平成16年度に藝科ダム建設計画に伴って実施した笹原上第1遺跡、第2遺跡の報告書を刊行することとなった。

2 調査及び整理解体制と実施内容の概要

発掘調査及び整理作業における年次ごとの組織・体制は以下の通りである。

平成8年度 (財)長野県埋蔵文化財センター

理 事 長	戸田正明	上田調査事務所長	小林秀夫(兼)
副 理 事 長	佐久間鉄四郎	庶務課長	山口栄一
事 務 局 長	青木 久	主 事	石坂 裕(～9月30日)
総 務 部 長	西尾紀雄	主 任	小岩一男(10月1日～)
調 査 部 長	小林秀夫	調査第一課長	臼田武正
		調査第二課長	廣瀬昭弘
		担当調査研究員	宇賀神城司・桜井秀雄

調査日誌抄

8月19日 本日より発掘調査を開始する。

第2遺跡の本調査対象範囲の表土剥ぎを先行して行うこととする。

下旬からは試掘対象範囲の調査に移る。北尾根部分の試掘トレンチの結果、緩慢ながらも陥し穴群の存在が判明したため、北尾根一帯については面的調査に切り換え、重機による表土剥ぎを継続して実施。

9月にはいと第1遺跡の調査にも着手。第1遺跡では3分の2程が試掘対象範囲であったが、ここでも試掘トレンチの結果、陥し穴群の存在が明らかとなり、面的調査に切り換えて実施。

9月10日 作業員の従事を開始。

10月2日 業者委託の基準点設置を実施。

10月23日 第1遺跡・第2遺跡ともにセスナ機による航空撮影および航空測量を行う。航空撮影・測量後には逆茂木痕の断ち割りを開始。また、記録類の確認および器材の撤収準備も始める。

10月31日 すべての調査を終了する。

なお、担当調査研究員の他にも、相沢秀樹・上田真・河西克造・川崎保・田中正治郎・田村彬・寺内隆夫・鳥羽英継・平出潤一郎・宮島義和・両角英敏・柳沢亮・若林卓の各調査研究員の応援もあった。

平成9年度 (財)長野県埋蔵文化財センター

理 事 長	戸田正明	上田調査事務所長	小林秀夫(兼)
副 理 事 長	佐久間鉄四郎	庶務課長	山口栄一
事 務 局 長	青木 久	主 任	小岩一男
総 務 部 長	山崎悦雄	調査第一課長	白田武正
調 査 部 長	小林秀夫	調査第二課長	廣瀬昭弘
		担当調査研究員	宇賀神誠司

報告書刊行にむけた基礎整理作業を実施。本年度をもって(財)長野県埋蔵文化財センターは解散し、平成10年度からは(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター(以下、ともに埋文センターという)がその業務を引き継ぐこととなった。

平成12年度 (財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

理 事 長	吉村午良(10月25日まで)	調 査 部 長	小林秀夫
	田中康夫(10月26日から)	調査第一課長	百瀬長秀
所 長	佐久間鉄四郎	調査第二課長	土屋 積
副所長兼管理部長	春日光雄	担当調査研究員	宇賀神誠司
管理部長補佐	宮島孝明		

原稿執筆・版下作成を除く整理作業を実施した。

平成13年度 (財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

理 事 長	田中康夫	調 査 部 長	小林秀夫
所 長	深瀬弘夫	調査第一課長	百瀬長秀
副所長兼管理部長	春日光雄	調査第二課長	土屋 積
管理部長補佐	田中照幸	担当調査研究員	宇賀神誠司

原稿執筆および版下作成を伴う整理作業を実施した。

平成16年度 (財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

理 事 長	田中康夫	調 査 部 長	市澤英利
所 長	小沢将夫	調査第一課長	廣瀬昭弘
副所長兼管理部長	藤岡俊文	調査第二課長	平林 彰
管理部長補佐	上原 貞	担当調査研究員	桜井秀雄

原稿加筆修正および編集を中心とした整理作業と報告書の印刷・刊行業務を実施した。

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査にあたっては、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に基づいて、具体的な調査計画を策定し、発掘調査を実施した。

(1) 遺跡の名称と遺跡記号

遺跡名は県教委作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また埋文センターでは記録の便宜を図るため、大文字アルファベット3文字で表記される独自の遺跡記号を用いている。頭文字の「G」は長野県内を9地区に分割したうちの諏訪地区を示し、2番目・3番目の文字は遺跡名を省略したものである。

今回の発掘調査は笹原上第1遺跡と笹原上第2遺跡の2つの遺跡にまたがるが、遺跡記号は「笹原上」＝「SASAHARAUE」の頭文字である「S」と「H」を利用し、「GSH」という遺跡記号を各種台帳や遺物の注記に使用している。

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても埋文センターでは独自の遺構記号を用いている。今回の発掘調査では陥し穴と土坑しか検出されていないため、調査段階ではすべて「SK」（ゴミ穴・貯蔵穴・墓穴・陥し穴などを含めた土坑）と呼称した。遺跡記号と同様に記録の便宜を図るため、記録類・遺物の注記にもこの遺構記号を使用した。

ただし、本報告書では利用者の便を考慮し、原則として記号は用いず、「陥し穴」、「土坑」の表記を主体とした。

(3) 調査区の設定

埋文センターでは、国土地理院の平面直角座標系の第Ⅷ系を基にグリッドを組んでいる。それは以下の通りである。

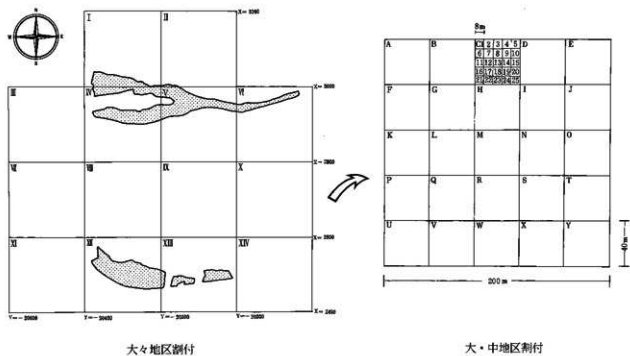
- ア 調査区は、国土地理院の平面直角座標系の第Ⅷ系を基点に200mの倍数値で200m×200mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査範囲をカバーする最小限に抑え、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字を与える。
- イ 大々地区を40m×40mの25区画に分割した一区画を大地区とする。大地区は北西から南東へA～Yのアルファベットを与える。
- ウ 大地区は、更に8m×8mの25区画に分割して、一区画を中地区とし、遺構測定の割り付け線とする。北西から南東へ1～25の番号を与える。
- エ 大地区を2m×2mの400区画（中地区：16区画）に分割し、小地区とする。小地区は大地区の北西隅を起点とし、X軸上に西から東へA～Tのアルファベットを、Y軸上に北から南へ01～20の数字を与え40区画分し、両者をもって小地区名とする。

本遺跡の発掘調査でも上記の方法に基づいて地区設定を行ったが、小地区は、遺跡の性格上、必要を認めなかったため設定しなかった。現場における地区設営は、業者委託で実施した。標高は公共水準点を利用して、ベンチマークを設定した。遺構測量は中地区を割り付け線として、オートレベルを利用した簡易遣り方を用いたが、全体図およびコンタ図に関しては業者委託の航空写真測量を採用した。

2 整理の方針と報告書の構成

整理作業は、遺物の洗浄と注記から開始し、遺物台帳の作成を経て、接合・復元、図化等へと進めた。併行して図面・写真の分類・整理等も行った。

遺物についてはすべてのものを掲載したが、県教委試掘分で得られたものについては含まれていない。



第6図 地区割付・グリッド

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

1 遺跡の位置と地形

笹原上第1遺跡・笹原上第2遺跡は、長野県茅野市豊平東嶽4732・4734番地ほかに所在する。

ハッ岳連峰は赤岳を主峰として山並みが連続し、夏沢峠を境に北ハッ岳と南ハッ岳に分けられる。

笹原上第1遺跡・第2遺跡は、北ハッ岳連峰側に位置しており、丸山（標高2,329m）の西裾に所在する。山腹急斜面から山麓緩斜面への変換点に当たる、いわばふところ部分に相当する。標高は1,200～1,250m前後をはかり、一部畑地となっているが、原野・山林が大半を占める。

北ハッ岳の裾野のうち、柳川以北の泉野・豊平・湖東・北山・米沢の地区は一般に「北山浦」と呼ばれる。この地域は、およそ1,500mから800mの場所に、西に向かって高原状の広大な裾野をもつ。神川・渋川はもちろんのこと、山腹を解析する小河川や沢は水豊富で、標高1,000m前後では地下水の湧水点が各所でみられる。全体としては火山麓特有の長峰状の台地を形成しているが、標高1,000m以下では台地はさらに分岐され、また地形も複雑になる。逆にそれより上部、火山麓の頂部に近いところでは、一般に「広原」と呼称され、文字通り平らで、ひとつづきの広い原を形成しており、笹原もそうした地形の場所であることに由来する地名である。

北山浦の裾野は平均傾度にも異なりをみせ、主に湧水地点の点在する標高1,000m前後をもって一段と緩やかな傾斜へと変容する。笹原上第1遺跡・第2遺跡はその裾部の頂点にあたる。第1遺跡の場合は平均傾度も緩やかで、最大幅300m前後、長さは1km余に及んでいる。南では小河川が、北側では途中から沢程度の小溪流が合流するが、谷との標高差はともに約10mにも及ばない小規模なものであった。一方第2遺跡では逆Y字状に下り落ちる急峻な尾根上に営まれたもので、長さは700m前後と予想され、起伏があるものの幅は最下段が最も広く最高で約100m強を測る。北側では時折、小さな溪流が流下するようで、その痕跡を容易に認めることができた。Y字部分最先端で尾根頂部と谷部との標高差を比較すると、南尾根とその北側の谷および南北の尾根と中間の谷は、いずれも約10mにも及ばないものであるが、北尾根から先は極端に深く15m前後となり、東に行くほどその差は増していく。また東西に延びる長峰状の尾根で、どの尾根も南側が緩やか、北側が急峻という傾向を示しており、第1・第2遺跡とも同様である。とりわけ第2遺跡では今なお北尾根の北斜面が徐々に崩落しており、失われた遺構も少なくないのではないかと考えられる。

2 遺跡周辺の地質

ハッ岳は多くの噴火口をもつ火山群からなり、多くは富士山などと同様の火山で、下部には緩やかな傾斜の広い裾野をもつ。この広い裾野を山腹から流れ出した川や、山麓の途中から湧き出す地下水による小溪流が、ハッ岳を中心とする放射状の必縦谷（コンセクエント・リバー）を作りだし、頂部から末端に向かって縦に長い様々な台地を形成している。

北山浦は、弧状に展開するハッ岳火山列のうち、第四紀ウルム氷期以後、北ハッ岳の火山活動によって流出した火砕流堆積物などに覆われている。それ以前に堆積した古ハッ岳期火砕流や泥流などに覆われた大泉山・小泉山・柳川を境とする南山浦地域によってさえぎられ北ハッ岳火砕流は、西斜面を滑り落ち、

その大部分が火山列の西麓であるこの地域に、より厚く多量で、しかも標識的に発達しているという(河内・北沢・小林 1967)。そのために北山浦のハヶ岳山麓部は北西に緩く傾斜した面を成すという特徴をもち、山麓を解析する河川や沢は西に流れ、いずれ上川に合流するという性格をもっているという。

この地域における第四紀層の北ハヶ岳溶岩丘群形成期の火砕流堆積物は、糸萱火山角礫岩→福沢砂泥層・糸萱火砕流・日影田火砕流(浸食期)→長倉礫層⇒中村泥炭層(ここで中村泥炭層としたものは、下位より中村沢泥炭層および水成堆積のローム層・中村火砕流・泥炭層・およびローム層と砂層などからなる)⇒菅沢火砕流(軽石流・スコリア流・泥流・火山灰流・石質岩片・に富む火砕流などからなり、多量の木片を含み2層の泥炭層によって下・中・上部層に3分される)→(活動休止)→大塩砂礫層(砂・礫・泥・ローム層および泥炭層)⇒大塩火砕流(石質岩片・軽石に富む火砕流・火山灰流)⇒ローム層(⇒は整合、⇒は不整合)という順序となる(河内・北沢・小林 1967)。今回の調査区の東側に位置する笹原溜池付近で土層観察が行われており、糸萱火砕流堆積後、風成のローム層が引き続いて堆積するのみで、北山浦の地でも最も古い地形面が残されているという(北沢・薩摩・小林 1975)。風成ローム層の堆積はわずかであり、実際には糸萱火砕流上面が遺構確認面である。

第2節 歴史的環境

茅野市域の諸遺跡の概要や各時代の様相については、既に『茅野市史』上巻(戸沢ほか 1986)で述べられている。ここでは、北山浦地域を中心に概観してみたい。

ハヶ岳・霧ヶ峰は本州最大の黒曜石の産地として知られており、本遺跡群にほど近い流川の流域にも黒曜石の大露頭がみられる冷山がある。その麓には後期旧石器時代の遺跡群である流川遺跡群(No.5・6)が存在し、原産地周辺の遺跡の在り方を明確に示すもので、標高は1,600m前後をはかる。また時期は下るが、周辺にも同様の遺跡がいくつか発見されており、冷山産黒曜石の石器生産方法や各地への流通方式なども徐々に判明しつつある。

縄文時代にはいと、草創期は山麓部でごく少数の遺物が採集されるのみである。早期は山麓・山裾部に点々とみられ、遺跡の増大をうかがわせる。規模などは不明だが、既に押型文土器の段階から後半のそれと同様に出土しているので、第一波は初期の段階に起こってきたに違いない。前期になると遺跡数はさらに増大し、しかも山裾部に増加傾向が認められる。まだ前半段階では著しい量的な差は認められないが、神ノ木遺跡(No.53)といった土器の標識遺跡となったものも存在する。後半にはハヶ岳山麓のみ遺跡数が一気に倍増し、とくに下島遺跡(No.56)など諸磯C式期に顕著であり、生活の舞台が明確に山麓部へと変化していく姿が見て取れる。規模的には中期集落に及ばないものの、重複関係にある場合が多く、中期的な生活の姿態はこの時期から始まったのではないかと考えられる。

北山浦は、「井戸尻文化」と称される日本を代表する中期文化の中でも、有益な地域で、縄文時代の研究の上でも先駆的な学史を有する。国特別史跡の尖石遺跡(No.87)は、日本最初の縄文集落の発掘遺跡として位置づけられ、その調査は戦前から始められていた。

この地域は、標高1,000m前後に豊富な湧水点があり、台地の脇には山腹から流れ出た河川もみられる。台地はより長峰状へと変容していくが、水に不自由することなく、適当な広さをもつ標高1000m以下の台地上の平坦地は、集落遺跡の密集地帯である。植物を採取する林や、獲物となる動物も多数棲んでいたのだろう。その中心が最も温暖化した前期から中期、ことに中期に入って大規模な集落が数多く認められるようになる。学史的には先の尖石遺跡を始め、戦後間もなく行われた与助根遺跡(No.85)の調査も中期

集落の全掘例として著名である。

近年では、中ッ原遺跡 (No.60)・中原遺跡 (No.92)・与助尾根南遺跡 (No.86)・上の平遺跡 (No.26) などで拠点的な中期の集落の一端が調査されており、また聖石遺跡 (No.51) や長峯遺跡 (No.50) などの中期環状集落の完全な姿も窺い知れるようになってきた。

後期になると気候の寒冷化に伴うのか遺跡数は激減する。前半期にはこの時期特有の敷石住居跡などが発見されているが、後半期になると北山地区の山麓北端部1ヶ所で、無人の世界となってしまふ。なお、全国的に話題となった中ッ原遺跡から出土した仮面土偶は当該期の所産である。

晩期になると遺跡数は若干増加し、上川上流域にその存在が認められるようになる。しかし主体は諏訪盆地縁辺部であり、とくに後半に顕著である。北山浦は原野と化してしまうのである。

弥生時代以降も同様で、生活の主たる場は、茅野市中心街の上川沖積地や、茅野市西部の主な集落が密集する守屋山麓およびその前面に広がる諏訪湖盆の沖積低地で、北山浦という地域は生活の舞台としては利益をなさなかったようである。弥生・古墳・奈良時代の集落は数例しかなく、もちろん古墳は確認されていない。

平安時代でも古代末期、10世紀後半以降になると小集落が進出してくる。こうした状況はほかの地域でも同様であり、これについては、律令体制の崩壊に伴う社会変動がその主たる要因と考えられよう。そして、こうした小集落も約100年余りで終わりを遂げることになる。

引用・参考文献

- 河内晋平・北沢和男・小林武彦 1967 「八ヶ岳北西山麓の火砕流堆積物— 八ヶ岳火山列・円頂丘形成期の火山活動 (1)」『地質雑誌』73号
- 北沢和男・蘆摩林忠美・小林賢一 1975 「第Ⅱ章地質 第9節第四紀層」『諏訪の自然誌 自然編』諏訪教育会刊行
- 戸沢充則ほか 1986 『茅野市史』上巻



第7図 茅野市東部の遺跡分布

宇野市 遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生			古墳	奈良	平安	中世	その他	
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	中期						後期
2	堀ノ平	●				●										
3	十文字平	●														
4	野石		●	●												
13	畑宮岩塚	●		●	●	●	●			●				●		
14	上の畑		●	●	●						●					
15	キツ水産					●										
16	矢の口					●								●		
17	上之段			●	●	●	●				●					
18	高黒呂		●	●	●									●		
19	菅田					●										
20	栞影				●	●								●	●	
21	上の平				●											
22	湯川緑塚														●	
23	イモリ沢			●						●						
24	エゲ溝								●							
25	蝦山			●	●											
26	上の平	●			●	●										
27	丸山				●	●										
28	よせの台		●	●			●									
29	栗の木	●			●	●					●					
30	一ノ瀬	●			●	●	●							●		
31	鳥の塚				●	●										
32	大六段上					●								●		
33	大六段					●										
34	駒形	●	●	●	●	●	●							●		
35	犬清水					●										
36	上の山					●										
37	竹林		●	●												
38	三軒屋															
39	大段			●	●	●	●				●			●		
40	八幡					●	●								●	
41	中ノ平					●	●									
42	丸山		●	●						●						
43	畑石				●	●										
44	畑石	●	●	●	●	●	●			●				●	●	
45	畑石				●	●										
46	畑石		●	●	●											
47	下段塚					●										
48	掛井戸					●										
49	高塚					●										
50	長峯	●				●	●									
51	釜石	●				●	●							●		
52	津ノ原		●			●										
53	神ノ木			●												
54	上ッ塚					●										
55	下ッ塚					●										
56	下島			●							●					
57	松原					●										
58	山口					●										
59	新井下					●		●						●		
60	中ッ塚			●	●	●										
61	赤溝					●	●									
62	赤塚				●											
63	中村					●										
64	下管沢				●											
65	高黒戸															●
66	上半田										●			●		
67	子の神					●										
68	中塚					●	●									
69	宮の上			●	●	●					●					
70	八幡社前													●		
71	山寺													●	●	
72	経塚					●								●		
73	権隈林								●					●		
74	日向上			●	●	●	●							●		
75	築之目武					●	●							●		
76	中ッ丸木					●								●		
77	釜ノ木			●	●	●								●		
78	畑石					●	●							●		
79	向原	●				●	●							●	●	
80	立石					●	●							●		
81	塚					●								●		
82	水沢		●			●								●		
83	中ッ原A				●	●	●							●		
84	神立林					●	●							●		
85	本助尾道	●	●	●	●	●								●	●	
86	本助尾道南		●	●	●	●								●		

第1表 周辺の遺跡 地名表(1)

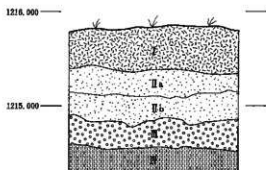
茅野市 遺跡番号	遺跡名	巨石類	縄 文					弥 生			古墳	奈良	平安	中世	その他
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	中期					
87	公石			●		●									
88	新神甲			●										●	
89	新水跡A				●	●	●								
90	梅田	●			●									●	
91	梅田跡A	●			●	●	●			●				●	
92	中原				●										
93	細沢									●					
94	相模		●	●	●				●					●	
116	塚の跡古墳										●				
156	上の原					●									
157	取田白岡					●									
158	茅野知田				●	●	●	●			●			●	
160	上の平				●	●	●							●	●
168	上見				●	●	●								
172	丸生戸				●	●									
173	城山城跡														●
174	高瀬宮跡					●								●	
175	高瀬沢Ⅱ					●									
176	高瀬沢Ⅰ				●	●									
177	夕立					●									
201	御射鹿池下	●				●									
202	赤堂					●									
203	御倉城跡					●									●
204	高瀬沢A			●		●								●	
205	高瀬沢B					●									
206	電神平下					●									
207	新水跡B					●									
208	雀塚遺		●	●	●	●	●								
209	神田跡B	●			●	●	●								
210	威力不動尊東				●	●	●								
211	谷田城跡	●			●										●
212	瓦割跡					●									
213	田部石					●									●
214	高瀬原城跡									●					
215	堀原田									●					
216	長久保									●					
217	長塚城跡														●
218	土佐屋敷				●			●			●	●			●
219	御座石神社					●									●
220	御松山城跡					●									●
226	東沢城跡														●
233	矢倉田					●									
236	砂部塚A					●									
239	湯原					●									
240	砂部塚B														不明
241	牛ノ原									●					
242	関久保														不明
243	鹿野前														不明
244	樽入														不明
246	中島														不明
254	石塔塚														不明
255	上ノ堀														不明
256	中ヤツカ百塚										●				
277	広畑	●	●												
279	横谷岩塚									●					
282	石田家屋敷										●				
284	日向前														
289	藤原上					●									
290	塚														遺世
291	芥天原		●	●		●									
293	浪川原									●					
294	横次									●					
295	長野沙下									●					
296	外丸戸									●					
304	梅田跡C					●	●							●	
312	瓦塚			●	●	●									
313	久保御堂			●		●								●	●
315	石塚									●				●	
317	トウアミ									●				●	遺世
321	菅原上第1									●				●	
322	菅原上第2									●				●	
327	別白沢					●	●								
328	町道下					●									

第1表 周辺の遺跡 地名表(2)

第3章 調査結果

第1節 基本土層

第1遺跡の平坦地では、畑の耕作がローム面まで達しているところが多く、第2遺跡は尾根状地形のため堆積が薄い。このような条件のため遺跡の基本土層を明確には把握しにくい状況であったが、両遺跡とも類似した土層が認められたため、第2遺跡西端での土層をもって、基本土層として提示する。



第8図 基本土層

- | | |
|---------------|---------------------------------------|
| 第 I 層：黒色土 | 腐食土・耕作土。粘性が弱くしまりも悪い。ローム粒子はほとんど含まない。 |
| 第 II a 層：黒褐色土 | 土壌化がすすみ、均質で、粘性がややあり、しまりもよい。 |
| 第 II b 層：黒褐色土 | 粘性がややあり、しまりがよい。全体に細かいローム粒子を含む。 |
| 第 III 層：褐灰色土 | ローム層や II b 層がブロック状に混在する。粘性があり、しまりもよい。 |
| 第 IV 層：明黄褐色土 | ハードローム層で堅くしまりが強い（本層上面で遺構検出した）。 |

第2節 遺 構

笹原上第1遺跡では土坑32基、笹原上第2遺跡では土坑57基が検出され、土坑以外の遺構は確認されなかった。笹原上第2遺跡の試掘調査で確認された黒曜石散布地は、極端に薄い第I層を剥ぐと直下で第IV層となり、遺物も遺構も検出されなかった。

土坑の機能については、陥し穴と考えられるものが笹原上第1遺跡で30基、笹原上第2遺跡で51基の計81基で、それ以外のものは8基ある。調査段階ではSKの略称記号を用いたが、本書では、陥し穴の機能をもつものを「○号陥し穴」、それ以外のものを「○号土坑」として報告する。ただし、遺構番号についてはSK番号と同じである。

また、本遺跡では長楕円形を呈するものが多いため、土層観察は短軸方向で行うケースが大半で、そのため坑底にビットを有する陥し穴については数基を除いて、完掘・測量後に、長軸方向に断ち割り作業を行い、ビットの断面形の正確な把握を目指した。その結果はできる限り、平面図・断面図に生かすように努めたが、図では表現しきれなかったところも少なくない。その場合は断面写真および文章で補っている。

1 笹原上第1遺跡

(1) 陥し穴

1号陥し穴(第9図、P L1)

位置：ⅦO-12グリッド、崖線寄りの尾根平坦面に位置する。

主軸：尾根軸と45°振れる。

規模：上面=212×114cm、中段=176×50cm、下面=147×35cm、深さ=88cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられ、最上部が黒色土、以下はロームブロックを含む混土層となる。いずれも自然堆積と考えられる。

施設：坑底に7基のピットが認められ、平面図下方の4基については、それぞれ2基一対となっている。いずれも逆茂木を設置したものと考えられる。これら2基一対になるピットについては、断面図では明瞭には表現されていないが、掘り方は1つである。そして逆茂木痕と想定される黒色土部分がまず確認され、さらに両者を含めた周囲全体をローム質土が囲っていることが理解できた。ピットの断面形態は幅の細い円筒状を呈している。また、中央にみられる深さ33cmのものの断面形態は円筒状である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。

3号陥し穴(第9図、P L1)

位置：ⅦQ-5グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=192×108cm、中段=168×77cm、下面=161×57cm、深さ=130cm

形状：上面・中段・底面ともに長楕円形を呈する。

覆土：7層に分けられる。上部の1・2層が黒色土系のもので、特に1層は基本土層II層近似土である。下部には長軸の両壁面に張り付くように4層のロームブロックがあり、その間にロームブロックを多く含んだ2・3層の混土層が存在する。最下層には黒褐色土の7層が認められる。4層については堅くしまりの強いローム質土であり、調査段階で「貼壁」と判断したものである。このような事例は本遺跡では多くみられるが、以下、「貼壁」との表現で報告していきたい。

施設：坑底には7基のピットが認められるが、西側壁下の2基は浅く、これについては逆茂木を設置したピットという判断はしがたい。平面図中央のピットおよびその上方・下方に配された2基一対のピットが逆茂木の基本的な姿と考えられる。なおピットの断面形態は、中央のものが幅の広い円錐状を呈し、他は非常に幅の狭いものであった。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。「貼壁」有り。

4号陥し穴(第9図、P L2)

位置：ⅦL-24グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=255×86cm、下面=229×44cm、深さ=55cm

形状：上面・底面ともに隅丸長方形を呈する。

覆土：3層に分けられる。大きくは上下2層に分けられ、1層に黒色土、2層にローム粒子を含んだ混土層が存在する。底面付近には3層であるロームブロックを多く含んだ混土層もみられる。自然堆積と考えられる。

施設：坑底には8基のピットが認められる。このうち長軸上に並ぶ3基のピットが逆茂木の基本をなすものと考えられる。これら3基については、断ち割りにより、円筒状の掘り方が存在しており、逆茂木痕と想定される黒色土の周囲はローム質土で囲われ、さらにその部分がほかよりもやや盛り上がる状態であったことが判明した。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

5号陥し穴（第9図、P L2）

位置：VII L-17グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=232×147cm、中段=184×89cm、下面=175×68cm、深さ=81cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1層が基本土層II層に近似する黒色土である。3層は純ロームブロック層で長軸両壁際に立つようにして堆積し、全体として上部にいくほど幅が厚くなる。「貼壁」の可能性もあるが、判断は保留しておきたい。最下層には堅くしまりの強い5層の黒色土が堆積しており、この上面が底面として機能していたことがうかがえる。

施設：坑底には14基のピットが認められる。中軸線上には二つのピット群が並び、平面図上方のものは小ピット2基で、平面図下方のものは小ピット3基でそれぞれ構成されている。ともに内側には逆茂木痕と想定される黒色土が、その周囲全体をローム質土が充填され、逆茂木痕2基ないし3基に対して、それぞれ大きな掘り方が認められる。黒色土部分についてはやや細めの円筒状を呈していることは確かで、また下端部で結合している。その他の小ピットについては逆茂木として、機能していたかどうか定かではない。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIA類。「貼壁」の可能性有り。

6号陥し穴（第10図、P L2）

位置：VII L-16グリッド、崖線寄りの尾根平坦部

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=200×133cm、下面=133×56cm、深さ=82cm

形状：上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：4層に分けられる。1・2層が黒色土系で、下部の3・4層が混土層ないしはロームブロックである。ロームブロックについてはほかの土層と明瞭には区分できず、また陥し穴の下部全体に堆積していることから、壁崩落土である可能性が高い。

施設：坑底には6基のピットが認められる。このうち、中央付近にみられる直径25cm以上、深さ60cmを超える大きめのピット1基が逆茂木の基本であると考えられ、断面形態は大きな円錐状を呈している。断ち割りに掘り下げたため、埋設状態の詳細は不明であるが、逆茂木痕の周囲をローム質土で囲っていた可能性が高い。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 I類（その他）。

7号陥し穴（第10図、P L2・3）

位置：VII L-16グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交するが、やや西に振れる。

規模：上面=280×140cm、下面=234×58cm、深さ=75cm

形状：上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1・2層は黒色土系の土層で自然堆積であり、下部はローム粒子・ロームブロックを含む混土層となる。長軸両壁面にはロームブロックが張り付くように認められ、「貼壁」の可能性も否定できないが、やや散漫であり厚く広がるようなことはない。そのため、「貼壁」としての判断は保留しておきたい。

施設：坑底に4基のピットが存在するが、このうち平面図最下方のものについては非常に浅く、逆茂木を設置したピットとしては除外すべきだろう。他の3基については、ピットの断面形態は長めで幅が広い円錐状を呈しており、また平面図上方から3番目（深さ45cm）のものは、断面図では幅が狭く表現されているが、断ち割りにより、実際にはほかと同様の幅を有していることが判明した。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴 III B類。「貼壁」の可能性有り。

8号陥し穴（第10図、P L3）

位置：VII K-15グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=(180以上)×116cm、下面=(168以上)×35cm、深さ=52cm

形状：南側を攪乱により破壊されているが、上面・底面とも長楕円形を呈すると想定できる。壁の立ち上がりがほかの陥し穴に比べて緩やかで、とくに東壁については上部が崩落したかのような形態となっている。

覆土：5層に分けられる。1・2層が黒色土、下部にローム粒子・ロームブロックを含む混土層が堆積しており、自然堆積と考えられる。東壁全体に認められる5層のロームブロックについては、崩落によるものか、あるいは「貼壁」と関連するものかの判断は難しい。

施設：坑底には7基のピットを確認している。このうち、中軸線上に並ぶ3基は深さ20cmを超え、その他については10cm以下である。逆茂木としては中軸上に並ぶ3基が基本をなすものと考えられる。3基とも断面形態は非常に細い円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III類（その他）

9号陥し穴（第10図、P L3）

位置：VII T-5グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=214×83cm、中段=166×41cm、下面=160×35cm、深さ=78cm

形状：上面・中段・底面ともに長楕円形を呈する。

覆土：7層に分けられる。最上層の1層にはほかの陥し穴同様に、黒色土が自然堆積し、中ほどから下部

にかけてはローム粒子・ロームブロックを含んだ混土層となる。7層のロームブロックについては長軸両壁面沿いに認められるが、これは含有量の差をもって細分したものである。

施設: 坑底には6基のピットが認められる。このうち中軸線上にみられる2基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。これらの2基は、上端の幅が広い円錐形を呈しているが、底面は丸底状となる。また掘り方を有し、中央に逆茂木痕と想定される黒色土を、周囲にローム質土を充填している。なお、ピットの上面全体が周囲よりも盛り上がっていることも確認されている。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 II B類。

10号陥し穴 (第11図、P L3)

位置: VII T-2グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸: 尾根軸と平行する。

規模: 上面=217×119cm、下面=162×42cm、深さ=88cm

形状: 上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土: 6層に分けられる。1層が黒色土で、以下混土層が主体となる。自然堆積と考えられる。

施設: 坑底には9基のピットが認められる。坑底中軸線上には深さ40cm前後の4基が存在するが、このうち平面図中央にみられる2基のピットはその掘り方が一つである。逆茂木としてはこれら3ヶ所が基本をなすものと考えられる。またこれらのピットは、断面図には断ち割りの成果が表現されていないが、円錐状を呈し、中央が黒色土、周囲がローム質土で充填された状態であった。なお、ピットの周囲はやや盛り上がっていることが確認されている。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III B類。

11号陥し穴 (第11図、P L4)

位置: VII T-6グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸: 尾根軸と平行するが、やや北に振れる。

規模: 上面=222×98cm、下面=198×57cm、深さ=39cm

形状: 上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土: 掘り込みが浅く、しかも覆土も上下2層にしか分層できない。上部はローム粒を若干含むものの黒色土主体であり、下部はローム粒子・ロームブロックを多く含む混土層である。自然堆積と考えられる。

施設: 坑底には8基のピットが認められる。中軸線上には並列する深さ30cm前後の4基のピットがみられるが、このうち逆茂木としては、平面図最下方のものを除いた3基を基本にしたものと考えられる。なお、断面図には表現していないものの、平面図中央および下方の2基のピットには円錐状の掘り方が確認されており、中央部に逆茂木痕と想定される黒色土を、その周囲にはローム質土を充填していたことが理解される。最上方のものについても同様に掘り方を有する可能性が高い。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III A類。

12号陥し穴 (第11図、P L4)

位置: VII O-16グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交するが、やや西に振れる。

規模：上面=215×106cm、下面=190×50cm、深さ=74cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：8層に分けられる。最上層の1層にはローム粒子の痕跡がわずかに認められるものの黒色土系が主体であり、以下、中央にはローム粒子・ロームブロックを多く含んだ混土層が主要となる。なお、長軸両壁面に沿って堆積する6層のロームブロックは堅くしまりが強く、かつ垂直方向に分布している。ロームブロックそのものも縦方向に並んでおり、「貼壁」として理解すべきものである。

施設：ビットは10基が検出されている。このうち円筒状の掘り方を有する3基が、逆茂木の基本をなすものと考えられる。これらの3基は、坑底面を4分割するように坑底中軸線上に存在する。断面図には表現していないが、掘り方部分にはローム質土を充填し、その上面は周囲の底面より数cm程盛り上げられている。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

14号陥し穴（第11図、P L 4）

位置：VII O—8グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行するが、やや北に振れる。

規模：上面=(218)×136cm、中段=191×81cm、下面=183×50cm、深さ=95cm

形状：13号土坑と重複し、土色・土質の相違により、本跡の方が古い所産であると判断できた。上面・中段とも長楕円形、底面隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1層が黒色土、2・3層が混土層であり、自然堆積と考えられる。第1次堆積物としては不自然な6層の黒色土およびその上層に堆積する、堅くしまりが強い4層のロームブロック主体土は、ともに垂直方向に、しかも長軸両壁面全体に認められ、「貼壁」として理解できるものである。

施設：坑底中軸線上に4基のビットが認められるが、平面図最上方のものについては深さが極めて浅いことから逆茂木を設置したビットとしては除外される。断面図には表現されていないが、3基のビットについては、すべて円錐状の掘り方を有し、中心部周辺に逆茂木痕と想定される黒色土を、周辺部にローム質土を主体的に充填していた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

15号陥し穴（第12図、P L 5）

位置：VII O—6グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と45°振れる。

規模：上面=176×92cm、下面153×49cm、深さ=52cm

形状：上面・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：覆土は7層に分けられる。1層が黒色土、その下部の2・3層が混土層で、これらは自然堆積と考えられる。4層・6層がロームブロックおよびロームブロック主体土であり、長軸両壁面に認められる。

6層は直立方向に堆積している。この6層が「貼壁」であるかの判断は難しいところだが、壁に薄く密着する7・8層や外面に付着するロームブロックの4層の存在は、「貼壁」であることをあらわすものと考えたい。

施設: 坑底には20基のピットが認められる。このうち中軸線上に並ぶ2基のピット(深さ42cm・36cm)と軸上には乗らないが深さ38cmのピットの計3基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。これらに挟まれた深さ15cmのピットについては、斜位でかつ幅が狭いため、木根による攪乱と認定した。これら3基のピットはすべて円錐状を呈しており、逆茂木痕の周囲をローム質土で囲むという掘り方を有している。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

16号陥し穴(第12図、P L 5)

位置: VII N-18グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸: 尾根軸と平行する。

規模: 上面=164×89cm、下面=122×50cm、深さ=113cm

形状: 上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土: 6層に分けられる。1・2層が黒色土系で、3・4層が混土層であり、ともに自然堆積と考えられる。長軸両壁面には、まず6層の黒褐色土が垂直に堆積し、その内側にはほぼ同レベルで5層のロームブロック主体土が厚く堆積し、しかもやはり垂直方向に認められる。5層は極めて堅くしまりが強い。また内側の壁面が平坦に近いことから、不自然に堆積する6層と合わせ、「貼壁」として理解できるものである。

施設: 坑底にはピット5基が認められるが、このうち長軸方向と若干ずれるものの、深さ20cm以上の3基のピットが逆茂木の基本をなすものと考えられる。断面図には明記していないが、平面図上方にみられる2基は円錐状を呈しており、残り1基は円筒状を呈する。この3基はすべて掘り方を有し、逆茂木痕の周囲はローム質土で充填されていた。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III C類。「貼壁」有り。

17号陥し穴(第12図、P L 5・6)

位置: VII N-22グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸: 尾根軸と平行する。

規模: 上面=168×93cm、下面=123×38cm、深さ=100cm

形状: 上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土: 7層に分けられる。1層が黒色土、以下混土層が主体となるが、長軸両壁面下部に堆積する7層のみロームブロックとなる。7層と同時に堆積する6層とともに、垂直方向に並立する「貼壁」を形成したとも理解できるが、判断は保留しておきたい。

施設: 坑底には7基のピットが認められるが、このうち壁下にある2基(深さ20cmおよび24cmのもの)を除いたものが逆茂木を設置したピットと考えられる。したがって5基が確認されるが、すべてが同時期に機能していたのかは不明である。断ち割りによれば、ピットの断面形は、ほかの陥し穴に比べ非常に浅く、しかも細い円錐状を呈していることがわかる。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

18号陥し穴(第12図、P L 6)

位置: VII N-21グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=218×122cm、下面=178×71cm、深さ=85cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1層が黒色土、2～4層が混土層であり、これらは自然堆積と考えられる。6層はロームブロック主体土であり、長軸両壁面全体に認められ、垂直方向に堆積している。6層そのものは比較的堅くしまっており、内側の壁面も平坦面を維持している。壁体との間にわずかな隙間があり、そこに5層が入り込む。不自然に堆積する5層と強固で平滑な6層をセットで考えれば、「貼壁」として理解できるものである。

施設：坑底にはビット6基が認められるが、このうち深さ30cm程のビット3基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。いずれも直径の大きい円筒形で掘削されている。断ち割り前に掘り下げたため、ビットの覆土状態は不明であるが、掘り方を有し、逆茂木痕の周囲にローム質土が充填された可能性が高い。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

19号陥し穴（第13図、P L 6）

位置：VII N-11グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=212×108cm、下面=193×53cm、深さ=81cm

形状：上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1層が黒色土、下部の2～4層が混土層であり、これらは自然堆積と理解できる。最下層には中軸線を除いて平坦に堆積する5層の混土層が堆積する。この上層には6層のロームブロックが見られ、長軸両壁面に垂直の壁体を作り出しており、さらにこの上層ではまた5層が入り込む。6層は堅くしまりが強い。5層の堆積状況も明らかに不自然である。5層・6層はあいまって「貼壁」を形成していると理解できる。

施設：坑底には10基のビットが認められるが、このうち中軸線上にある深さ30cm強の3基が、逆茂木の基本をなすものと考えられる。いずれも円錐形の形状を成し、断面図には明瞭には表現されていないが、とりわけ中央のものがより深くまた鈍角面を保持している。この3基は掘り方を有し、逆茂木痕の周囲をローム質土で充填している。なお、平面図下方にも深さ24cmのビットがあるが、これについては幅が極端に狭くしかも斜め方向に穿たれており、かつ配置もずれていることからこれは逆茂木を設置したものとは理解できないと判断した。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

20号陥し穴（第13図、P L 7）

位置：VII N-12グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=233×125cm、中段=205×67cm、下面=194×60cm、深さ=60cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：3層に分けられるが、掘り込みが浅く、埋土も基本的に2層にしか分層できない。1層が黒色土、2層が混土層であり、ロームブロックの単純層などはなく明らかに自然堆積としてとらえられる。3層は

逆茂木痕の可能性が高い。

施設：坑底には15基のピットが認められる。このうち中軸上に並ぶ3基のピットが逆茂木の基本をなすものと考えられる。平面図下方の2基については掘り方を有しており、中心部付近に逆茂木痕と想定される黒色土、周辺部にローム質土を充填していた。断面形態は円筒状を呈している。上方にみられる残り1基についても、調査所見にはないが、同様な掘り方を有していた可能性が高いと考えられる。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

21号陥し穴（第13図、P L7）

位置：VII N-6グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=201×110cm、下面=162×57cm、深さ=81cm

形状：上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：7層に分けられる。1層が黒色土、2～4層が混土層であり、これらは自然堆積と考えられる。最下層に7層の黒色土が薄く堆積し、長軸両壁面の一部に、5層の混土層をクッションにおいて、6層のロームブロックが垂直方向に立ち上がっている。6層は極めて強くしまっており、内側の壁面もすこぶる平坦である。「貼壁」として理解できるものである。

施設：坑底には10基のピットが認められるが、このうち中軸線上に並ぶ3基のピットが逆茂木の基本をなすものと考えられる。中央のものももっとも幅が広く、深さもより深い。円筒状を呈する。他の2基は円錐状に近い形態である。完掘した状態で断ち割り作業を行ったため、逆茂木の埋設状態については判断できない。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

22号陥し穴（第13図、P L7）

位置：VII M-13グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=196×144cm、中段=162×100cm、下面=158×76cm、深さ=73cm

形状：上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：4層に分けられる。1層が黒色土であり、以下は混土層が連続する。いずれも自然堆積と考えられる。

施設：坑底ピットは15基が確認されているが、このうち深さ数cmの6基については逆茂木を設置したものである可能性は低いと考えられる。中軸上に並ぶ4基が逆茂木の基本をなすものと想定される。断面形態は、いずれもやや鈍角ながら円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。

23号陥し穴（第14図、P L8）

位置：VII L-15グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=201×96cm、中段=174×52cm、下面=161×34cm、深さ=91cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：掘り込みは深いが2層にしか分層できない。上部が黒色土、下部が混土層であり、ともに自然堆積と考えられ、ロームブロック塊などはみられなかった。

施設：坑底には7基のピットが認められ、このうち中軸線上に並ぶ深さ20cm前後のピット3基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。平面図最上方のものはやや円錐状、その他は円筒状の掘り込みが確認された。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。

24号陥し穴（第14図、P L 8）

位置：VII-18グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と45°振れる。

規模：上面=206×105cm、中段=169×60cm、下面=137×42cm、深さ=130cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：深さ130cmにもおよんでいるが、覆土は3層にしか分層できない。1層は黒色土、2層は混土層でこれらは自然堆積と考えられる。3層は堅くしまりの強い純粋なローム質土である。本層は凹凸も余りなく、図面下方から上方に向かって流入しており、人為的な埋没過程が想定できる。

施設：坑底には4基のピットが認められるが、平面図面最上方のものはきわめて浅いため、逆茂木としては中軸線より若干東寄りに並ぶ3基が想定できよう。断面形はかなり鋭角な細い円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。

25号陥し穴（第14図、P L 8）

位置：VII H-20グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交するが、やや東に振れる。

規模：上面=220×120cm、中段=175×56cm、下面=164×47cm、深さ=92cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。ローム粒子の含有量の差異で細分したが、1・2層は基本的に同質の黒色土である。3層は混土層でローム粒やロームブロックを多分に含むものである。これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面には、ロームブロックを多数含んだ5層と堅くしまりの強いロームブロックの4層がそれぞれ縦方向に延び、部分的には折り重なるところもあるが、内側は必ず4層が顔を出し、しかも平坦を常とするという性質がある。こうした4層・5層のあり方は「貼壁」の存在を如実に示すものであると考えられる。

施設：坑底には9基のピットが認められるが、このうち逆茂木と考えられるのは、中軸線上に並ぶ3基である。掘り方を有し、中央に逆茂木痕と想定される黒色土、周辺にローム質土が充填されていた。後者については周辺がほかの底面より一段盛り上がっている状況が確認できた。断面形はいずれも細い円錐状を呈する。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

26号陥し穴 (第14図、P L9)

位置：ⅦM-8グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行するが、やや南に振れる。

規模：上面=221×120) cm、中段=196×72cm、下面=191×68cm、深さ=68cm

形状：試掘調査の際のトレンチで上面の一部を削られている。上面は長楕円形、中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1・2層が黒色土ないしは黒褐色土、3層が混土層であり、自然堆積であると考えられる。長軸北壁面には黒褐色土が堆積し、その上部には5層のロームブロックを多数混入した4層の混土層が存在する。

施設：坑底には10基のビットがみられるが、このうち中軸線上には逆茂木の基本をなすと想定される、2本対になった小ビットが3ヶ所・計6基の存在が認められる。それぞれ逆茂木痕と掘り方が明瞭に判別可能で、前者は黒色土で細い円筒状を呈し、後者は強固に固められたローム質土で、やや鋭角的な円錐状の状態で認められた。また後者については上面が周辺よりも若干盛り上がっている状況が確認できた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。

27号陥し穴 (第15図、P L9)

位置：ⅦM-6グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と45°振れる。

規模：上面=210×117cm、中段=194×55cm、下面=167×50cm、深さ=102cm

形状：上面・中段とも長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1層が黒色土、2～5層が混土層ないしは類似層で、これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面にはロームブロックである6層が垂直方向に堆積し、部分的に5層の混土層が縦線状となって入り込む。なお、5・6層は非常に堅くしまりが強い。6層の内側の壁面はすこぶる平坦面を保つものであった。この5層・6層をもって「貼壁」と判断した。

施設：坑底には5基のビットが認められるが、このうち中軸線上に並ぶ3基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。この3基については断面形は細長い円筒状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

28号陥し穴 (第15図、P L9)

位置：ⅦL-9グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行するが、やや南に振れる。

規模：上面=198×69cm、中段=174×30cm、下面=147×22cm、深さ=71cm

形状：上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：4層に分けられる。最上層の1層が黒色土、また最下層の4層も黒色土を呈し、中間の2・3層が混土層となる。3層にはロームブロックが認められるものの、含有率が低く分層できるものではなかった。いずれも自然堆積と考えられるが、下部に薄く堆積する4層についてはローム粒子・ロームブロックを一切含まず、しかも上面を平坦としていることから使用途中に埋没した安定した土壌と考えることもできよう。

施設：坑底は、短軸側両端部が一段深く掘られ、中央部は一段高くなっている。坑底には9基のビットが認められたが、このうち逆茂木の基本をなすものと考えられるのは、一段高い中央部にみられる2基一対をなすビット群3ヶ所の計6基である。これらのビットの断面形は非常に鋭角的な細い円錐状を呈する。中央部分がもっとも深くしかも直線方向で、上下二者がやや浅く先端が中央に向けた状態で認められた。また平面図左方の西壁下にも3基のビットが存在し、これらも斜位方向の状態を確認されている。これらも逆茂木の可能性がある。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。

29号陥し穴（第15図、P L 9・30）

位置：VII G-19グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=248×101cm、中段=226×75cm、下面=208×68cm、深さ=50cm

形状：上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：3層に分けられる。上層が黒色土、下層が混土層として分層でき、また下層中には3層であるロームブロックが若干存在する。すべて自然堆積と考えられる。

施設：坑底には11基のビットが認められる。このうち逆茂木の基本をなすものと考えられるのは、中軸線上にみられる深さ45cm前後の3基である。これらの3基のビットには、図では表現されていないが、わずかに掘り方が存在し、中央に逆茂木痕と想定される黒色土が、周辺には強固に踏み固められたローム質土が認められた。断面形態は円筒状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III A類。

30号陥し穴（第15図、P L 10）

位置：VII G-12グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=220×120cm、中段=193×60cm、下面=173×43cm、深さ=81cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はとも隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1層が黒色土、2層が混土層で、これらは自然堆積と考えられる。坑底直上には5層の黒色土が薄く堆積し、長軸両壁面には5層直上に一部3層の混土層を交えながら4層のロームブロックが直立した状態で堆積している。3層・4層は堅くしまっており、内面もきわめて平坦に揃えられていた。「貼壁」と理解できるものであり、また5層についても何らかの意図があつての存在であると考えられる。

施設：坑底には7基のビットが認められる。中軸線上には4基のビットが存在するものの、平面図最上方の壁下に位置するものは極端に浅いため逆茂木を設置したものとは認めがたく、それ以外の3基のビットが逆茂木の基本をなすものと考えられる。断面形態はそれぞれ円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

31号陥し穴（第16図、P L 10・11）

位置：VII F-19グリッド、尾根中央寄りの平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=247×118cm、中段=213×60cm、下面=179×49cm、深さ=101cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1・2層は基本的には同質の黒色土、3層は混土層である。いずれも自然堆積と考えられる。最下層にロームブロックを一切含まない、粘性の強い6層の黒色土が薄く堆積し、その上部の、長軸両壁面には4層のロームブロックと大小のロームブロック主体の5層が縦縞状となって堆積している。この4層・5層は垂直方向に堆積しており、しかも堅くしまりが強く、内側の壁面も平坦となっているため、「貼壁」として理解できるものである。ただし、それ以前に堆積する6層のかかわりかたも追求する必要がある。

施設：坑底には7基のピットが認められる。このうち中軸線上に存在する深さ25cm前後のピット3基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。また平面図下方2基の中間に深さ20cmの小ピットが2本一対で存在しており、これらも逆茂木として理解できるだろう。これら5基の断面形態はかなり細めの円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

32号陥し穴（第16図、P L 11）

位置：VII F-5グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=226×143cm、中段=200×84cm、下面=182×68cm、深さ=109cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1層が黒色土、下部の2・3層が混土層であり、これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面にはロームブロックないしはそれを主体とする混土層の4・5層が互層となって堆積するが、同じレベルで堆積する3層との分離が明瞭でなく、そのため壁の崩落土と考えるべきものである。

施設：坑底には6基のピットが認められた。このうち中軸線上に存在する深さ20cm強の3基が逆茂木の基本をなすものと考えられる。これら3基の断面形態は細い円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。

(2) 土坑

2号土坑（第17図、P L 11）

位置：VIII N-9グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

規模：上面=104×102cm、下面=46×42cm、深さ=39cm

形状：円形を呈する。

覆土：上下2層に分けられ、ともに黒色土系をなす。自然堆積と考えられる。

遺物：出土しなかった。

13号土坑（第17図、P L 11）

位置：VII O-13グリッド、崖線寄りの尾根平坦部に位置する。

規模：上面=138×(120) cm、下面=123×(108) cm、深さ=35cm

形状：14号陥し穴と重複し、土色・土質の相違により、本跡の方が新しいと判断できた。円形を呈する。
覆土：上下2層に分けられ、ともに黒色土系をなす。2層にはロームブロックが混入する。自然堆積と考えられる。

遺物：出土しなかった。

2 笹原上第2遺跡

(1) 陥し穴

1号陥し穴(第18図、P L12)

位置：VIG-7グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=178×123cm、中段=137×41cm、下面=117×22cm、深さ=138cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1層が黒色土、以下2～4層および6層が混土層。5層がロームブロックであり、しまりは良好である。5層の分布範囲は把握していないが、長軸側両壁面に存在していた可能性も高い。そうであれば「貼壁」として理解することができるが、判断は保留したい。

施設：坑底中軸線上にビット4基が認められた。いずれも逆茂木を設置したものと想定される。円筒状の掘り方を有しており、断面図では掘り方を全掘した状態で表現している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。「貼壁」の可能性有り。

2号陥し穴(第18図、P L12)

位置：VIG-6グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=205×126cm、中段=143×33cm、下面=135×23cm、深さ=134cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1・2層は黒褐色土系、3・4は混土層、4層はロームブロックが主体であるがしまりはない。5層は平面図下方部のみ分布する、きわめてしまりの強いローム質土であり、坑底中央部分ではほぼ垂直に近い状態で堆積を終えている。

施設：坑底には3基のビットが認められた。いずれも逆茂木を設置したものと想定されるが、断ち割りを実施していないため、断面形態等は不明である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。

3号陥し穴(第18・32図、P L13・26)

位置：VIF-9グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=203×140cm、中段=168×104cm、下面=132×66cm、深さ=67cm

形状：上段・中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：4層に分けられる。1層が黒褐色土、以下2・3層が混土層であり、4層もロームブロック主体で

あるが多く、の混入物が認められる。すべて自然堆積と考えられる。

施設：坑底中央付近に重複する状態で2基のビットが認められる。断ち割りを実施していないため、正確な断面形態等は確認していないが、円筒状を呈する可能性が高い。

遺物：凹石1点が出土した。

備考：IC類。

4号陥し穴（第18図、P L13）

位置：VI F—8グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=233×141cm、中段=193×41cm、下面=188×22cm、深さ=150cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。最上層の1・2層が黒色土系、下部の3～5層が混土層であり、これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面にほぼ直立状態で堆積するロームブロック主体の6層については、堅くしまった面を保ちながらも一部にはややもろいローム質土が混在しており、かつ斜面上方側に集中して認められることから壁の崩落土と考えるのが妥当である。

施設：坑底にはビット6基が認められた。いずれも逆茂木を設置したものと考えられ、断面形態はかなり上端の幅が狭い円錐形を呈していた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。

5号陥し穴（第19図、P L13）

位置：VI J—14グリッド、尾根南側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=208×128cm、中段=180×66cm、下面=162×18cm、深さ=140cm

形状：上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：7層に分けられる。最上層の1層が黒褐色土で、2・3層が混土層である。ロームブロックを主体とする4層も黒色土系の土層を含んでおり、基本的には混土層の範疇に入る。5層もロームブロック主体土であるが堅くしまっていない。長軸両壁面には、垂直方向でかつ内側が極めて平坦に揃って堆積する6層の純ローム質土と、壁際にわずかに存在する5層類似土の7層がみられ、とりわけ6層については地山との境が不明瞭であり、7層が存在しなければ、あやうく壁の位置を見間違えるところであった。この6・7層は「貼壁」として理解できるものである。

施設：坑底には中軸上にみられる4基のビットが認められるが、逆茂木としては3基を基本とするものと考えられ、平面図上方から2番目の小ビットについては当初から存在していたかどうか定かでない。図上では明瞭には表現されていないものの、この図面上から2番目のものを除けば、断面形はやや鋭角的な細い円錐状を呈している。なお、図面上から2番目はかなり細めの円筒状を呈していた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。「貼壁」有り。

6号陥し穴（第19図、P L13）

位置：V D—23グリッド、尾根南側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=242×82cm、下面=231×50cm、深さ=53cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：3層に分けられる。すべて混土層であり、1→2→3層の順番にローム粒子・ロームブロックの含有量が増大し、色調もより黄褐色化する。自然堆積と考えられるが、3層が長軸両壁面に沿って垂直方向に堆積していることは指摘しておきたい。

施設：坑底には中軸線上に3基のビットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。図中には表現していないが、断ち割りにより、3基とも太い円筒状に掘り込まれ、逆茂木の周囲を混土層主体土が充填する掘り方を確認している。なお平面図最上方の掘り方については、中央に向かって次第に盛り上がっていることが観察できる。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

7号陥し穴（第19図、P.L14）

位置：VD-21グリッド、尾根南側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=222×92cm、下面=190×40cm、深さ=83cm

形状：上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1～3層は混土層で自然堆積と考えられる。長軸北壁面には5層の暗褐色土がわずかに堆積した後、その内側に4層の純ローム質土をほぼ垂直方向に、かつ内面を直線的に確認されており、また上面はほぼ平坦としている。こうした4・5層は「貼壁」として理解できる。4・5層の関係は平面図左方の北側にしかみられないが、右方南側の2層も上半部はロームブロックのみの堆積であり、したがって長軸両壁面にこのような「貼壁」を想定させるものが存在した可能性も十分考えられる。

施設：坑底中央付近に1基のビットが認められる。逆茂木を設置したものと想定できる。断ち割り観察によれば、幅は狭いものの先端はけって鋭角的とはならず、明らかに円筒状を呈していることがわかる。ビット覆土には混土層のみが充填されていた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIC類。「貼壁」有り。

8号陥し穴（第19図、P.L14）

位置：VC-19グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=98×75cm、下面=84×55cm、深さ=41cm

形状：上面・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：3層に分けられる。すべて自然堆積と考えられ、1・2層はローム粒子を含んだ混土層であり、下部の3層はロームブロックを多く含んだ、壁崩落土と考えられる。

施設：坑底には3基のビットが認められるが、このうち逆茂木を設置したものと想定されるのは中央に存在する1基である。ただし、断ち割りを実施していないため、断面形態等については確認していない。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IC類。

9号陥し穴（第20図、P L14）

位置：VB-25グリッド、尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=240×127cm、中段=197×80cm、下面=148×48cm、深さ=114cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。最上層の1・2層が黒色土および暗褐色土、3層が混土層、下部の4層も基本的には混土層であり、これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面には、ほぼ垂直方向に5層のロームブロック主体の混土層、6層の堅くしまりの強いローム質土が堆積し、これらによって「貼壁」を形成していたと理解できる。

施設：坑底中軸線上に3基のビットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。断面図では断ち割り前の状態を表現しているが、実際は円筒状に近い状態を呈するものと考えられる。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

10号陥し穴（第20図、P L14）

位置：VB-24グリッド、尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=232×103cm、中段=209×54cm、下面=195×48cm、深さ=92cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。上層の1・2層が黒褐色土および暗褐色土、続く3層が混土層であり、これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面に分布する、4層のロームブロックを多く含む混土層および5層のロームブロック層については、垂直方向に堆積し、しかも内面が壁面に沿って一直線状に認められることから「貼壁」とも想定できるが、特にしまりの強いものではないため、判断は保留したい。

施設：坑底には4基のビットが認められるが、中軸線北寄りところで深さ39cmをはかる1基のみで逆茂木痕を観察しており、それより南にみられるものは断面形態や覆土の様子から木根の痕跡と考えた。平面図・断面図は断ち割り前の状態を表現しているが、実際はさらに上端が大きく、円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」の可能性有り。

11号陥し穴（第20図、P L15）

位置：VB-21グリッド、尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=184×78cm、中段=159×42cm、下面=144×28cm、深さ=97cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。最上層の1層が暗褐色土、2～3層がローム粒を含む混土層である。これらは自然堆積と考えられる。長軸両壁面にはロームブロックを多数含んだ4層が垂直に堆積し、その外側に純粋なローム質土である5層が堆積を薄くしながら存在する。これらについては「貼壁」の可能性も考えられるが、明確な根拠を得ることはできなかったため、判断は保留としたい。

施設：坑底中軸線上に3基のビットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。これらの

ピットの断面形は、断面図では断ち割り前の状態を表現しているが、実際は円錐状の強い形態を呈している。また、一部周辺にはローム質土を充填した掘り方がみられる。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

12号陥し穴（第20図、P L15）

位置：V B-21グリッド、尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=167×88cm、中段=135×46cm、下面=108×34cm、深さ=98cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：4層に分けられる。下部の3層には不規則にロームブロックが入り込んでおり、これらは一気に埋没した壁崩落土と考えられる。上部の2層についても堆積量からすれば比較的短時間でなされたものだろう。最上層の1層は、ほかの陥し穴と同様の黒褐色土が堆積している。

施設：坑底には1基のピットが認められ、逆茂木を設置したものと想定される。これはかなり鋭角な細い円錐状を呈するもので、すべて黒色土で充填されていた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。

13号陥し穴（第21図、P L15）

位置：V F-5グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=187×120cm、中段=142×63cm、下面=113×44cm、深さ=152cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1～4層については自然堆積と考えられるが、5及び5'層に関していえば長軸両壁面に垂直に堆積し、しかもロームブロックを主体とするから「貼壁」の想定が可能である。ただし、やや軟質かつ混土層を常とし、しかも遺存状態が悪いことから壁崩落土とする考えも否定できないため、判断は保留としたい。

施設：坑底には3基のピットが認められる。いずれも逆茂木を設置したものと想定できる。平面図上方にみられる2基のピットは、2基一対をなすものと考えられる。平面図下方にも同様に2基一対のピットが認められたが、調査段階では木根の痕跡と考え、図化はしていない。なお、平面図上方の2基のピットについては深さを記入していないが、中央部の深さ30cmをはかるピットのおおむね半分程度の深さであることが写真から判断可能であった。また、いずれのピットの掘り込みも細い円筒状を呈していたが、先端が円錐状となることも考えられる。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

14号陥し穴（第21図、P L16）

位置：V F-15グリッド、尾根南側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=160×89cm、中段=140×60cm、下面=107×22cm、深さ=132cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1・2層は自然堆積と考えられる。3層も自然堆積の可能性が高い。長軸北壁面には壁際に4層が直立状態で堆積し、ロームブロックである5層がその外側をバックしている。南壁面についても不規則な堆積をする4層および下部に沈着する5層がみられ、北壁面と同質のものが崩落した可能性も考えられよう。とすれば「貼壁」である可能性も否定できないが、判断は保留しておきたい。

施設：坑底には中軸線上に3基のピットが認められ、平面図最下方のものを除く2基が逆茂木を設置したものと想定される。この2基については平面図・断面図は断ち割り成果前の状態を示しており、実際はこれよりも一回り大きな掘り込みが確認されており、形状は円錐状を呈していた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

15号陥し穴（第21図、P L16）

位置：VF-13グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行するが、やや南に振れる。

規模：上面=213×82cm、中段=194×57cm、下面=180×37cm、深さ=72cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土とともに自然堆積と考えられる。長軸北壁面ではロームブロック主体とする4層が壁面に沿って薄く堆積した後、その外側を縦方向に堆積したロームブロックである5層が厚く囲っている。南壁面もそれに近いが、4層部分が本来自然堆積と考えるべき3層と見なされ、また3層は当然坑底にまで達しているのにつじつまの合わない事態となっている。調査段階での観察とは異なり、実際には3層を分層するのが正解ではないかと整理段階では考えるに至り、5層のロームブロックそのものも実際には両壁面に一直線状に並立していたと考えるべきであろう。ただし、模式図では調査段階の所見にしたがって北壁面しか図化していない。

施設：坑底には中軸線上に4基のピットが認められる。いずれも逆茂木を設置したものと想定できるが、平面図上方から3番目以下の2基については近接しており同時に機能していたかどうか定かでない。また、最下方のものは木根が入り込み、深度も判明していない。それぞれ中心部が黒色土、周辺がローム質土という掘り方を有しており、非常に細い円筒状を呈していた。ただし、断面図は断ち割り前の状態を示すものであるため、中央の黒色土部分しか図化していない。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

17号陥し穴（第21図、P L16）

位置：IV J-21グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=130×74cm、中段=105×43cm、下面=87×26cm、深さ=128cm

形状：57号土坑と重複し、土色・土質の相違により本跡の方が新しいと判断できた。上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：8層に分けられる。最上層の黒褐色土である1層を除き、縦線状の堆積を示しており、しかも下部については一見「貼壁」の存在を想定できる可能性がある。しかしながら、ほかの「貼壁」を有する陥し穴とは異なり、長軸両壁面に密着する7層中にロームブロックがそれほど含まれていないので、ここで

は自然堆積と考え、「貼壁」の存在についての判断は保留したい。

施設: 坑底には中軸線上にみられる3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。平面図・断面図は断ち割り前のものであるため、断ち割りの成果を表現しきれていない。断ち割りによれば、断面形はやや上端が狭いながらも極めて深い掘り込みを検出しており、数値自体も平面図に表現されているものよりもはるかに上回るものを想定できる。形状は円錐状を呈するが、上下どちらか一方は円筒状を呈するが、ピットの覆土は、黒色土だけで構成されていた。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

19号陥し穴 (第22・32図、P L17・26)

位置: IVH-23グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸: 尾根軸と平行する。

規模: 上面=226cm、中段=(185cm以上)、下面=(160cm以上)、深さ=114cm

形状: 南側を試掘トレンチによって壊されているため、推定の域をでないが、上面・中段・底面とも長楕円形を呈するものと考えられる。

覆土: 長軸方向に覆土を観察しているため、他の陥し穴とは比較しがたいが、観察部分では「貼壁」らしきものは確認されていない。またII層最下部で遺構検出をしているが、覆土の最上層にこのII層が入り込み、その影響下で下部にII層近似のI層が堆積している点がみられている。坑底中央のピット覆土には10層および12層が堆積しており、前者は掘り方埋設土、後者は逆茂木痕と考えられるが、ともに坑底最下層に堆積した9層を断ち切って構成されているいるため、この時点では9層上面が坑底の底面ではないかと考えられる。

施設: 坑底中軸線上に2基のピットが認められる。いずれも逆茂木を設置したものと想定される。トレンチにより南側半部を失っているが、配置からすれば3基の存在が予測される。2基のピットの断面形は、先端が細い円筒状を呈すると考えられる。

遺物: 1層から石炭1点が出土した。

備考: 陥し穴分類 III B類。

20号陥し穴 (第22図、P L17)

位置: IVH-23グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸: 尾根軸と平行する。

規模: 上面=270×105cm、中段=239×81cm、下面=232×67cm、深さ=72cm

形状: 上面・中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土: 5層に分けられる。いずれも自然堆積と考えられ、三角堆積を成し下部に行くほどローム粒子・ロームブロックの含量が増加する。ただし、最下層の5層についてはロームブロックの混入率が少なく、しかも底面近くには堆積していないことから、壁崩落土が堆積する以前の状態、すなわち機能している段階を表現しているものと想定できよう。

施設: 坑底には3基のピットが認められる。このうち平面図上方の2基は、円錐状の掘り込みを有しており、逆茂木を設置したものと考えられる。一方、平面図下方の壁下に位置する最下段のものは円筒状でも細く歪んだ存在であるから、木根によるものである可能性も否定できない。なお、断面図では明瞭に表現されていないものの、平面図上方の2基はより円錐状を呈していることが断ち割りにより判明してい

る。また、それぞれのピット覆土は黒色土のみの堆積であった。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

21号陥し穴（第22図、P L17）

位置：IV G-17グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

形状：試掘トレンチにより上部は削平されているが、上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

規模：上面=200×71cm、下面=183×43cm、深さ=43cm

覆土：長軸方向で観察した。極めて単純で、2種類の混土層によって埋没していた。自然堆積と考えられる。

施設：坑底中軸線上に3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。3基とも覆土は黒色土だけで構築されていた。断面形態は平面図最上方のものが円錐状、中央のものが識別不明、最下方のものは木根が入り込んでいるため、判断が困難となっている。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

22号陥し穴（第23図、P L17）

位置：IV F-25グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=209×117cm、中段=181×79cm、下面=168×66cm、深さ=50cm

形状：上面・中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：4層に分けられる。壁の崩落が著しい平面図左方の北壁ではロームブロックを多量に含んだ3層が堆積し、以後、混土層の2層および暗褐色土の1層が堆積する。単純な埋没過程であり、自然堆積と考えられる。

施設：坑底中軸線上に2基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。これらのピットは上部を約5～10cmほど掘り込んだ後、規模を縮小させて再度下部を円錐状に掘り下げるという二段掘りの構造をとっている。なお、下部の掘削については鋭角的な二等辺三角形を呈していたが、逆茂木の埋設状態は不明である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIA類。

23号陥し穴（第23図、P L18）

位置：V B-12グリッド、尾根平坦部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=190×79cm、中段=178×23cm、下面=160×20cm、深さ=76cm

形状：上面・中段・底面とも隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1～4層は自然堆積と考えられる。5層は長軸両壁面に垂直方向に堆積し、6層はその内面に密着するロームブロックである。「貼壁」の可能性もあるが、堅くしまりが強い6層に比べて、壁密着の5層は軟質性が高く、「貼壁」を想定しているほかの陥し穴との差が著しい。判断は保留

しておきたい。

施設：坑底には6基のピットが認められるが、平面図最上方と最下方の2基については、深さや方向性から判断して逆茂木を設置したものとは考えにくい。断面写真から判断すれば、あるいは隣り合う逆茂木痕と同一の掘り込みに納まるものと考えられる。ピットには内側の逆茂木痕と想定される黒色土が細い円筒状に充填されている。それぞれの周囲にはローム質土で踏み固められた円錐状の掘り方が存在しているが、断面図では断ち割り前の黒色土の範囲のみの表現である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III C類。「貼壁」の可能性有り。

24号陥し穴（第23図、P L 18）

位置：VA-13グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=225×90cm、中段=198×24cm、下面=193×14cm、深さ=116cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに長方形を呈する。

覆土：7層に分けられる。すべて自然堆積と考えられる。5層にロームブロックが多数含まれていているものの、しまりは非常に弱く壁の崩落土と理解できる。最上層には基本土層II層類似の黒色土がみられる。

施設：坑底中軸線上に2基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したもの想定される。断面形は細い円錐状を呈する。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。

25号陥し穴（第23図、P L 18）

位置：VA-12グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交するが、やや東に振れる。

規模：上面=218×108cm、中段=194×60cm、下面=184×37cm、深さ=84cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。黒褐色の混土層である4層が厚く堆積した後、長軸両壁面において垂直に堆積する5層と6層がみられる。堆積状況からすれば、「貼壁」と理解できるが、5・6層はやや軟質傾向にあるため、「貼壁」であるかの判断は保留しておきたい。

施設：坑底中軸線上に3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したもの想定される。平面図最下方のものは円筒状、中央のものはやや鋭角的な細い円錐状、最上段のものは円筒状に近い形態を呈し、また中央のものが一段深く掘削されている。中央部の41cmの深さをはかるピットでは掘り方が確認でき、黒色土堆積とその周辺のローム質土が確認されている。平面図・断面図は断ち割り前の状態を示すものであり、実際は数cm程、上回るものと思われる。他の2基については逆茂木の埋設状態は不明である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」の可能性有り。

26号陥し穴（第24図、P L 18・19）

位置：VA-6グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=190×82cm、中段=171×39cm、下面=164×13cm、深さ=124cm

形状：上面は隅丸長方形、中段・底面はともに長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1層～5層までいずれも自然堆積と考えられる。ロームブロックを含む5層が、早い時期に斜面上方側から埋まり、つぎに壁付近を中心として3・4層が堆積する。3・4層もロームブロックを含んでいるから比較的短時間で埋没したものだだろう。あとは緩やかな堆積が進んだようで、最終的には基本土層Ⅱ層近似の黒色土の堆積が認められる。

施設：坑底に4基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。ピットの断面形は細い円錐形を呈する。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。

28号陥し穴（第24図、P L19）

位置：ⅡU-23グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根軸に対し、45°北に振れる。

規模：上面=176×70cm、中段=167×21cm、下面=162×13cm、深さ=82cm

形状：上面は隅丸長方形、中段・底面はともに長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。最下層に3層の混土層が堆積し、その後4層が長軸両壁面に垂直方向に堆積するのが認められる。この4層については、3層上面に存在すること、ならびに本陥し穴の短軸が極めて狭いことなどの点は、他の「貼壁」を有する陥し穴の状況とはやや異なるが、直立する4層のローム質土が極めて堅くしまりが強いこと、合わせて4層の内側の壁面が長軸壁に一直線状に沿っていることなどから、その壁面に薄く堆積する5層とともに「貼壁」として理解できる。

施設：坑底中軸線上に2基のピットが認められる。ともに深さが4cm・8cmと極めて浅く、断面形態は不明である。逆茂木を設置したものであるかどうかははっきりしない。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。「貼壁」有り。

29号陥し穴（第24図、P L19）

位置：VA-6グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根軸に対し、45°北に振れる。

規模：上面=131×107cm、下面=69×61cm、深さ=52cm

形状：上面・底面ともに楕円形を呈する。

覆土：1層～3層までいずれも自然堆積と考えられる。最上層に基本土層Ⅱ層類似の黒褐色土、以下、順次ローム粒子・ロームブロックを増量させ底部へと至る。

施設：坑底中央に1基のピットが認められ、逆茂木を設置したものと想定される。逆茂木痕と考えられる黒色土の周囲を、ローム質土で充填した円錐状の掘り方が存在している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IA類。

30号陥し穴（第24図、P L19）

位置：VA-6グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面＝180×164cm、下面＝120×85cm、深さ＝60cm

形状：上面・底面とも楕円形を呈する。

覆土：4層に分けられるが、堆積状況は29号陥し穴と基本的に等しい。

施設：坑底にみられる1基のピットについては29号陥し穴に等しいが、木根が侵入したのか充填された黒色土部分がわずかに先端先細りとなっている。また掘り方を埋めるローム質土も29号陥し穴と同様に認められている。ただし、断面図には断ち割り前の黒色土部分のみの表現である。断面形態は不明である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 I A類。

31号陥し穴（第25図、P L 20）

位置：IV E—9 グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面＝197×88cm、下面＝182×64cm、深さ＝34cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：4層に分けられる。三角堆積を成し、自然堆積と考えられる。最下層の3層には壁崩落土を多分に含み、最上層の1層には基本土層Ⅱ層近似の黒褐色土が存在する。

施設：坑底には凹凸が目立つが、6基のピットが認められる。このうち、掘り方を有し、しかも深度が深いことを基準とすれば最上部の1基を除く4基が逆茂木を設置したものと想定される。また中央の2基については一つの掘り方に納まることから、結局は3箇所を基本としていたと考えられる。ピットの内部には黒色土が充填され、さらにその周囲をわずかに円錐状にローム質土で囲むものである。なお、断面図は断ち割り前の黒色土部分のみの表現である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III A類。

32号陥し穴（第25図、P L 20）

位置：IV E—5 グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根軸に対し、45°北に振れる。

規模：上面＝208×74cm、下面＝194×56cm、深さ＝31cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：1層～3層のいずれも自然堆積と考えられるが、最下層に薄く堆積する3層にはローム粒子・ロームブロックをほとんど含まないことが指摘できるため、使用途中に堆積した安定した土壌とも考えられる。

施設：坑底に3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。それぞれ太い円筒状の掘り込みが存在し、黒色土が充填されていた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III A類。

33号陥し穴（第25図、P L 20）

位置：IV E—4 グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根軸に対し、45°北に振れる。

規模：上面=123×100cm、下面=74×57cm、深さ=40cm

形状：上面・底面とも円形を呈する。

覆土：1層～3層は、三角堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。最上層の1層は基本土層Ⅱ層近似的の黒褐色土であり、下部に行くにしたがいローム粒子・ロームブロックの含有量が増加していく。

施設：坑底には2基のピットが認められる。ともに逆茂木を設置したものと想定できる。断ち割りを実施していないため、ピットの断面形態等については不明である。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IA類。

34号陥し穴（第25図、P L 20）

位置：IV E-4 グリッド、尾根北側斜面に位置する。

主軸：尾根に平行するが、わずかに東に振れる。

規模：上面=167×59cm、中段=157×34cm、下面=148×17cm、深さ=96cm

形状：上面・中段・底面とも長方形を呈する。

覆土：4層に分けられる。上部の1・2層は自然堆積と考えられる。下部の3層およびその中に入り込むロームブロックの4層は「貼壁」を想定させるものだが、下部に進むほど3層と4層の分層関係が不明瞭となり、同時に4層そのものも次第に軟質化し、やがてローム粒子化してしまう。以上の点を重視するならば、壁崩落土の可能性もあるため、「貼壁」であるかどうかの判断は保留しておきたい。

施設：坑底中軸線上に3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。断面形態は非常に鋭角的な細い円錐状を呈しており、内部には黒色土のみが充填されていた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。「貼壁」の可能性有り。

35号陥し穴（第26図、P L 20）

位置：IV E-6 グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=211×94cm、中段=175×64cm、下面=165×39cm、深さ=82cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。最上層の1層は基本土層Ⅱ層近似的の黒色土であり、以下徐々にローム粒子・ロームブロックの含有量を増加させ、しかも三角堆積を示すことから、これらは自然堆積と考えられる。ただし、底面に薄く密着する4層についてはローム粒子・ロームブロックをほとんど含まず、堅くしまりも強い。底面の上面が最終的には4層上面に存在していたと想定することもできるだろう。

施設：坑底中軸線上には3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。やや幅が狭いながらも円筒状の形態を呈しており、内部には黒色土のみが充填されていた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

36号陥し穴（第26図、P L 21）

位置：I X-17グリッド、尾根南側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=191×70cm、中段=174×44cm、下面=167×29cm、深さ=78cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：3層に分層でき、下層に行くにしたがいローム粒子・ロームブロックの混入率が增大していく。斜面上方側からの三角堆積を呈することから、自然堆積によるものと考えられる。

施設：凹凸の目立つ坑底には4基のピットが認められる。平面図上方の2基については、非常に浅いため、逆茂木を設置したものとは考えにくい。また断ち割り観察の結果、中央北寄りにもう1基存在していることが判明したが、平面図・断面図では表現されていない。ピットの断面形はやや鋭角的な細い円錐状を呈し、内部には黒色土のみが充填されていた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III A類。

37号陥し穴（第26図、P L21）

位置：IX-11グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行するが、わずかに北に振れる。

規模：上面=198×113cm、中段=181×57cm、下面=178×43cm、深さ=108cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられる。1～3層は自然堆積と考えられる。3層も混土層である。長軸両壁面に分布する4・4'層および縦長状に堆積するロームブロックの6層については、両壁面とも底部に達せず、6層そのものも4・4'層の外側を覆うものではなく、これらも自然堆積と考えられる。最下層に堆積する5層およびその内部に分布する横長方向のロームブロックについては、層界が明瞭かつ平坦、層厚も薄くしまりも強い。この上面が最終的には底部として機能していた可能性が高い。

施設：坑底中軸線上に5基のピットを確認しているが、うち西側2基は近接しており、とりわけより西側のものについては非常に浅く逆茂木を設置したものとは考えにくい。逆茂木を設置したピットと想定される4基については、円錐状の断面形態の掘り方を有し、内部に黒色土が充填され、その周囲をローム質土で埋めている。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。

38号陥し穴（第26図、P L21）

位置：IW-23グリッド、尾根南側斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=195×103cm、下面=160×53cm、深さ=95cm

形状：上面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。

覆土：6層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。最下層の5層には壁崩落土を多数含み、最上層の1層にはII層近似の黒色土が堆積している。

施設：坑底には7基のピットが認められるが、中軸線上にみられる4基が逆茂木を設置したものと想定される。中央部の2基（深さ40cmと18cmのもの）は、同一の掘り方におさまる。掘り方は表面では平面図のように黒色土で充填しているが、断面では中央付近からその幅が倍増し、実際には上半に限って黒色土で収結する箇所とその周囲をロームブロックで充填する箇所とに分離しており、両者をあわせると円筒状の

形態を呈する。ただし、平面図・断面図ではこうした断ち割りで判明した掘り方の状態は表現していない。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IIIA類。

40号陥し穴（第27図、P L 21・22）

位置：I V-14グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=220×115cm、中段=193×61cm、下段=178×46cm、深さ=95cm

形状：上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：7層に分けられる。1～4層は自然堆積と考えられる。最下層の6層も三角堆積を呈するので同様と考えられる。長軸両壁面に見られる縦長のロームブロックからなる7層とその隙間にみられる黒褐色土の5層は、壁の崩落土ととらえることができる。

施設：坑底中軸線上には3基のピットが認められており、それぞれが太い円筒状の掘り方を有し、黒色土が充填されていた。いずれも逆茂木を設置したものと想定される。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。

42号陥し穴（第27図、P L 22）

位置：I V-1グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と平行するが、やや南に振れる。

規模：上面=232×103cm、中段=222×78cm、下段=212×58cm、深さ=72cm

形状：上面・中段・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：7層に分けられる。最上層の1層はII層近似の黒褐色土であり、つづく2～4層も含めて自然堆積と考えられる。最下層の6層は堆積が極めて薄く、堅くしまりの強い黒褐色土であり、かつローム粒子やロームブロックをほとんど含まない。ある時期には、6層上面が底面として機能していたと想定できよう。6層直上に堆積する長軸両壁面の7層と、その隙間に入り込む5層については、垂直方向に堆積する箇所も多く認められ、「貼壁」の可能性もあるが、堆積状況がやや不安定であるため、判断は保留しておきたい。

施設：坑底中軸線上には5基のピットが認められるが、平面図上方から2基については幅の狭い円錐状を呈しており、下3基との形態差が著しい。下方3基は太い円筒状を有している。いずれも逆茂木を設置したものと想定される。内部には黒色土のみが充填されている。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 III B類。「貼壁」の可能性有り。

43号陥し穴（第27図、P L 22）

位置：I V-9グリッド、尾根頂部に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=181×84cm、中段=174×57cm、下段=169×34cm、深さ=43cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土：5層に分けられる。1層はII層類似の黒褐色土であり、2層も黒褐色を呈する。これらは自然堆積

と考えられる。西壁際に堆積する3層の混土層と、その内部に含まれるロームブロックからなる5層は中央のみに分布しており、両者壁崩落土を主体とするものと考えられる。4層は部分的な堆積だが、堅くしまっていることや土壌化の進行具合から、最終的にはこの上面が底面の最後の段階となったことがうかがえる。

施設: 坑底には6基のピットが認められる。このうち逆茂木を設置したものと想定されるのは、平面図上方の壁際にみられる深さ6cmおよび8cmをはかる2基を除く4基である。南壁直下のもの以外の3基はいずれも大きな掘り方を有しており、太い円筒状ないしは先錐円筒状の形態を呈している。中央には黒色土を充填し、その周囲をローム質土が囲っている。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III B類。

44号陥し穴 (第27図、P L 22・23)

位置: I U-22グリッドの、尾根頂部に位置する。

主軸: 尾根軸と直交する。

規模: 上面=234×98cm、中段=204×53cm、下段=193×42cm、深さ=80cm

形状: 上面は長楕円形、中段・底面はともに隅丸長方形を呈する。

覆土: 5層に分けられる。1～3層は自然堆積と考えられる。長軸両壁面において垂直に堆積するロームブロックの4層とその隙間にわずかながら存在する混土層の5層は、2層との層界が非常に明瞭で、かつ長軸と平行して堆積している。また4層については大形・縦方向ブロック・外面をバックするような堆積状況といった緒状態が観察可能であり、「貼壁」として理解できる。

施設: 坑底中央には3基のピットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。3基とも円錐状の掘り方を有しており、中央部に逆茂木痕と考えられる黒色土を、その周囲はローム質土で埋めている。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 III B類。「貼壁」有り。

45号陥し穴 (第28図、P L 23)

位置: IV A-5グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸: 尾根軸と平行する。

規模: 上面=240×67cm、下段=220×39cm、深さ=45cm

形状: 上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土: 4層に分けられ、すべて自然堆積と考えられる。平面図左方の斜面上方側から流入したことが想定される。

施設: 坑底には6基のピットが認められるが、このうち逆茂木を設置したものと想定されるのは深さ40cm以上をはかる2基のみである。掘り方の断面形は先端がやや先細りとなる円錐状を呈する。逆茂木痕と考えられる黒色土の周囲をローム質土で埋めている。

遺物: 出土しなかった。

備考: 陥し穴分類 II B類。

46号陥し穴 (第28図、P L 23)

位置：IV A-9グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と平行する。

規模：上面=218×95cm、中段=202×42cm、下段=182×16cm、深さ=116cm

形状：上面は長楕円形、中段・底面はともに長方形を呈する。

覆土：6層に分けられ、1・2層は自然堆積と考えられる。長軸両壁面に存在する3・4層はロームブロックの含有量で分層したが、本来的には同質であり、垂直方向に堆積する。「貼壁」に近い堆積状況であるが、ロームブロックそのものはまったくしまりがなく、堆積状況が長軸と平行関係にあるかどうか不明であるため、壁上部の崩落土の可能性が高い。

施設：坑底には5基ピットが認められるが、平面図最下方のものを除いた4基が逆茂木を設置したものと想定される。4基とも断面形は細い円錐状を呈している。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IV類。

47号陥し穴（第28図、P L 23）

位置：IV B-10グリッド、尾根南斜面に位置する。

規模：上面=132×69cm、下段=103×69cm、深さ=32cm

主軸：尾根軸と直交する。

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：黒褐色土の1層の堆積であり、下部にはローム粒子・ロームブロックが認められる。自然堆積と考えられる。

施設：坑底中央に大きく円筒状に掘り込まれた1基のピットが認められ、逆茂木を設置したものと想定される。ピットの覆土は黒色土のみであった。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IB類。

48号陥し穴（第28図、P L 23）

位置：IV B-10グリッド、尾根南斜面に位置する。

規模：上面=128×54cm、下段=108×34cm、深さ=34cm

主軸：尾根軸と直交する。

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：47号陥し穴に等しい。

施設：47号陥し穴に等しい。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IB類。

49号陥し穴（第28図、P L 24）

位置：IV B-10グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=134×58cm、下段=84×36cm、深さ=45cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：47号陥し穴に等しい。
施設：47号陥し穴に等しい。
遺物：出土しなかった。
備考：陥し穴分類 I B類。

50号陥し穴（第29図、P L 24）

位置：IV C—6 グリッド、尾根南斜面に位置する。
主軸：尾根軸と直交する。
規模：上面=154×53cm、下段=130×40cm、深さ=40cm
形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。
覆土：47号陥し穴に等しい。
施設：坑底中軸線上に2基のビットが認められ、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。それぞれ断面形は円筒状を呈し、ローム質土で周囲を埋められた掘り方をもつ。
遺物：出土しなかった。
備考：陥し穴分類 I B類。

51号陥し穴（第29図、P L 24）

位置：IV C—7 グリッド、尾根南斜面に位置する。
主軸：尾根軸と直交する。
規模：上面=151×61cm、下段=127×41cm、深さ=48cm
形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。
覆土：47号陥し穴に等しい。
施設：50号陥し穴と同様に2基のビットが認められているが、平面図上方の1基は幅が狭い円錐状を呈し、一方の下方の1基は円筒状を呈している。ともに逆茂木を設置したものと考えられる。
遺物：出土しなかった。
備考：陥し穴分類 I B類。

52号陥し穴（第29図）

位置：IV C—7 グリッド、尾根南斜面に位置する。
主軸：尾根軸と直交する。
規模：上面=150×68cm、下段=123×39cm、深さ=49cm
形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。
覆土：47号陥し穴に等しい。
施設：坑底には4基のビットが認められるが、いずれも逆茂木を設置したものと想定される。中央にみられる3基については、共通する非常に大きな円筒状の掘り方を有している。逆茂木痕と考えられる黒色土の周囲にローム質土が埋められるものである。
遺物：出土しなかった。
備考：陥し穴分類 I B類。

53号陥し穴（第29図、P L 24）

位置：IVC-8グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=138×62cm、下段=122×33cm、深さ=40cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：47号陥し穴に等しい。

施設：坑底中央に円筒状を呈する1基のピットが認められ、逆茂木を設置したものと想定される。北方向に大きく傾き、黒色土を充填しているが、さらにローム質土で周囲を囲んだ掘り方が確認されている。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IB類。

54号陥し穴（第29図、P L24）

位置：IVC-9グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=160×53cm、下段=144×35cm、深さ=35cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：47号陥し穴に等しい。

施設：坑底中軸線上に2基のピットが認められる。このうち逆茂木を設置したものと想定されるのは円筒状に掘り込まれた中央の1基である。このピットの覆土は2層に分けることができ、内部に黒色土、周囲にローム質土が認められた。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IB類。

55号陥し穴（第29図、P L24）

位置：IVC-5グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と直交する。

規模：上面=120×42cm、下段=98×27cm、深さ=27cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：47号陥し穴に等しい。

施設：47号陥し穴に等しい。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 IB類。

56号陥し穴（第29図、P L24）

位置：IVD-2グリッド、尾根南斜面に位置する。

主軸：尾根軸と直交するが、やや北に振れる。

規模：上面=134×52cm、下段=119×35cm、深さ=32cm

形状：上面・底面とも長楕円形を呈する。

覆土：47号陥し穴に等しい。

施設：47号陥し穴に等しい。

遺物：出土しなかった。

備考：陥し穴分類 I B類。

(2) 土坑

16号土坑 (第30図、P L 25)

位置：IV J-10グリッド、尾根北側斜面に位置する。

規模：上面=102×102cm、下面=90×83cm、深さ=52cm

形状：円形を呈する。

覆土：6層に分けられる。最下層の6層・5層は斜面上部からの崩落土であり、ロームブロックないしはロームブロック主体土である。2～4層は基本的に同質で基本土層II a・II b層とローム粒子・ロームブロックを含む褐色土層である。1層は基本土層II層類似の黒褐色土である。すべて自然堆積と考えられる。

遺物：出土しなかった。

18号土坑 (第30図、P L 25)

位置：IV I-20グリッド、尾根北側斜面に位置する。

規模：上面=106×97cm、下面=97×82cm、深さ=30cm

形状：円形を呈する。

覆土：3層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。

遺物：出土しなかった。

27号土坑 (第30図、P L 25)

位置：VA-11グリッド、尾根南斜面に位置する。

規模：上面=148×164cm、下面=126×115cm、深さ=41cm

形状：円形を呈する。

覆土：3層に分けられるが、自然堆積と考えられる。2層中にはIII層のロームブロックが多量に含まれている。

遺物：出土しなかった。

39号土坑 (第30図)

位置：IW-7グリッド、尾根北斜面に位置する。

規模：上面=141×133cm、下面=120×117cm、深さ=71cm

形状：円形を呈する。

覆土：6層に分けられる。ロームブロックを主体とする最上層の1層は、各層を切るような形で堆積しているため風倒木痕の可能性が高い。また堆積の薄い最下層の6層については、黒褐色を帯び、ローム粒やロームブロックの含有量も2～4層に比べてはるかに少なく堅くしまりが強い。一時期、この上面が底面として利用されていたことがうかがえる。その他は自然堆積と考えられる。

遺物：出土しなかった。

41号土坑 (第30・31図、P L 25・26)

位置：IV-13グリッド、尾根頂部に位置する。

規模：上面=132×138cm、下面=105×109cm、深さ=50cm

形状：円形を呈する。

覆土：7層に分けられる。6層は完全に赤化しており、初期の段階でここが火処となった様子が分かる。以後、1～5層まですべて炭化物を含んでおり、とりわけ4層には多数の炭化材が存在していた。また1～5層は極めて不自然な環境のもとで堆積したと類推でき、これらは人為的に埋め戻された可能性が高いのではないかと考えている。

遺物：1層から胴部中位以上の深鉢片、刃器の一部欠損品が出土している。炭化材の14C年代測定法の依頼は出していない。

時期：出土した土器から縄文時代後期に比定できるだろう。

57号土坑（第21図、PL16）

位置：IV J-21グリッド、尾根頂部に位置する。

規模：上面=98×(61以上) cm、下面=89×(59以上) cm、深さ=13cm

形状：17号陥し穴と重複し、土色・土質の相違から本跡の方が古い所産であると判断できた。隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと考えられる。

覆土：基本土層Ⅱ層に類似している。

遺物：出土しなかった。

第3節 出土遺物（第31図・PL26）

すべて菅原上第2遺跡から出土したもので、9の凹石が3号陥し穴、7の石鏃が19号陥し穴、1の無文の深鉢形土器と10の刃器が41号土坑、その他は表面採集したものである。

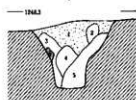
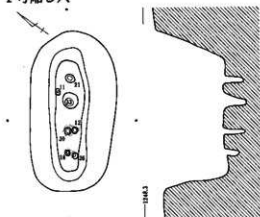
1の深鉢形土器は胴部下半を欠損しているものの、その他はほとんど欠落していない。内外面とも二次焼成が著しいものの、内面はヨコミガキ、外面もいずれかの方向でミガキが行われている。無文土器であるが、胎土・焼成・色調の具合から後期に該当するものとも思える。2と3は外面に半截竹管文が施され、また3には胎土に雲母を混入している。前期末葉から中期初頭の可能性が高い。4～6は櫛歯状工具による施文の胴部破片で、胎土に繊維を含んでいないことから前期後半以降であることには違いなく、とりあえず後期までと考えておきたい。

石器については、7～10の4点が出土した。7の石鏃は片脚部を欠している。黒曜石製である。8は黒曜石製のスクレイパーで、表面採集されたものである。9の凹石は安山岩製である。10の刃器は片即縁部欠を欠している。安山岩製である。

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
32-7	19号陥し穴	石鏃	2.3	(1.6)	0.3	(0.7)	黒曜石	片脚部欠
〃-8	表面採集	スクレイパー	3.0	5.3	1.0	18.5	黒曜石	
〃-9	3号陥し穴	凹石	9.0	8.8	4.0	440.0	安山岩	
〃-10	41号土坑	刃器	(11.5)	(5.1)	1.6	(108.3)	安山岩	片即縁部欠

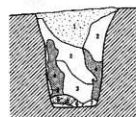
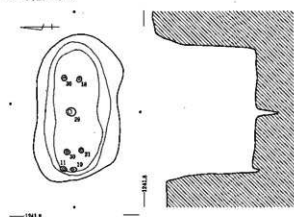
第2表 第2遺跡出土石器観察表

1号陥し穴



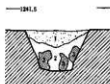
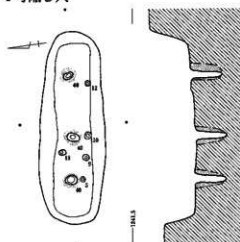
- 1 黒色土 II層類似 ROM粒子微量含むのみ
- 2 にぶい黄褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック含む
- 3 にぶい黄褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック多く含む
- 4 にぶい黄褐色土 混土層 ROMブロック多く含む
- 5 黄褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック主体
- 6 にぶい黄褐色土 ROMブロック

3号陥し穴



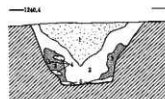
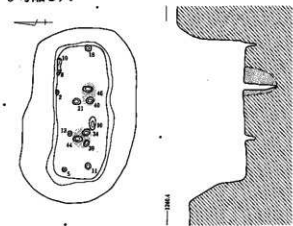
- 1 黒色土 II層類似 ROM粒子微量含むのみ
- 2 黒褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック多く含む
- 3 灰黄褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック多く含む
- 4 黄褐色土 ROMブロック (粘壁)
- 5 にぶい黄褐色土 混土層 ROMブロック主体
- 6 暗褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック多く含む
- 7 黒褐色土 混土層 黒色土主体

4号陥し穴



- 1 黒色土 II層類似 ROM粒子微量含むのみ
- 2 にぶい黄褐色土 混土層 細かいROM粒子多く含む
- 3 にぶい黄褐色土 混土層 ROMブロック主体

5号陥し穴

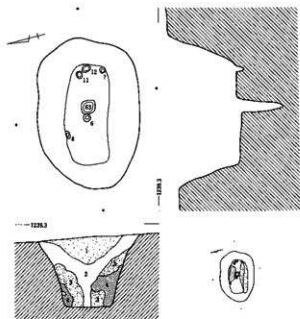


- 1 黒色土 II層類似 ROM粒子微量含むのみ
- 2 にぶい黄褐色土 混土層 ROM粒子・ROMブロック多く含む
- 3 明黄褐色土 ROMブロック (粘壁の可能性)
- 4 黒色土 ROMブロック
- 5 黒色土 細かいROM粒子・小ROMブロック少量含む

0 2m

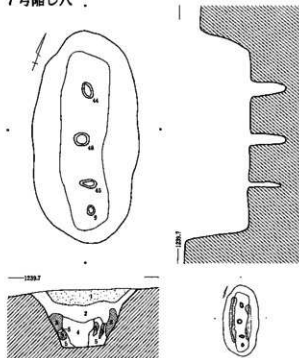
第9図 第1遺跡 陥し穴(1)

6号陥し穴



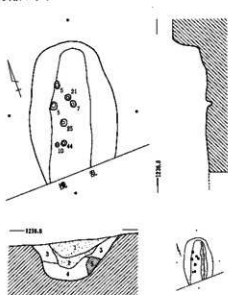
- 1 黒色土 II層類似 ローム粒子微量含むのみ
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む
- 3 明黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック主体
- 4 明黄褐色土 ロームブロック

7号陥し穴



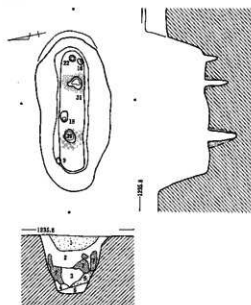
- 1 黒色土 II層類似 ローム粒子微量含むのみ
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む
- 3 明黄褐色土 ロームブロック (粘壁の可塑性)
- 4 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 5 にぶい黄褐色土 混土層 大形のロームブロック多く含む

8号陥し穴



- 1 黒色土 II層類似 ローム粒子微量含むのみ
- 2 黒色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む
- 3 黒褐色土 混土層 細かいローム粒子・ロームブロック含む
- 4 灰黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 5 明黄褐色土 ロームブロック

9号陥し穴

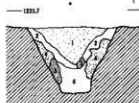
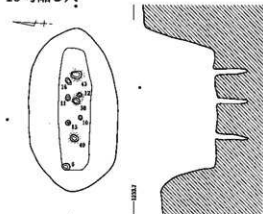


- 1 黒色土 II層類似 ローム粒子微量含むのみ
- 2 黒褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 3 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 4 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 5 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 6 黒褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック少ない
- 7 明黄褐色土 ロームブロック

0 2m

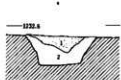
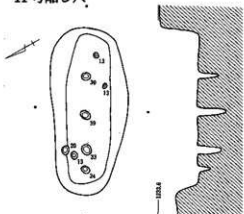
第10図 第1遺跡 陥し穴(2)

10号陥し穴



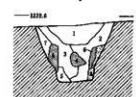
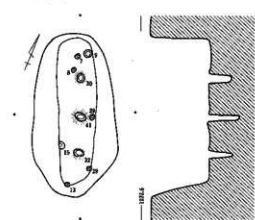
- | | | |
|-----------|--------------------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子多く含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 細かいローム粒子・ロームブロック含む | |
| 4 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ロームブロック主体 |
| 5 明黄褐色土 | ロームブロック | |
| 6 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |

11号陥し穴



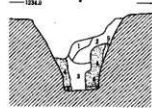
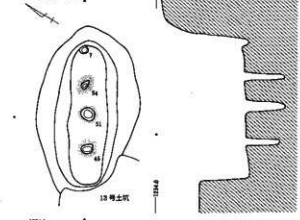
- | | | |
|-------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |

12号陥し穴



- | | | |
|-----------|---------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 3 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子含まないブロック |
| 5 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 明黄褐色土 | ロームブロック | (粘着) |
| 7 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 8 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |

14号陥し穴

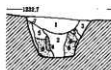
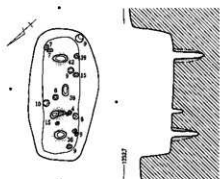


- | | | |
|-----------|-----------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子多く含む |
| 3 褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 明黄褐色土 | ロームブロック主体 | で混土層も混じる |
| 5 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 黒色土 | | 細かいローム粒子含む |



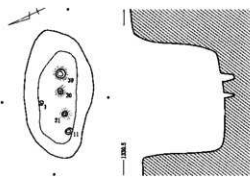
第11図 第1遺跡 陥し穴(3)

15号陥し穴



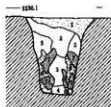
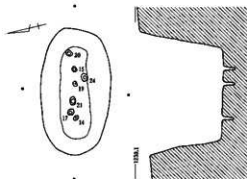
- | | | |
|-----------|-------|--------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 黒色土 | 混土層 | 細かいローム粒子含む |
| 4 明黄褐色土 | | ロームブロック |
| 5 黒褐色土 | 混土層 | 細かいロームブロック含む |
| 6 褐色土 | | ロームブロック主体 (粘壁) |
| 7 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |

16号陥し穴



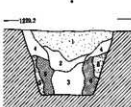
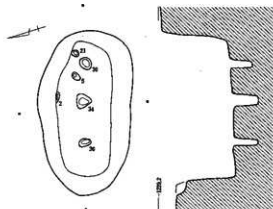
- | | | |
|--------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒色土 | | 細かいローム粒子少量含む |
| 3 黒色土 | 混土層 | 細かいロームブロック含む |
| 4 黒色土 | 混土層 | 細かいロームブロック少量含む |
| 5 黄褐色土 | | ロームブロック主体 (粘壁) |
| 6 黒褐色土 | 混土層 | 細かいロームブロック主体 (粘壁) |

17号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|----------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子含む |
| 3 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 灰黄褐色土 | | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 7 黄褐色土 | | ロームブロック (粘壁の可能性) |

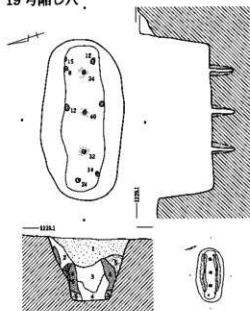
18号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒色土 | 混土層 | ローム粒子少量含む |
| 3 灰黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 にぶい黄褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子含む |
| 5 黒褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 黄褐色土 | | ロームブロック主体 (粘壁) |

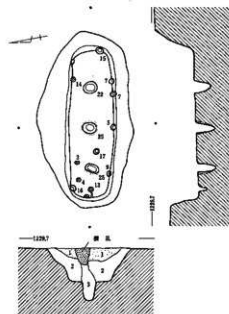
0 2m

19号陥し穴



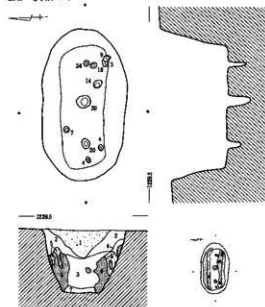
- | | | |
|-----------|---------|--------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック | (粘質) |

20号陥し穴



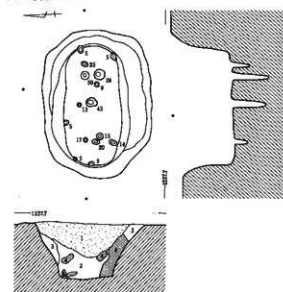
- | | | |
|--------|-------|--------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 黒色土 | 1層に類似 | ローム粒子少量含む (逆茂木痕) |

21号陥し穴



- | | | |
|---------|--------------------|---------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子含む |
| 3 灰黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 灰黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 灰黄褐色土 | 混土層 | ロームブロック・ロームブロック多く含む |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック | (粘質) |
| 7 黒色土 | 細かいローム粒子・ロームブロック含む | |

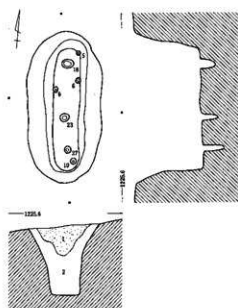
22号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|--------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒色土 | 混土層 | 細かいローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土層 | 細かいローム粒子多く含む |
| 4 黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |

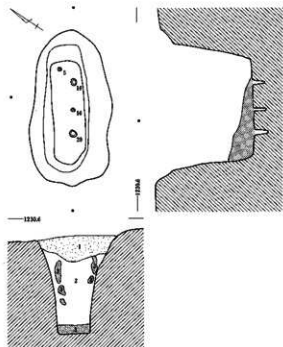
0 2m

23号陥し穴



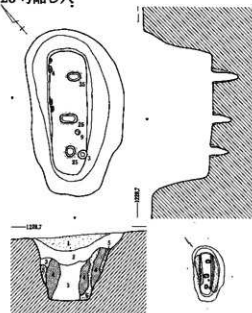
- 1 黒色土 Ⅱ層類似 ローム粒子微量含むのみ
 2 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む

24号陥し穴



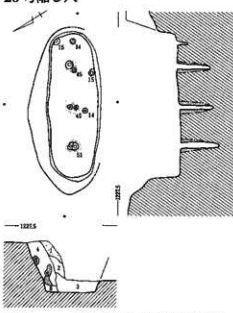
- 1 黒色土 Ⅱ層類似 ローム粒子微量含むのみ
 2 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック含む
 3 黄褐色土 ロームブロック

25号陥し穴



- 1 黒色土 Ⅱ層類似 ローム粒子ほとんど含まない
 2 黒色土 ローム粒子少量含む
 3 灰黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
 4 黄褐色土 ロームブロック (粘壁)
 5 にぶい黄褐色土 混土層ブロック ロームブロック多く含む (粘壁)

26号陥し穴

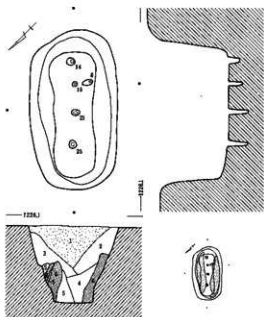


- 1 黒色土 Ⅱ層類似 ローム粒子微量含むのみ
 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロックを少量含む
 3 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
 4 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
 5 黄褐色土 ロームブロック
 6 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む



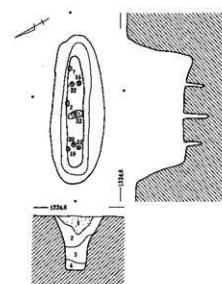
第14図 第1遺跡 陥し穴(6)

27号陥し穴



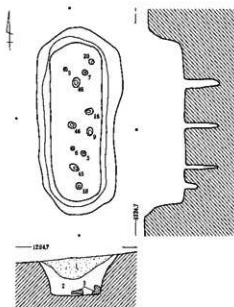
- | | | |
|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 灰黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 黒色土 | | ローム粒子少量含む |
| 4 灰黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 黄褐色土 | | ロームブロック (粘壁) |

28号陥し穴



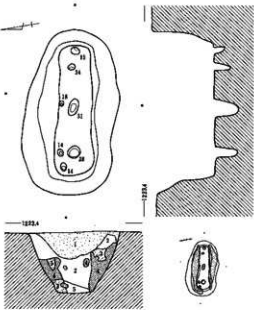
- | | | |
|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 灰黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 黒色土 | | ローム粒子・ロームブロック含む |

29号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|-----------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 黄褐色土 | | ロームブロック |

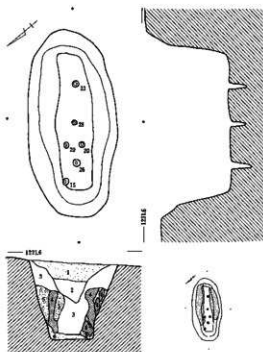
30号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 暗褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | | ロームブロック (粘壁) |
| 5 黒色土 | | ローム粒子・ロームブロック含む |

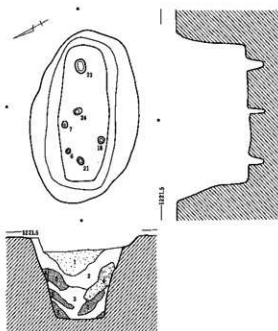
0 2m

31号陥し穴



- | | | |
|-----------|-----------------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒色土 | ローム粒子・ロームブロック含む | |
| 3 にふい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック（粘壁） | |
| 5 にふい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 黒色土 | ロームブロック含まない | |

32号陥し穴

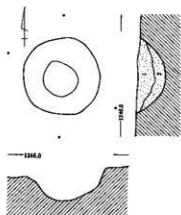


- | | | |
|-----------|---------------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 灰黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 3 にふい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 明黄褐色土 | 混土層混じるロームブロック | |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック | |



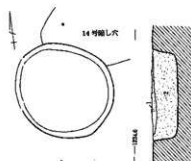
第16図 第1遺跡 陥し穴(8)

2号土坑



- | | | |
|--------|----------------------|-------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | 細かいローム粒子・ロームブロック少量含む | |

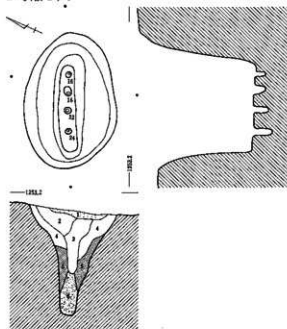
13号土坑



- | | | |
|-------|-----------|-------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒色土 | ロームブロック含む | |

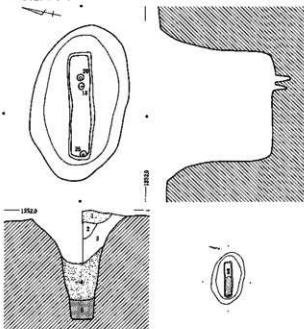
第17図 第1遺跡 土坑

1号陥し穴



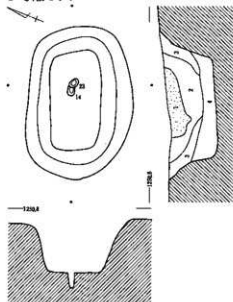
- | | | |
|-----------|---------------------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | 炭化物・細かいロームブロック含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 4 黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック主体 | (結露の可能性) |
| 6 にぶい黄褐色土 | ロームブロック主体で混土層が少量混じる | |

2号陥し穴



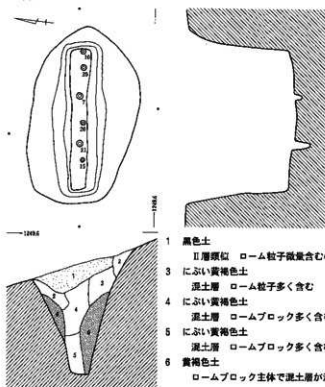
- | | | |
|---------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子少量含む |
| 2 黒褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子少量含む |
| 3 灰黄褐色土 | 混土層 | ロームブロック含む |
| 4 黄褐色土 | 混土層 | ボロボロしたロームブロック主体 |
| 5 黄褐色土 | | 堅くしまりの強いロームブロック |

3号陥し穴



- | | | |
|-----------|-----------|--------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子少量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 3 黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック主体 | で混土層が混じる |

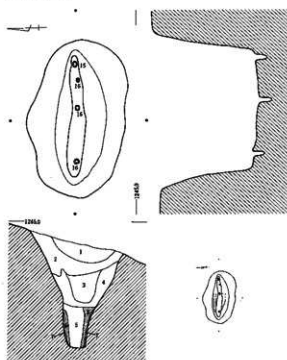
4号陥し穴



- | | | |
|-----------|-----------|-------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 4 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ロームブロック多く含む |
| 5 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ロームブロック多く含む |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック主体 | で混土層が混じる |

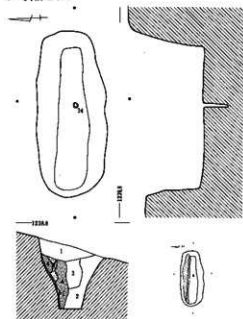
第18図 第2遺跡 陥し穴(1)

5号陥し穴



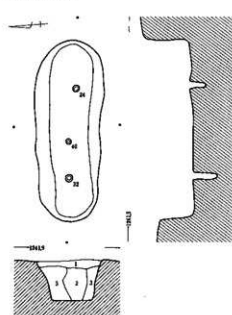
- | | | |
|-----------|-----------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子・ロームブロック少量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子多く含む |
| 3 褐色土 | 混土层 | ロームブロック多く含む |
| 4 褐色土 | ロームブロック主体 | 混土层が混じる |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック主体 | 混土层が少量混じる |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック主体 | (粘壁) |
| 7 にぶい黄褐色土 | 5層に類似した土層 | に薄く見られる (粘壁) |

7号陥し穴



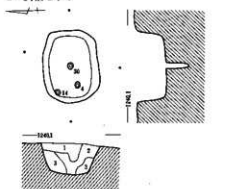
- | | | |
|--------|---------|-------------------|
| 1 暗褐色土 | 混土层 | ローム粒子含む |
| 2 黄褐色土 | 混土层 | ロームブロック多く含む |
| 3 褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック | (粘壁) |
| 5 暗褐色土 | 壁と4層の間 | に薄く見られる (粘壁) |

6号陥し穴



- | | | |
|-----------|-----|-----------------|
| 1 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子含む |
| 2 暗褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック主体 |
| 3 褐色土 | 混土层 | ロームブロック多く含む |

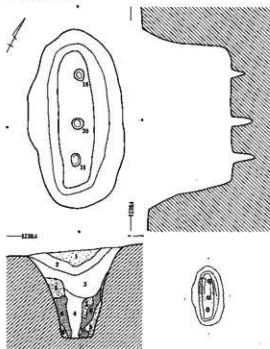
8号陥し穴



- | | | |
|-----------|-----|-------------------|
| 1 暗褐色土 | 混土层 | ローム粒子少量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子多く含む |
| 3 黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |

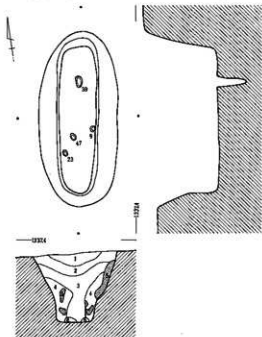
0 2m

9号陥し穴



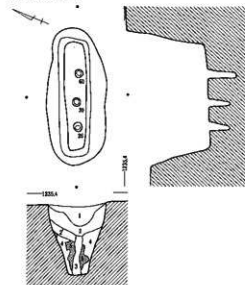
- | | | |
|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 暗褐色土 | | ローム粒子・ロームブロック少量含む |
| 3 にふい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 4 褐色土 | | ローム層主体に黒褐色土が混じる |
| 5 褐色土 | | 混土層 (粘壁) |
| 6 黄褐色土 | | ロームブロック (粘壁) |

10号陥し穴



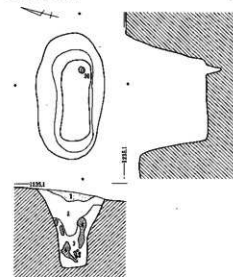
- | | | |
|---------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子・炭化物粒子少量含む |
| 2 暗褐色土 | | 細かいローム粒子含む |
| 3 褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 4 褐色土 | 混土層 | 大形ロームブロック多く含む |
| 5 黄褐色土 | | ロームブロック |
| 6 灰黄褐色土 | | 酸化鉄の集積あり |

11号陥し穴



- | | | |
|------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子・炭化物粒子少量含む |
| 2 にふい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・細かいロームブロック含む |
| 2' にふい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 褐色土 | 混土層 | ローム粒子多く含む |
| 4 褐色土 | 混土層 | ロームブロック多く含む |
| 5 黄褐色土 | | ロームブロック |

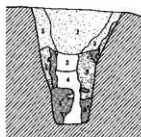
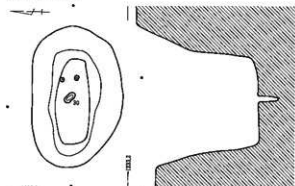
12号陥し穴



- | | | |
|--------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子微量含むのみ |
| 2 暗褐色土 | 混土層 | ローム粒子・小ロームブロック多く含む |
| 3 褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | | ロームブロック |

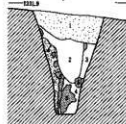
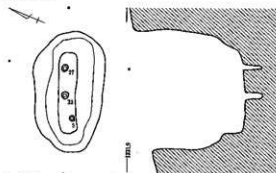


13号陥し穴



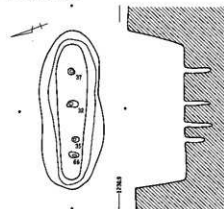
- 1 黒褐色土 II層類似 โรมัน粒子・ロームブロック少量含む
- 2 暗褐色土 細かいローム粒子多く含む
- 3 暗褐色土 細かいローム粒子含む
- 4 褐色土 混土層 โรมันブロック多く含む
- 5 褐色土 混土層 โรมัน粒子・ロームブロックを多量に含む
- 5' 黄褐色土 โรมันブロック主体で混土層が混じる

14号陥し穴



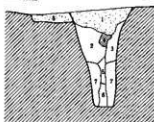
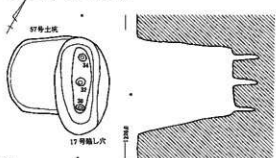
- 1 にふい黄褐色土 炭化物粒子・ローム粒子少量含む
- 2 褐色土 混土層 โรมัน粒子多く含む
- 3 褐色土 混土層 โรมัน粒子・ロームブロック多く含む
- 4 褐色土 混土層
- 5 褐色土 混土層
- 5 黄褐色土 โรมันブロック

15号陥し穴



- 1 黒褐色土 II層類似 โรมัน粒子少量含むのみ
- 2 暗褐色土 細かいローム粒子多く含む
- 3 暗褐色土 混土層 โรมัน粒子・ロームブロック多く含む
- 4 褐色土 混土層 (貼壁の可能性)
- 5 黄褐色土 โรมันブロック

17号陥し穴・57号土坑

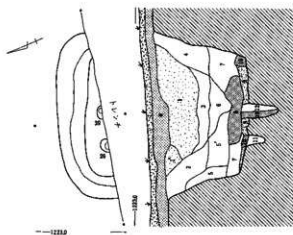


- 1 黒褐色土 II層類似 โรมัน粒子・小ロームブロック少量含む
- 2 暗褐色土 โรมัน粒子・小ロームブロック含む
- 3 褐色土 混土層 โรมัน粒子・ロームブロック多く含む
- 4 黄褐色土 โรมันブロック
- 5 褐色土 混土層 細かいロームブロックを多量に含む
- 6 黒褐色土 โรมันブロックを含む
- 7 暗褐色土 混土層 โรมัน粒子・ロームブロック少量含む
- 8 にふい黄褐色土 II層類似 細かいローム粒子含む

0 2m

第21図 第2遺跡 陥し穴(4)

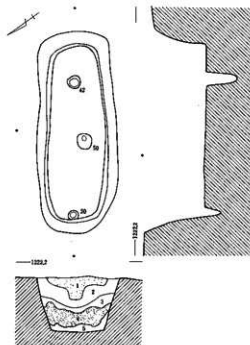
19号陥し穴



- | | | |
|----|---------|-------------------------|
| I | 黒色土 | |
| II | にふい黄褐色土 | |
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック少量含む |
| 1' | 黒褐色土 | ローム粒子ほとんど含まない |
| 2 | 暗褐色土 | 細かいローム粒子とロームブロック少量含む |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 4 | にふい黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 | 褐色土 | ローム粒子・ロームブロック少量含む |
| 5' | 褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 6 | 褐色土 | ローム粒子主体で暗褐色土が混じる |
| 7 | 褐色土 | 混土層 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む |
| 8 | 黄褐色土 | 混土層 ロームブロック主体 |
| 9 | 灰黄褐色土 | 混土層 ロームブロック多く含む 下部鉄分集積 |
| 10 | 黄褐色土 | ロームブロック |
| 11 | 暗褐色土 | 細かいロームブロック多く含む |
| 12 | 暗褐色土 | ロームブロック多く含む |

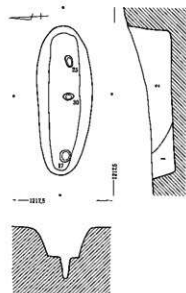


20号陥し穴



- | | | |
|---|------|------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒子少量含む |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 4 | 褐色土 | 混土層 ロームブロック多量に含む |
| 5 | 褐色土 | 混土層 ロームブロック少量含む |

21号陥し穴

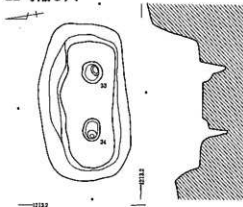


- | | | | |
|---|------|-----|-------------------|
| 1 | 褐色土 | 混土層 | ローム粒子少量含む |
| 2 | 暗褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |



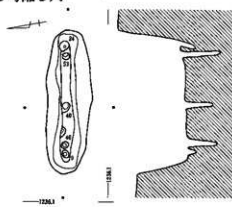
第22図 第2遺跡 陥し穴(5)

22号陥し穴



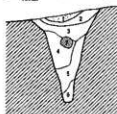
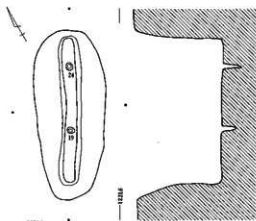
- 1 暗褐色土 細かいローム粒子・ロームブロックを少量含む
- 2 にぶい黄褐色土 混土层 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 3 褐色土 混土层 ローム粒子・小ロームブロック多く含む
- 4 黄褐色土 ロームブロック

23号陥し穴



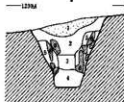
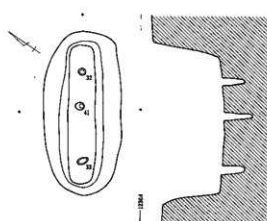
- 1 灰黄褐色土 ローム粒子少量含む
- 2 にぶい黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む
- 3 にぶい黄褐色土 ローム粒子ほとんど含まない
- 4 黄褐色土 混土层 ロームブロック多く含む
- 5 黄褐色土 混土层
- 6 黄褐色土 ロームブロック

24号陥し穴



- 1 黒色土 II層類似 ローム粒子ほとんど含まない
- 2 灰黄褐色土 複雑ローム粒子わずかに含む
- 3 にぶい黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む
- 4 暗褐色土 混土层 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 5 明黄褐色土 混土层 ロームブロック主体
- 6 黒褐色土 1層とロームブロックの混在層
- 7 黄褐色土 ロームブロック

25号陥し穴

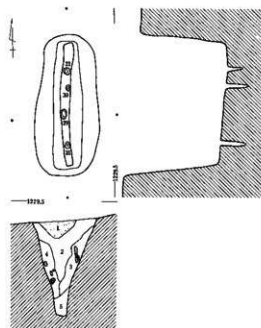


- 1 黒色土 II層類似 細かいローム粒子少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒子含み、細かいロームブロックも少量含む
- 3 褐灰色土 ローム粒子・ロームブロック含む
- 4 黒褐色土 混土层 ローム粒子・ロームブロックを多く含む
- 5 黄褐色土 混土层
- 6 黄褐色土 ロームブロック



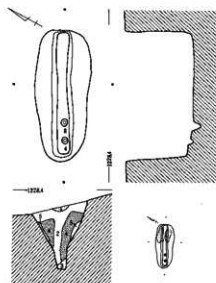
第23図 第2遺跡 陥し穴(6)

26号陥し穴



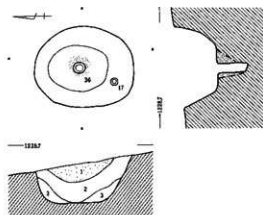
- | | | |
|-----------|----------------------|-----------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子少量含む |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子・細かいロームブロック少量含む | |
| 3 にぶい黄褐色土 | ロームブロック多く含む、混土層が混じる | |
| 4 暗褐色土 | 混土層 | ロームブロック主体 |
| 5 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロックと黒色土が混じる |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック | |

28号陥し穴



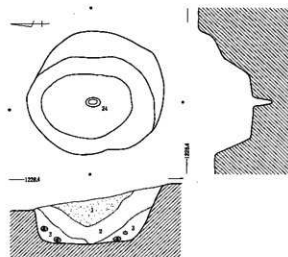
- | | | |
|-----------|-----------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子少量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土層 | ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック主体 | で混土層が少量混じる (粘壁) |
| 5 黒褐色土 | 壁と4層との間に | ブロック的に見られる (粘壁) |

29号陥し穴



- | | | |
|-----------|--------|--------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | 細かいローム粒子少量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | 1層より | ローム粒子多く含む |
| 3 褐色土 | ローム粒子・ | ロームブロック多く含む |

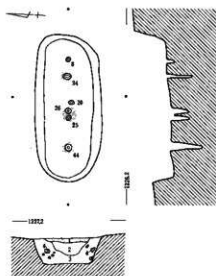
30号陥し穴



- | | | |
|-----------|---------|--------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | 細かいローム粒子少量含む |
| 2 にぶい黄褐色土 | ローム粒子・ | ロームブロック含む |
| 3 褐色土 | ローム粒子・ | ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック | |

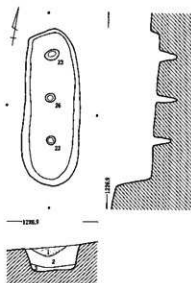
0 2m

31号陥し穴



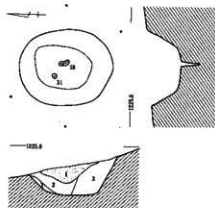
- 1 暗褐色土 II層類似 細かいローム粒子少量含む
- 2 灰黄褐色土 細かいローム粒子多く含む、ロームブロックも含む
- 3 褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 4 黄褐色土 ロームブロック

32号陥し穴



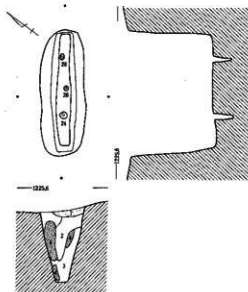
- 1 黒褐色土 II層類似 ローム粒子少量含む
- 2 にふい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 3 黒褐色土 ローム粒子ほとんど含まない

33号陥し穴

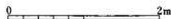


- 1 黒褐色土 II層類似 ローム粒子少量含む
- 2 黒褐色土 細かいローム粒子含む
- 3 暗褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む

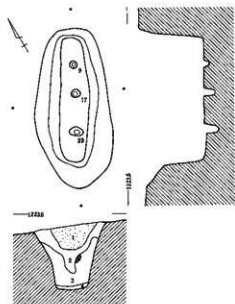
34号陥し穴



- 1 黒色土 II層類似 ローム粒子少量含むのみ
- 2 暗褐色土 細かいローム粒子・ロームブロック含む
- 3 黄褐色土 混土層
- 4 黄褐色土 ロームブロック

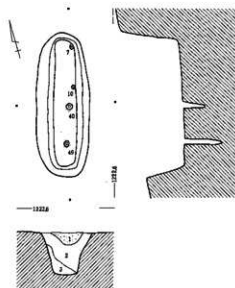


35号陥し穴



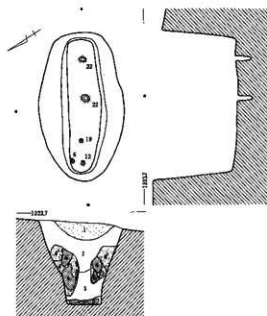
- | | | |
|-----------|--------------------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子少量含む |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子・細かいロームブロック含む | |
| 3 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子少なく、堅くしまりが強い | |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック | |

36号陥し穴



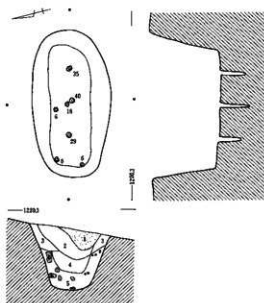
- | | | |
|-----------|--------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 細かいローム粒子少量含む | |
| 2 にぶい黄褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 3 褐色土 | 混土层 | ローム粒子主体で2層の混土层が混入する |

37号陥し穴



- | | | |
|---------|---------------------|-------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 灰黄褐色土 | 細かいローム粒子含む | |
| 3 褐色土 | 混土层 | ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック主体で混土层が少量混じる | |
| 4' 黄褐色土 | ロームブロック主体 | |
| 5 黒色土 | ローム粒子を含まず、堅くしまりが強い | |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック | |

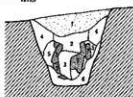
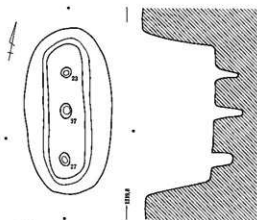
38号陥し穴



- | | | |
|--------|-----------------|-----------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子少量含む | |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子・黒色土ブロック含む | |
| 4 暗褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 5 褐色土 | 混土层 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック | |

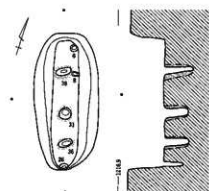
0 2 m

40号陥し穴



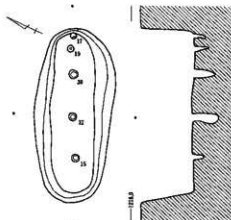
- | | | |
|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 灰黄褐色土 | | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 4 灰黄褐色土 | | ローム粒子・ロームブロック多く含む |
| 5 にぶい黄褐色土 | | ロームブロック主体で混土層が混じる |
| 6 暗褐色土 | | ロームブロック少量含む |
| 7 黄褐色土 | | ロームブロック |

43号陥し穴



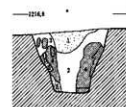
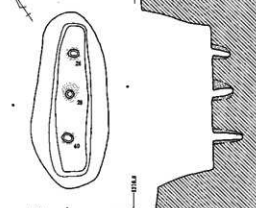
- | | | |
|---------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子ほとんど含まない |
| 2 黒褐色土 | | ローム粒子含む |
| 3 黄褐色土 | | 大形のロームブロック主体で混土層が混じる |
| 4 灰黄褐色土 | | 堅くしまりの強い土壌化した土層 |
| 5 黄褐色土 | | ロームブロック |

42号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | | ローム粒子・細かいロームブロック含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | | ロームブロック多く含む |
| 4 黄褐色土 | | 混土層 ロームブロック多量に含む |
| 5 黄褐色土 | | 混土層 |
| 6 黒褐色土 | | 堅くしまりの強い土壌化した土層 |
| 7 黄褐色土 | | ロームブロック |

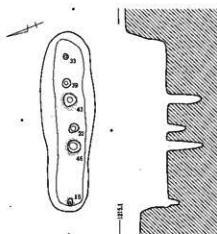
44号陥し穴



- | | | |
|-----------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 | ローム粒子微量含むのみ |
| 2 黒褐色土 | | ローム粒子・細かいロームブロック多く含む |
| 3 にぶい黄褐色土 | | ロームブロックと2層が混じる |
| 4 黄褐色土 | | ロームブロック (粘壁) |
| 5 黄褐色土 | | 混土層 (粘壁) |

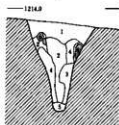
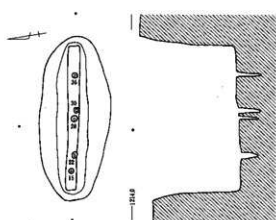
0 2m

45号陥し穴



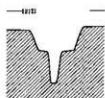
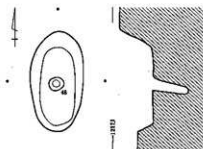
- | | |
|-----------|-------------------|
| 1 黒色土 | II層類似 ローム粒子微量含むのみ |
| 2 にふい黄褐色土 | I層にロームブロックが混じる |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック |

46号陥し穴

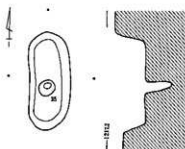


- | | |
|-----------|-----------------------|
| 1 黒褐色土 | II層類似 ローム粒子微量含むのみ |
| 2 にふい黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 2 にふい黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む |
| 3 にふい黄褐色土 | ロームブロック主体で混土層が混じる |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック主体で混土層が混じる |
| 5 にふい黄褐色土 | 微粒ロームの堆積 (ローム粒子の流れ込み) |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック |

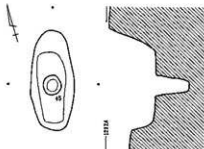
47号陥し穴



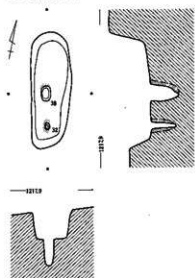
48号陥し穴



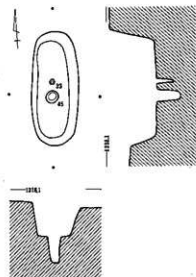
49号陥し穴



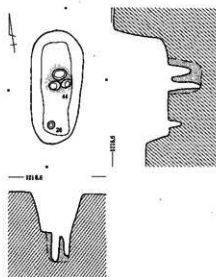
50号陥し穴



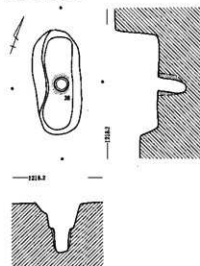
51号陥し穴



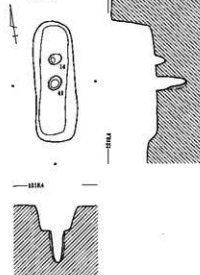
52号陥し穴



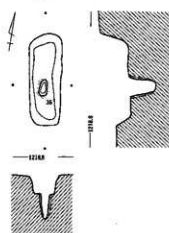
53号陥し穴



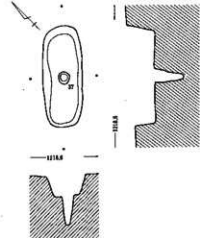
54号陥し穴



55号陥し穴



56号陥し穴

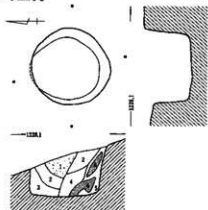


47~56号陥し穴

1 黒褐色土 下部にローム粒子・ロームブロックを含む

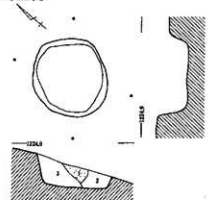


16号土坑



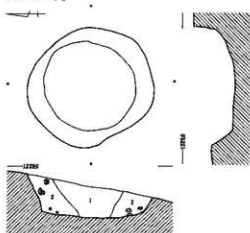
- 1 黒褐色土 II層類似 ローム粒子少量含む
- 2 暗褐色土 混土層 ローム粒子多く含む、ブロックも含む
- 3 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子多量に含む、ロームブロックも含む
- 4 褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 5 褐色土 混土層
- 6 黄褐色土 ロームブロック

18号土坑



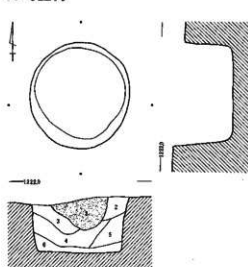
- 1 黒褐色土 II層類似 ローム粒子少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを含む
- 3 褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多く含む

27号土坑



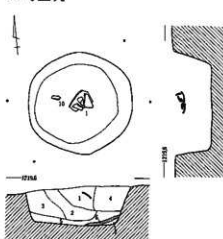
- 1 褐色土 ローム粒子・細かいロームブロック含む
- 2 にぶい黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 3 黄褐色 ロームブロック

39号土坑



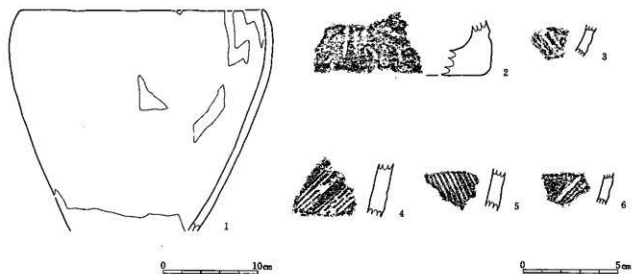
- 1 黄褐色土 ロームブロック主体
- 2 褐灰色土 細かいローム粒子少量含む
- 3 黒色土 細かいローム粒子少量含むのみ
- 4 黒褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック含む
- 5 灰黄褐色土 混土層 ローム粒子・ロームブロック多く含む
- 6 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量含む 堅くしまり強い

41号土坑

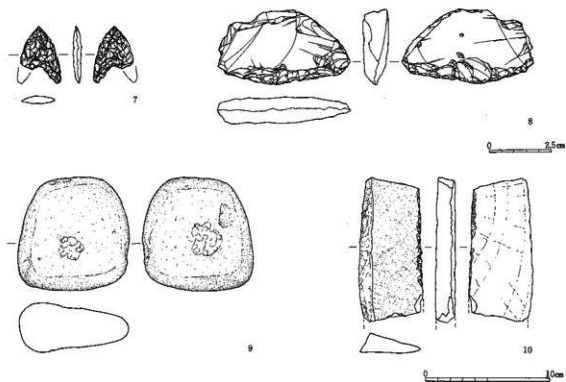


- 1 黒褐色土 炭化物含む 土器・石器包含
- 2 黒褐色土 細かいローム粒子・炭化物含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子多く含む、炭化物も含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子3層より多く含む、大形炭化物も含む
- 5 黒褐色土 ローム粒子・炭化物少量、焼土ブロック微量含む
- 6 黄褐色土 焼土ブロック
- 7 暗褐色土 焼土粒子含む





第31圖 第2遺跡 出土土器



第32圖 第2遺跡 出土石器

第4章 成果と課題

第1節 陥し穴の分類

陥し穴の分類については、平面形態・大きさ・深さ・断面形態・底部施設などの相違でいくつにも分類可能で、従来から様々な分類がなされてきた。

両遺跡の整理にあたっては、底部施設を重視した神奈川県横浜市霧ヶ丘遺跡における今村啓爾氏の分類(今村 1973)と、類似した陥し穴についても四隅の作出法や中央部の壁の張りの具合などから、小分類を進め配列単位の抽出を試みた佐藤宏之氏の分類(佐藤 1989b)を参考にして、平面形態で大別分類し、そのうえで断面形態や深さ、あるいは坑底ビットの形状や覆土の状況をもとに細別分類を行い、平面形の大小については重要視しないこととした。

I類

規模が小さく、基本をなす坑底ビットは1基のみのものとする。壁面に中段施設は存在せず、上端から下端へとスムーズに展開していくものである。

I A類 (第2遺跡29・30・33号陥し穴)

円形に近い形状で、掘り込みが浅い。壁は斜めに立ち上がる傾向が強い。坑底ビットの断面形態は太い円筒状を呈する第2遺跡29号陥し穴と不明である2基に分けられる。平面形の規模でみると大きめの30号陥し穴と小さめのその他の2群が存在する。

I B類 (第2遺跡47～56号陥し穴)

長方形から長楕円形を呈し、坑底ビットの断面形態は太い円筒状を呈す。小形の類ばかりだが、これらはすべてローム面が低位置に存在していたことから、本来の掘り込みはやや深めとなる可能性もある。

I C類 (第2遺跡3・8号陥し穴)

長方形を呈し、その長幅比が際立って大きいものである。掘り込みは浅い。坑底ビットの断面形態は明確に把握していないが、平面写真を見るかぎりI B類よりかなり細めである。深度および坑底ビットの形状の相違からI B類と明確に分離した。2基しか検出していないが、大小の2群が存在すると考えられる。

なお第1遺跡6号陥し穴は、平面形態はI C類に類似しているが、深度が深く、断面形態も若干ロート状を呈しており、また逆茂木穴の形状も上端が幅広い円錐形である。しかしながら基本をなす坑底ビットが1基という点を重視してI類に大別するが、上記の細別にはあてはまらないためI類その他としておきたい。

II類

基本となる坑底ビットが2基のみのものである。図上には明記されていないが、底部近くでわずかながら中段施設を持つものである。

II A類 (第1遺跡5号陥し穴、第2遺跡22号陥し穴)

I C類の大形グループに似た平面形態であるが、坑底ビットの断面形態はやや円筒状のもの(第1遺跡5号)と円錐状のもの(第2遺跡22号)とがある。

II B類 (第1遺跡9号陥し穴、第2遺跡45号陥し穴)

長軸の長さが飛躍的に伸びた長楕円形を呈するものである。2基しか調査していないが、長幅比の割合はかなりの差がある。基本をなす坑底ピットの形態については両者とも円錐形だが、第1遺跡9号の場合は上端の幅の広いもので、第2遺跡45号は円筒状に近いものである。

Ⅲ類

坑底ピットを一部検出できていないものも含まれるが、坑底に3基を穿つものを基本パターンとするもので、平面規模は全体に大形化していく傾向が強い。図上では明記されていないが、断面形態には必ず中段施設が用意されており、上段・中段・下段とも長楕円形から隅丸長方形を呈している。本両遺跡の主体となるものである。多種多様な構造を持つが、いくつかの類型化が可能である。

ⅢA類（第1遺跡4・11・20・29号陥し穴、第2遺跡6・20・21・31・32・35・36・38号陥し穴）

底部近くに中段施設を持ち、掘り込み面が浅いものを一括したが、さらに細分できる可能性もある。第2遺跡31・32号は比較的小ぶりで深さも極端に浅く、中段のレベルももっとも低位置に存在する。ただし、坑底ピットの断面形態は31号が円錐状、32号が大きな円筒状を呈するもので相違が認められる。第1遺跡の一群と第2遺跡6・20・21号の場合は、第2遺跡31・32号よりもやや深さが増し、中段施設も若干上位置に認められる。平面規模も第2遺跡21号を除けば大形の類がそろっている。坑底ピットの断面形態は円筒状が主体だが、第2遺跡6号は太い円筒状、同21号・第1遺跡11号は円錐状となっており、また第2遺跡20号は上端の幅が広い円錐状である。第2遺跡35・36・38号はさらに中段施設が上昇し、深度も深まるもので、また小形のものが主要な構成要素となる。35・38号の坑底ピットは円筒状の断面形態を示すが、36号については細い円錐状を呈する。なお、ⅢA類はすべて単純な自然堆積で埋没しており、「貼壁」の類はない。

ⅢB類（第1遺跡1・7・10・12・14・15・18・19・21・25～27・30～32号陥し穴、第2遺跡9・10・19・25・37・40・42～44号陥し穴）

平面形態はⅢA類に等しいが、規模的には先で見つ小形のものがほとんど見当たらない。ただし深さを増すため、上面の規模についてはⅢA類よりもひとまわり大きく感じさせる。中段施設の位置はⅢA類をさらに上回るものが多い。「貼壁」を想定させる陥し穴がほとんどである。坑底ピットの断面には太い円筒状のもの（第2遺跡40・42・43号）、円筒状のもの（第1遺跡1号、第2遺跡9・19・25号）、細長い円筒状のもの（第1遺跡27号）、円錐状のもの（第1遺跡10・14・15・19・21・30号、第2遺跡9・10・37・44号）、細長い円錐状のもの（第1遺跡25・26・31・32号）があり、少なくとも前二者と後二者とでは後二者の方が圧倒的に陥し穴全体の掘り込みが深い。

ⅢC類（第1遺跡3・16・17・22・23・24・28号陥し穴、第2遺跡7・11～14・15・17・23号陥し穴）

掘り込みがⅢB類よりも深く、中段施設もさらに上の位置にあるものをまとめたが、ⅢB類同様、ここでも「貼壁」らしき土層観察が行えたものがほとんどである。平面規模は概してⅢB類よりも小さめである。坑底ピットの断面形態は細い円錐状（一部円筒状もある）が大部分だが、その中には非常に幅の狭い円錐状を呈する第1遺跡3・11・22・24・28号、第2遺跡7号が存在する。その他、第1遺跡16・23号、第2遺跡11・14号が円錐状を呈している。

なお、この他にⅢ類には大別できるものの、細分不可能な第1遺跡8号陥し穴がみられ、これはⅢ類その他としておきたい。

Ⅳ類（第2遺跡1・2・4・5・24・26・28・34・46号陥し穴）

長狭化が著しい陥し穴である。1号および5号を除けば、中段以下は長方形かつ垂直方向に掘削されており、各面々がきれいに約90°の角度で連結されている。長幅比がもっとも減少するためか「貼壁」を連想させるものはほとんどみられないが、5号下部の長軸両壁面にはまさに地山と見間違えるほどの

純ローム質土が充填されており、「貼壁」の存在を連想させる貴重な資料でもある。坑底ピットにも特徴があり、全体として検出が困難であり、あるいは逆に4基以上確認されることもある。しかもⅠ～Ⅲ類よりも深度が浅く、断面形態が円筒状のものは1号のみで、ほかは細い円錐状を呈している。

第2節 陥し穴の時間的位置づけ

陥し穴については縄文時代早期からおよそ後期頃の所産と考えるのが一般だが、今村啓爾氏によれば古くは草創期に属し、新しいものでは千葉県寺沢遺跡(矢吹 1977)にみられる、かよわい当歳馬をねらって出没する野良犬を退治するために作られた「犬落し」のように近世に属するものも含まれ(今村 1983)、最近では後期旧石器時代から近年に至るまで日本各地で陥し穴が構築されていたことが判明しつつある(稲田 1993、今村 1999)。一方、山梨県や長野県においても、掘削工具痕の痕跡や逆茂木痕の放射性炭素年代測定法などにより、「古代以降、特に中世あたりの所産の可能性」の高い山梨県丘の公園第5遺跡(保坂 1990)での事例や「中世末～近世初頭頃に比定できる」諏訪郡原村の南平遺跡(桜井 2000)での事例など、中世頃に比定される陥し穴の存在も明らかになってきている。

しかしながら両遺跡では、陥し穴と他の遺構との重複関係は認められず、さらに時期決定できる遺物もまったく出土していない。遺構に伴出する土器としては唯一、第2遺跡41号土坑出土の縄文後期と思われる土器が認められるが、本土坑の覆土堆積状況は他の陥し穴の様相とは大きく異なり、時期決定の有力な材料にはなり得ず、両遺跡の陥し穴の時期決定は、困難さを伴っている。

そこで、周辺遺跡で検出された陥し穴との対比により、時期の把握に努めたい。なお、ここでは形態分類の差違を時期差に基づくものとする前提条件で考えていく。

茅野市馬捨場遺跡では47基の陥し穴が調査され、他遺構との重複関係や出土土器、それに覆土下層内炭化物や坑底ピット内炭化物の放射性炭素年代測定結果により、所産年代の把握できる陥し穴の存在とその形態変遷をたどることができる良好な資料を提示している(河西 2002)。同遺跡の縄文時代の陥し穴は、①円形で掘り方は深く比較的大形、複数の坑底ピット不在のもの(SK124ほか)→②楕円形で小規模、中央部に坑底ピットが1基存在するもの(SK401ほか)→③長楕円形で大形、複数の坑底ピットが存在するもの(SK07・SK19ほか)、へと変化していることがうかがえる。そして時期については、①には縄文早期後半以前、②には縄文早期後半、③には縄文中期初頭Ⅱ(五領ヶ台Ⅱ式及びⅡ式併行期)の年代をそれぞれ与えることができると論じている。また同遺跡では中世に比定できる一群の存在も認められている。こうした形態変遷を本両遺跡に置き換えてみると、①に該当するタイプはみられないが、②にはⅠ類が、③にはⅡ類・Ⅲ類・Ⅳ類があてはまるといえる。さらに馬捨場遺跡での所見では、③の中でも時期が新しくなるにつれて、より大形化し、かつ長楕円形化してくることが理解できる。馬捨場遺跡での所見を援用するならば、本遺跡群でも、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類→Ⅳ類という変遷過程が把握できる。以下こうした形態変遷を軸に置き、各類の時期の詳細について、周辺遺跡で得られている知見に基づいて考察していきたい。

ⅠA類は有効な資料が茅野市稗田頭B遺跡にみられる。第7号土坑(陥し穴)はその廃棄後、覆土上層に縄文時代早期末の絡条体疋痕文を伴う集石(炉の可能性有り)が発見されており、報告者は早期末という年代を与えている(小林ほか 1994)。この見解は馬捨場遺跡での所見ともほぼ一致する。このⅠA類については、早期後半から末の年代に比定できるものと考えられる。

ⅠB類は、茅野市梵天原遺跡の第1群2類B種(守矢 1996)、同市上の平遺跡の第Ⅱ群1類A種に代

表されるもので、上の平遺跡では重複関係からこれが最古段階と考えられ、遺跡内から出土する最古の土器が前期初頭であるからそれ以前に構築されたものと認識されている(守矢 1995)。一方、地域は異なるものの、佐久市下茂内遺跡ではSⅡテフラの軽石が降下する以前にすべての陥し穴が確認されているが、覆土中にこれを含むものと一切含まないものと分離でき、後者については遺物の出土状況から早期末から前期初頭の間に構築されたと考えられている(小林 1992)。しかしながら上の平遺跡同様、連続して出土する土器群よりも古い可能性が高く、早期末以前と考えるのが無難ではなからうか。ちなみに多摩ニュータウンの遺跡群では早期後半を中心とした時期に営まれたという(佐藤 1989a)。なお、ⅠA類とⅠB類の先後関係は不明である。

ⅠC類でも大形のもの梵天原遺跡第Ⅰ群2類B種に近似しているが、時間的な位置関係は言及されていない。一方、小形の部類には良好な資料はみあたらない。

ⅡA類は茅野市久保御堂遺跡第Ⅰ群1類(守矢 1997)、梵天原遺跡第Ⅰ群2類A種および第1類B種の一部に該当する。上の平遺跡第Ⅱ群2類にも通ずるところがあるが、これらは多種多様でしかも長狭化が進んでおり、馬捨場遺跡での形態変遷からすれば、全体的に本両遺跡のⅡA類よりも若干新しいものと判断できる。なお、久保御堂遺跡と梵天原遺跡では時期不明、やや新しい上の平遺跡では、ほかの遺構との重複関係・配列位置・集落との関係から前期前半以降から中期初頭の間の前半段階と考えられている。こうした類例と同タイプであるとするなら、前期前半かそれよりもやや古い時期を想定すべきだろう。

ⅡB類は長狭化が進行したもので、またⅢ類に近い平面形態となっているから、馬捨場遺跡での形態変遷からすれば、ⅡA類→ⅡB類→Ⅲ類という先後関係も可能性があろうが、共存することも当然考えられる。上の平遺跡第Ⅱ群2類の一部に該当し、梵天原遺跡でも類例が認められる。Ⅲ類が前期後半のいつ頃から発生するのは不明であるが、先述の上の平遺跡での所見を参考にすれば、前期前半からそれよりも若干新しい存在とみるべきだろう。

Ⅲ類については、掘り込み面の深さ・坑底ピットの断面形態・覆土の観察状況・中段施設の位置・平面形態などから3類に分類した。あくまでも形態変化に重点をおいて先後関係を推測してみれば、ⅢA類の第2遺跡31・32号はⅡB類に類似しており、ⅢC類の第2遺跡11・23号はⅣ類に近似するため、ⅢA→ⅢB類→ⅢC類という変遷過程を類推することができよう。梵天原遺跡の第Ⅰ群1類A・B種の大半が本類に該当するが、報告者も一部指摘しているように諏訪市ジャコッパラ遺跡の1区A4号小竪穴(陥し穴)もこれに相当し、この底部付近で検出した炭化した遮蔽物の放射性炭素年代測定法によれば、5580±190 B.P.年という値が得られ(辻本 1988)、縄文時代前期後半から末葉に相当する(川崎 1997)。縄文前期後半のある時期には出現している可能性が高いと考えられる(註1)。

先述のジャコッパラ遺跡では、Ⅲ類に該当する1区A4号小竪穴(陥し穴)の他に、Ⅳ類に相当する1区A5号小竪穴(陥し穴)の存在もみられ、Ⅲ類からⅣ類への変遷をたどることができる。1区A5号小竪穴(陥し穴)の底部付近には炭化した遮蔽物が存在し、同様に放射性炭素年代測定法を行ったが5390±260 B.P.年という、より新しい年代が提示された。縄文時代前期末葉から中期初頭という年代に符合する(川崎 1997)。2点だけの炭化物同定の結果ではあるが、形態変遷の上からみても妥当性は高いと考えられよう。また馬捨場遺跡でも本遺跡群のⅣ類に相当するとみられるタイプは中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式及びⅡ式併行期を下限年代に想定しており、蓋然性は高いものとなっている。

八ヶ岳西南麓では近年になり、中世頃に比定される陥し穴の存在が明らかとなり(桜井 1998)、その類例も少なくないが(河西 2002)、本両遺跡においてはこうしたタイプの存在はみられなかった。したがって、上述してきたように本両遺跡の陥し穴はその形態変遷からたどれば、縄文時代早期後半から前期末葉～中期初頭頃の所産である可能性が高いことが指摘できよう。このことはこの地において、縄文早期

後半から始まった陥し穴を用いた狩猟活動が前期末葉～中期初頭頃をもって、行われなくなったことを示していると考えられるのである。

第3節 陥し穴の配列とその意味

比較的平坦な尾根に営まれた第1遺跡と、急峻で狭長な尾根に営まれた第2遺跡とはかなり様相が異なる。遺跡全体を調査したわけではないが、遺構の存続時期も異なるであろうし、ましてや狭長な尾根部とそれに囲まれた谷部をもつ第2遺跡では陥し穴のタイプ・地形利用・配列法・分布パターンなどは多岐に渡る内容をみせている。ただし、Ⅰ・Ⅱ類は少数事例であるため、さしたる傾向をつかめず、またⅢ類・Ⅳ類はその事例が多くはなるが、後述するように意外にも散漫かつ無秩序な配置であり、いわゆる「けもの道」と思われる部分に沿って単独もしくはわずかに少数つくられるだけであった。ひとつ指摘できるのは、少なくともⅠA類やⅠB類では谷部付近までをも使用し、Ⅲ類・Ⅳ類は尾根部分に巡らされた縦横無尽の「けもの道」しか利用せず、地形利用に大きな変容が内在していたのである。こうした占地に対する相関関係についてはいまだ説明の余地がないが、もちろん陥し穴の進展、とりわけ大型化や狩猟集団、あるいは数量や対象獣など、お互いに相互関係をもちながら対照的な差異をみせるに違いない。

ⅠA類

第1遺跡では存在しない。第2遺跡では北側尾根の緩やかな北斜面に位置しており、小型のもの(29号・33号)が23m離れて配され、その内部に大型のもの(30号)が入り込んでいる。23mという距離をもって列状配置が成されたとすれば、等閑視されがちだが同じ集団による構築であった可能性があり、そこで小型の部類をグルーピングした。いずれにしても第2遺跡では、この段階で幅長な尾根上面の一部しか利用せず、しかもごく少数の陥し穴しか存在していない。

ⅠB類

第1遺跡では存在しない。第2遺跡では北尾根南斜面谷部の砂礫層にほど近いところで密接並列(今村1983)が行われている。主軸は等高線に直交し、一定の等高線に並行しながら48mの間に10基が立ち並んでおり、落ちる確率を高めるために陥し穴間に垣の類を巡らせ、大勢で動物を追い込んで捕らえる巻狩式(今村1976)で捕獲した可能性も示唆されよう。現状のコンタ図では分かり難いが、谷の平坦部と尾根の急斜面の地形変換部に相当する箇所であり、尾根と尾根を南北に横断する動物をここで捕らえようとしたのだろう。このような場所に構築するのはⅠB類だけで、しかも巻狩を想定させる密接並列も本類だけであった。多摩ニュータウン遺跡群においても、小型で長幅比が小さいより古い段階の陥し穴は谷頭部分も利用するなど地形全面を活用しているが(佐藤1989C)、同様のことがここでも当てはまる。ⅠB類は全面利用型と言えるだろう。

ⅠC類

第1遺跡では存在しない。第2遺跡では、大型のもの(3号)がもっとも幅の狭い尾根の稜線上に単独で配置されており、主軸方向は尾根軸と等しい。占地からすればこれも尾根筋に伸びた「けもの道」なのだろう。小型のもの(8号)は不明といわざるをえない。

ⅡA類

第1遺跡では1基(5号)のみの確認で列状方法は不明だが、少なくとも密接並列は行われていない。等高線に直交してつくられており、登り下りする対象獣を捕獲したのだろう。

第2遺跡では22号が南尾根西端の稜線上に位置し、尾根軸と同様の主軸となっており、これも尾根上を

行き来する「けもの道」に設けられたものである。この尾根はわずかながら西に延びることから列状関係があるかもしれないが、いずれにしても少数と思われる。

II B類

両遺跡とも1基のみの確認で、第1遺跡が等高線に直交(9号)、第2遺跡がほぼ平行(45号)している。第1遺跡の列状配置は不明、第2遺跡は北尾根の緩やかな南西斜面に位置するが、単独でつくられた可能性が高い。

III A類

第1遺跡の4基(4号・11号・20号・29号)はいずれも単独で確認されているが、4・11号については調査区南隅で確認されており、さらに南側へと展開していく可能性もある。主軸は29号のみが等高線に平行し、ほかは直交する。

第2遺跡では8基(6号・20号・21号・31号・32号・35号・36号・38号)が確認されている。唯一31・32号が北尾根の比較的緩やかな斜面上に列状配列が認められており、同じ等高線上に位置しその距離は約10m、等高線にはほぼ直交した状態でつくられており、尾根状台地を横断する狩猟対象獣を捕らえたに違いない。その他は稜線上を主体に点々と配され、また36号を除けば尾根筋に平行してつくられるものであるが、35・36・38号は谷を取り囲む配列が行われていた可能性もある。その場合は楕円形状となり、今村啓爾氏によればこれも巻狩式に相当するという(今村 1983)。ただし各陥し穴の間隔が開きすぎ、これを証明するにはさらなる検討が必要となろう。

III B類

第1遺跡では15基が確認されている。このうち7号と12号が等高線と平行、18号が斜方向となっており、また少なくとも12号と18号は単独で配列されている。7号については東端に未発掘部分があるため配列関係を明示することができない。11は単独、14・15号は同じ等高線上に位置しているものの40mほどの距離を有しているためグルーピングしなかった。

一方、21号より西側は狭い範囲に集中しており、あまり例が多いとは言えないものの、この場合長軸長結びの列状配置やV字状配置を想定すべきで、第34図のようにグルーピングを行った。だが台地縁辺部を取り巻く21号もしくは26号から32号というラインも可能であり、あるいは副軸で結ばれる19・21号、単独の25号、それ以西と判断してもさしておかしくはない。27号と30号間の距離が約36m離れているため分離したが、さまざまな可能性が考えられるはずである。巻狩式が取り行われたと考えられるが、それぞれの陥し穴間の距離は19～21号間が最低で11m、27～30号間が最高で36mという空間を有し、密接並立とは程遠いものがある。

第2遺跡では、40号・42号・43号の3基、9号・10号・25号・37号・44号)の5基をそれぞれグルーピングした。前者のグループは北尾根最下段尾根稜線部に集中し、かつすべて尾根筋に直交した状態でつくられていることからこれらが列状配置されていることが指摘でき、その間隔は40～42号が24m、42～43号が14mというかたちとなる。さらに西側へと続く可能性も考えられる。後者のグループでは枝分かれする直前の緩やかな斜面に設けられた9号と10号が列状配置という形態をとっている。尾根筋と直交して上下に並んでおり、その間隔は11mを測るものであった。25・37・44号は北尾根の稜線上に点在し、いずれも尾根筋に沿ってつくられたものであり、それぞれ単独で形成された可能性が高い。

III C類

第1遺跡では7基確認されており、多くは等高線に直交しているが、人為的に埋め戻されたかのような23・24号のみ平行してつくられており、何らかの蓋然性らしきものを感じる。全体的に散乱しているものの、唯一16号および17号が列状関係にあり、副軸を揃えて約10m離れて分布する。その他24号は単独と想

定されるが、それ以外は不明である。

第2遺跡では稜線上に8基検出されており、ほとんどのものが尾根が二股に枝分かれする箇所集中する。すべて尾根筋に直交した状態でつくられており、第1遺跡同様、これが本両遺跡の基本パターンではないかと考えられないだろうか。平面形状・規模が類似する12・13・14号が列状配列し、また同様に11・23号は並んでおり、おおむね副軸をそろえながら前者では7mと15m、後者では14mの間隔で結びついている。ほかは位置や形状から単独で構成されたものと見なすべきであろう。

IV類

第1遺跡には存在しない。第2遺跡では1～5号を除けば尾根筋に直交してつくられており、しかも46号が北尾根の最西端、その他は枝分かれする直後の北尾根稜線部に集中している。28・34号は北端に位置し35mほど離れており、この場合でも列状配列の蓋然性が高いのだが、段丘崖の崩落が考えられるこの場所ではさらに北側に同種のもが存在する可能性がある。24・26号は14m離れて稜線部の上下に並んでおり、この場合は明らかに列状関係にあることを物語っている。46号は西端部に位置しているため不明である。もっとも新しいとした1～5号は東端部の幅の狭い尾根の稜線部を中心に位置しており、唯一底面形状が長楕円形の5号のみが南斜面へと大きくずれこんでいる。みな尾根筋に平行することから長軸で結びつく列状関係を考え、ひとまず2号と4号をそれとしたが、これに1号を付け加えてもさして問題とはならない。また、28号と34号間と同じように2～4号間にも陥し穴が存在している可能性も考えられるのである。なお、1～2号間は9m、2～4号間は25mの距離を有している。

第1遺跡には見当たらないことから、本両遺跡では最終的に尾根の狭長部を利用し、登り下りする対象獣を狙いながら、やがて陥し穴による獣種の獲得を閉じた想定できるかもしれない。

第4節 陥し穴の「貼壁」について

前述したように、調査過程では大半の陥し穴について短軸方向の土層観察を行った。その結果、これらの陥し穴のうちには、長軸両壁面際に堅くしまりの強いローム質土とそれに伴う少量の混土層を有するものが少なからず認められた。こうした土層は外壁に沿って直立した状態を見せるものであり、人為的に貼り付けた構築物である可能性が考えられた。調査段階ではこの特異な堆積を呈する土層については、人為的に壁際に貼り付けたものと理解し、「貼壁」と呼称した。結果81基中、その可能性のあるものも含めれば30基の陥し穴が該当することとなった。

しかしながら、「貼壁」は、壁面の自然崩落による可能性も考えられ、改めて「貼壁」について検討してみた。

まず「貼壁」について、今回の調査で得られた知見をまとめてみると次の8点があげられる。

- ①ⅢB類・ⅢC類・Ⅳ類にしか存在しない。
- ②長軸両壁面下部にローム質土とローム主体混土層が混入し、また短軸両壁面側には存在しない。
- ③直立し、長軸に沿って平行して堆積する。その場合、逆茂木を埋没させることはない。
- ④「貼壁」と想定される部分の上端が平行し、しかも平坦である。
- ⑤堅くしまっており、純ローム質土がほとんどの場合は地山と見間違えるものがある。
- ⑥ローム質土が内側、混土層が外側に堆積する事例が多い。
- ⑦内側の壁面が平坦で、いかにも壁体を形成しているような状況を呈するものが多い。
- ⑧長幅比の大きいものに多い傾向がある。

調査段階で「貼壁」を人為的構築と想定した最大の要因は、②で指摘したように短軸両壁面側には認められず、壁の崩落土によるものとは考えにくいことにある。また③のように直立し、長軸に沿って平行して堆積することや、逆茂木を埋没させる事例がまったくないことも人為的な行為を考えなければ説明が難しいと思われる。自然崩落であるならば逆茂木を埋没させる事例が少なからず存在してよいと考えられる。④については、傾斜地につくられた陥し穴であってもローム質土と混土層の上面は両軸とも平行して堆積し、しかも上面が平坦となっていることが認められる。これも自然堆積では想定しにくい堆積状況といえるだろう。⑤・⑥に関しても自然堆積でこのような状況が起こるのか疑問が残る。とりわけ⑤については②・③と関連し合い、自然堆積によるものとは考えにくい現象で、人為的に貼り固めなくてはこのような状況にはなりえないと考えられるからである。⑦は内側そのものも壁面化していることを示していると考えられ、これも人為的構築による以外には考えがたい現象といえよう。以上の知見から、「貼壁」が人為的な構築物である可能性の高いことが指摘できよう。

こうした知見を踏まえ、本両遺跡でみられる「貼壁」は人為的に構築されたものとするが、一方で前述の知見は状況証拠的性格が強く、そのためこの「貼壁」が自然堆積によるものとの見解を完全に否定する材料に乏しいこともまた事実である。また何よりもこの「貼壁」にはどのような機能があるのか今回の調査では明らかにはできなかった(註2)。人為的構築物であるならば、当然ある機能を期待してつくられたはずであり、それが不明であることは先述したように確たる物的論拠に乏しいこととあいまって、人為的なものであることに疑問を抱かせる最大の要因である。さらに「貼壁」の類例が隣接の諏訪郡原村に所在する芝原尾根遺跡を除いては認められていないことも問題の解決を難しくしている。

いずれにせよ、「貼壁」の存在は陥し穴の構造とも関連するもので、ここでは陥し穴には「貼壁」という人為的な構築物が存在する可能性のあることを提起することにしたい。

註1 近年になり、放射性炭素年代測定値については校正によって、その数値年代は従来のもとの差違が生じている。しかしながら本稿では従来年代に従っている。

註2 機能に関してまず想定されるのは、一度掘削した陥し穴の長軸両壁間に「貼壁」を施すことによって、より長幅比を狭くして陥し穴に落ちた四肢の長い狩猟対象物の動きを封じることが目的としたという解釈である。「貼壁」が深度がより深いⅢB類・ⅢC類・Ⅳ類にしか認められないという①の知見もこの解釈を肯定する材料のひとつになるかもしれない。この解釈にたてば、当初から長幅比の狭い穴を掘削するよりも広めに掘削しその後で掘り上げたローム土を利用して「貼壁」を構築した方が容易であるとの理由付けもできる。しかしながらそこまでする必要性はたしてあったかどうかという疑問も当然ながら残るのも確かである。

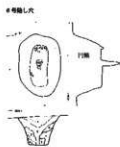
また藤崎治氏の言及するところの「陥し穴の造り直し」という視点もあろう。藤崎氏は東京都日野市七ツ塚遺跡で検出された陥し穴から造り直しや繰り返し使用した遺構を検討しようと試みた(藤崎 1999)。本両遺跡での「貼壁」は、その内の「第Ⅱ類—②埋め戻す、貼り直した陥穴」にもっとも近い状況にある。これは深い陥し穴に多くみられ、一度つくった陥し穴に対して底面から壁面をロームで埋め戻す、あるいは貼り直すもので、周囲は極めて堅密度の高いものであるという。またロームをたたきめている場合は地山と見間違えほどのものであるという。こうした点は確かに本両遺跡における「貼壁」に類似しているといえる。しかしながら、こうした藤崎氏のいうところの「造り直し」では、陥し穴の周囲全体にローム土を使用するが、本両遺跡では短軸側においては「貼壁」は認められていないなど、相違点も少なくない。また、本両遺跡で「貼壁」と想定している土層のなかには、「貼壁」下部に、ローム粒子やロームブロックを含まない層厚の薄い堆積物が存在するものも認められる。こうした堆積をどう考えるかも大きな問題である。

引用・参考文献

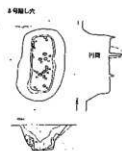
- 稲田孝司 1993 「西日本の縄文時代陥し穴」『論叢考古学』天山堂
 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の上層群に関する考察」『霧ヶ丘 霧ヶ丘遺跡調査団』
 今村啓爾 1976 「縄文時代の陥陥と民族誌上の事例の比較」『物質文化』№27
 今村啓爾 1983 「陥陥(おとしあな)」『縄文文化の研究』2 雄山閣
 今村啓爾 1987 「狩人の系譜」『日本の古代』10 山人と生業 中央公論社

- 今村啓爾 1999 『縄文の実像を求めて―歴史文化ライブラリー76― 吉川弘文館
- 今村啓爾 2004 「箱根南西山畿先土器時代陥穴の使用方法」『考古学研究』51巻-1号
- 河西克造 2002 「第8章成果と課題 第3節陥し穴について」『広域営農団地農道整備事業ハッ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書―茅野市内一馬治場遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 川崎 保 1997 「長野県の遺跡における年代決定法について―相対年代と理化学的年代測定法などの対比と用い方―」『長野県考古学会誌』83号
- 小林健治・武居八千代 1994 『碑田頭B遺跡』茅野市教育委員会
- 小林秀行 1992 「第3章 遺構と遺物 第2節 縄文時代早期～晩期 1土坑」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1―佐久市内一下茂内遺跡』新潟県埋蔵文化財センター
- 桜井秀雄 1998 「南平遺跡発掘調査概報」原村教育委員会
- 桜井秀雄 2000 「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』52巻10号
- 佐藤宏之 1989a 「多摩ニュータウンの遺跡群調査：2」陥し穴土坑と特異空間」（第1回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム記録）『研究論集第Ⅷ巻』（財）東京都埋蔵文化財センター
- 佐藤宏之 1989b 「多摩ニュータウンNo.426遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度（第5分冊）』東京都埋蔵文化財センター
- 佐藤宏之 1989c 「陥し穴と縄文時代の特異社会」『考古学と民族誌』渡辺仁教授古稀記念論文集 六興出版
- 澤谷昌英 1997 「Ⅶ まとめ」『芝原尾根遺跡―第1・2次発掘調査』原村教育委員会
- 藤崎謙治 1999 「造り直し繰り返し使用した陥穴について―東京都日野市七ツ塚遺跡から―」『東国史論』第14号
- 辻本宗夫 1988 「Ⅳ遺構と遺物 4.陥し穴状遺構の機能した時期と造敷物として利用された植物」『ジャコッパライ I』諏訪市教育委員会
- 保坂康夫 1990 「丘の公開第5遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会
- 守矢昌文 1996 「上の平遺跡」茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1996 「梵天原遺跡」茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1997 「久保御堂遺跡」茅野市教育委員会
- 矢吹俊男 1977 「楕円形ピット群」『寺沢遺跡』日本文化財研究所

I (その他)



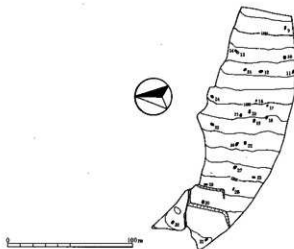
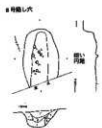
IIA



II B

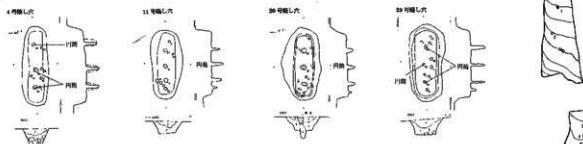


III (その他)

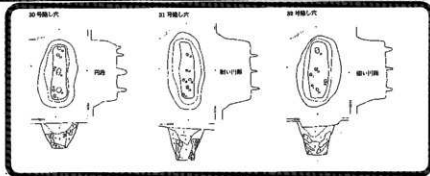
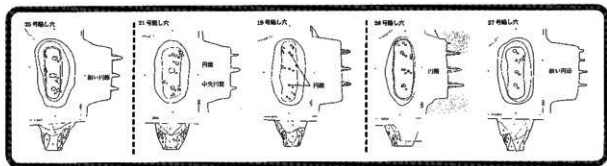
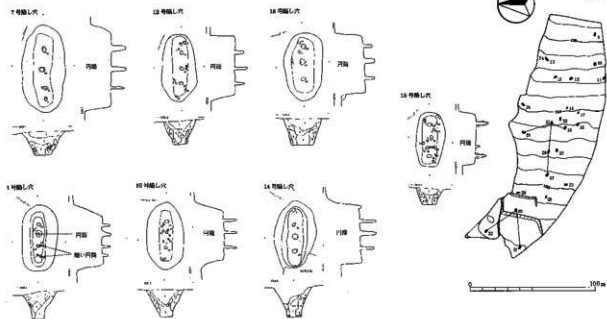


第33図 第1遺跡 陥し穴の分類と配例(1)

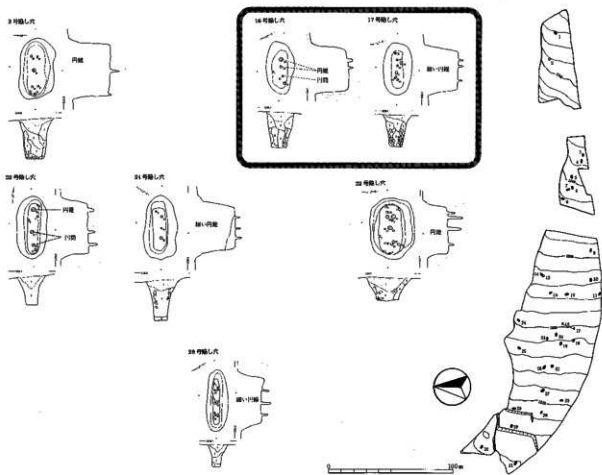
III A



III B



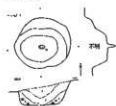
第34図 第1遺跡 陥し穴の分類と配列(2)



第35図 第1遺跡 陥し穴の分類と配例(3)

IA

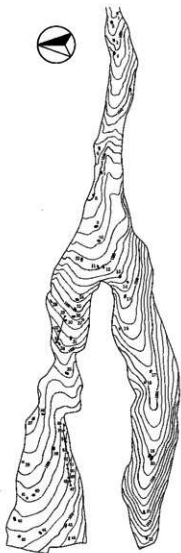
30号陥し穴



32号陥し穴



33号陥し穴



IB

47号陥し穴



48号陥し穴



49号陥し穴



50号陥し穴



51号陥し穴



52号陥し穴



53号陥し穴



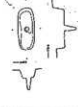
54号陥し穴



55号陥し穴

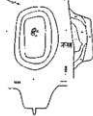


56号陥し穴



IC

8号陥し穴



9号陥し穴



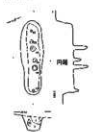
IIA

32号陥し穴



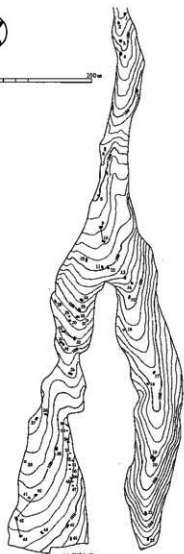
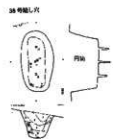
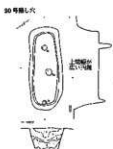
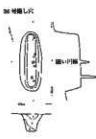
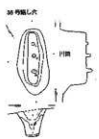
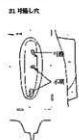
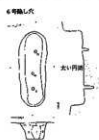
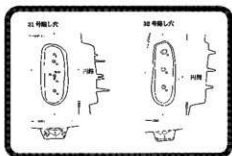
II B

45号陥し穴

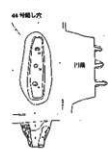
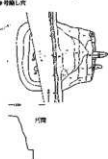
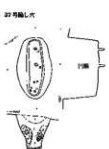
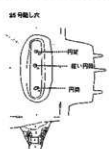
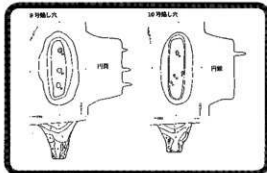
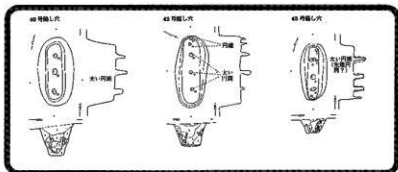


第36図 第2遺跡 陥し穴の分類と配列(1)

III A

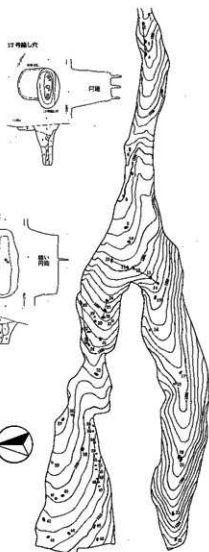
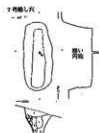
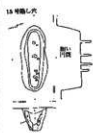
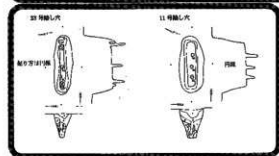
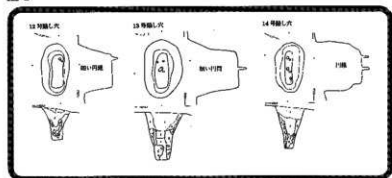


III B

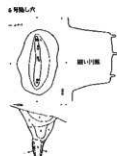
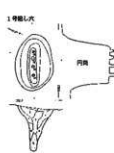
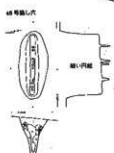
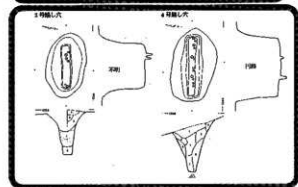
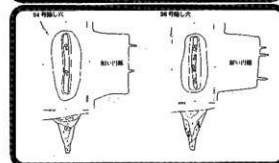
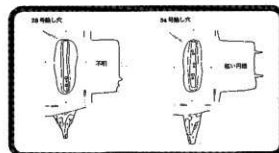


第37図 第2遺跡 竈し穴の分類と配列(2)

III C



IV



第38図 第2遺跡 陥し穴の分類と配列(3)

第5章 ま と め

本書で報告した笹原上第1遺跡・第2遺跡では、あわせて約37,000㎡余の調査を実施し、遺構としては計89基の土坑が検出され、このうち陥し穴が計81基を数えた。八ヶ岳西麓の標高約1200～1250m前後をはかる本両遺跡一帯では、陥し穴を主体とする、広大な狩猟域を形成していたことが判明したわけである。

陥し穴の検出数もさることながら、注目すべきは陥し穴の形態の多様性であった。底部施設に関しては、3基の坑底ビットを基本とするⅢ類が主体といえるが、他の類型も少なくない。さらに第4章4節で詳述した「貼壁」を有する陥し穴の存在は、同年度に調査された原村・芝原尾根遺跡での事例以外は、管見の限りでは確認されていない。本両遺跡の特徴を一言であらわすならば、「多様な形態をもつ陥し穴群」ということがいえるであろう。

概して、陥し穴の年代決定には十分な慎重さが必要であるが、とりわけ本両遺跡では、出土遺物の僅少さに加えて、重複関係が皆無であることが指摘できるなど、年代決定の参考になる事象も欠如しているため、陥し穴の所産時期の年代決定についてはさらに大きな困難さを伴っている。そのため、本書では第4章2節で述べたように近隣地域での知見をもとに、形態分類の差違を時間差によるものであるとの作業仮説に基づき、年代試算を提出したわけだが、これについては作業仮説の妥当性の問題を含めて、今後もさらなる検討が必要であろう。

今回の調査では数基を除き、完掘後に重機による断ち割りを行い、坑底ビットの断面形態の把握に努めた。こうした調査方法を本格的に取り入れたが、その後の記録方法に混乱が生じてしまい、せっかくの断ち割り調査の知見が本書において十分生かせきれなかった悔いが残るのも確かである。この点については調査担当者及び報告者としての責任を感じ入ること大である。

陥し穴に関して断ち割り調査がいかに有効であるということは、翌平成9年度に担当した原村南平遺跡での発掘調査において強く認識した。南平遺跡では断ち割り調査による坑底ビットの断面観察および放射性炭素年代測定により、中世末～近世初頭の陥し穴の存在を明らかにできたのである。南平遺跡については、断ち割り調査を当初から念頭においていたため、坑底ビットは基本的には完掘せず、覆土も含めて断ち割りし、断面観察を行うという方式を採用したが、これも笹原上第1・第2遺跡での苦い経験を教訓にしたものであった。

最後に本書がこの地域の歴史を考える上で貴重な資料となり、今後多方面で広く活用されることを期待したい。

写 真 图 版

笹原上第1遺跡全
景(南から)



左: 1号陥し穴完
掘状態

右: 同 逆茂木痕
断面



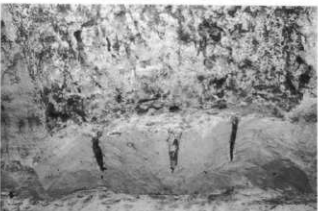
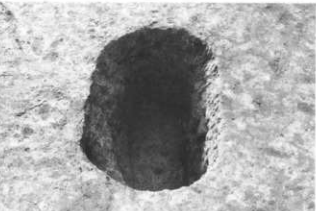
左: 3号陥し穴断
面

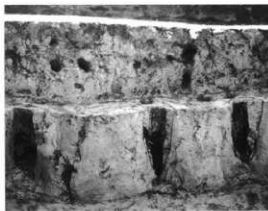
右: 同 貼壁



左: 3号陥し穴完
掘状態

右: 同 逆茂木痕
断面

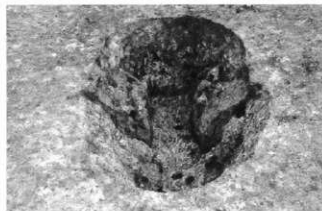




左：4号陥し穴断面

中：同 完掘状態

右：同 逆茂木痕断面



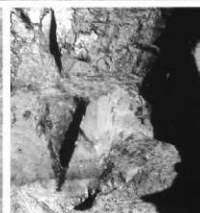
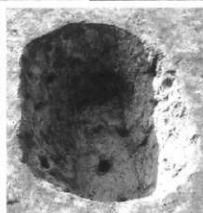
左：5号陥し穴断面

右：同 貼壁の可能性をもつ覆土



左：5号陥し穴完掘状態

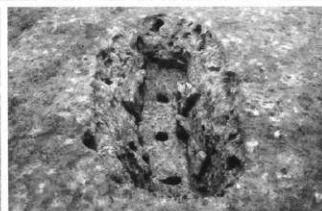
右：同 逆茂木痕断面



左：6号陥し穴断面

中：同 完掘状態

右：同 逆茂木痕断面



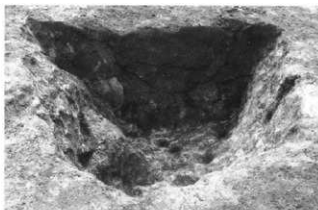
左：7号陥し穴断面

右：同 貼壁の可能性をもつ覆土

左：7号陥し穴逆
茂木痕断面



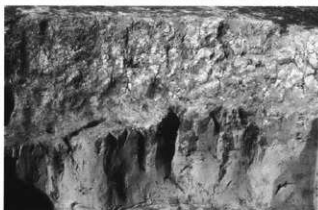
右：8号陥し穴断
面



左：8号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面



左：9号陥し穴断
面



右：同 7層ロー
ムブロック



左：9号陥し穴逆
茂木痕断面



右：10号陥し穴断
面



左：10号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面



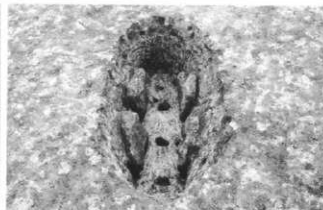
PL4 笹原上第1遺跡



左：11号陥し穴断面

中：同 完壁状態

右：同 逆茂木痕断面



左：12号陥し穴断面

右：同 貼壁



左：12号陥し穴完掘状態

右：同 逆茂木痕断面



左：14号陥し穴断面

右：同 貼壁・13号土坑完掘状態



左：14号陥し穴完掘状態

右：同 逆茂木痕断面

左：15号陥し穴断面



右：同 貼壁



左：15号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面



左：16号陥し穴断
面



中：同 貼壁



右：同 貼壁（部
分）



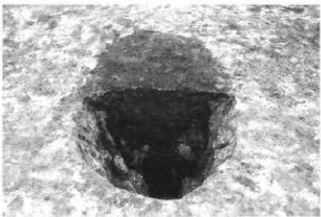
左：16号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面



左：17号陥し穴断
面



右：同 貼壁の可
能性をもつ覆
土





左：17号陥し穴完
掘状態

右：同 逆茂木痕
断面



左：18号陥し穴断
面

右：同 貼壁



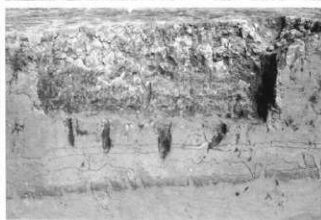
左：18号陥し穴完
掘状態

右：同 逆茂木痕
断面



左：19号陥し穴断
面

右：同 貼壁



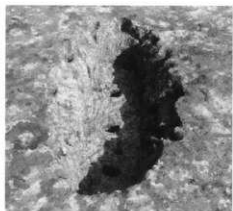
左：19号陥し穴完
掘状態

右：同 逆茂木痕
断面

左：20号陥し穴断面

中：同 完掘状態

右：同 逆茂木痕断面



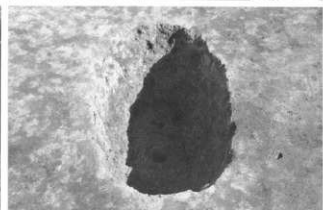
左：21号陥し穴断面

右：同 貼壁（部分）



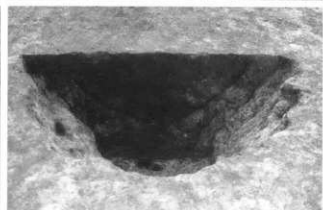
左：21号陥し穴貼壁（部分）

右：同 完掘状態



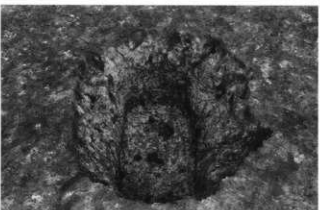
左：21号陥し穴逆茂木痕断面

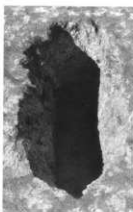
右：22号陥し穴断面



左：22号陥し穴完掘状態

右：同 逆茂木痕断面





左：23号陥し穴断面
中：同 完掘状態
右：同 逆茂木痕断面



左：24号陥し穴断面
右：同 完掘状態



左：24号陥し穴逆茂木痕断面
右：同 逆茂木痕断面（長軸壁下寄り）

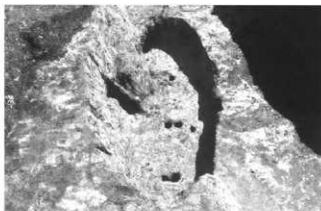


左：25号陥し穴断面
右：同 粘壁（部分）



左：25号陥し穴完掘状態
右：同 逆茂木痕断面

左：26号陥し穴完
 攤状態



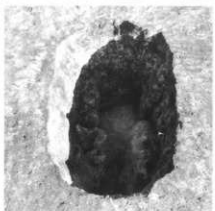
右：同 逆茂木痕
 断面



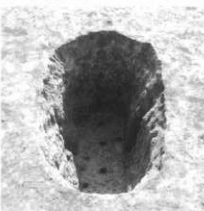
左：27号陥し穴断
 面



中：同 貼壁



右：同 完攤状态



左：27号陥し穴貼
 壁（部分）



右：同 逆茂木痕
 断面



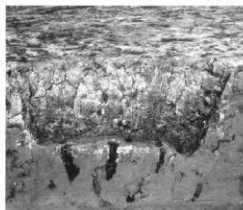
左：28号陥し穴断
 面



中：同 完攤状态



右：同 逆茂木痕
 断面

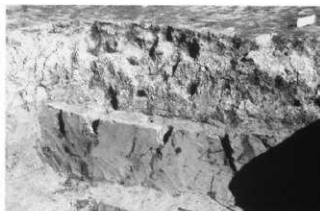
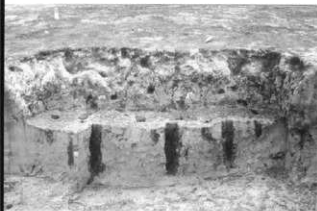


左：29号陥し穴断
 面



右：同 完攤状态





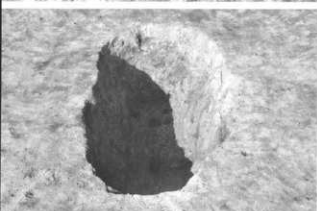
左：29号陥し穴逆
茂木痕断面
右：同 逆茂木痕
断面（長軸壁
下寄り）



左：30号陥し穴断
面
右：同 貼壁



左：30号陥し穴貼
壁
右：同 貼壁（部
分）



左：30号陥し穴完
掘状態
右：同 逆茂木痕
断面

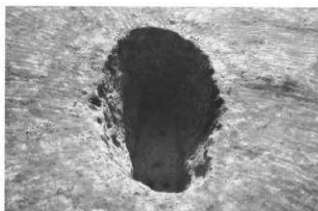


左：31号陥し穴断
面
右：同 貼壁

左：31号陥し穴貼壁（部分）



右：同 完備状態



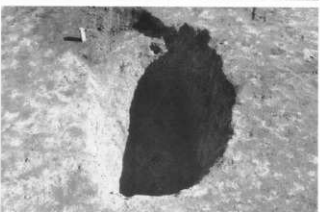
左：31号陥し穴逆茂木痕断面



右：32号陥し穴断面



左：32号陥し穴完備状態



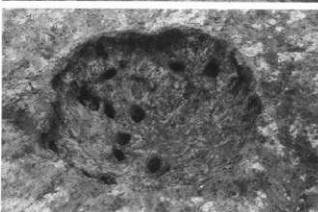
右：同 逆茂木痕断面



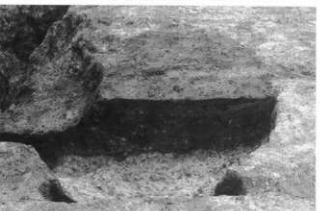
左：2号土坑断面



右：同 完備状態



左：13号土坑断面



右：同 完備状態





笹原上第2遺跡全景
(西から)



左：1号陥し穴断面

右：同 完掘状態



左：2号陥し穴断面

右：同 完掘状態

左：3号陥し穴断面

右：同 完備状態



左：4号陥し穴断面

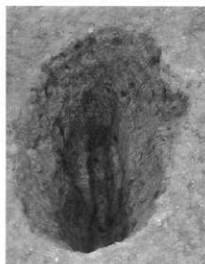
右：同 完備状態



左：5号陥し穴断面

中：同 粘壁

右：同 完備状態



左：6号陥し穴断面

右：同 完備状態

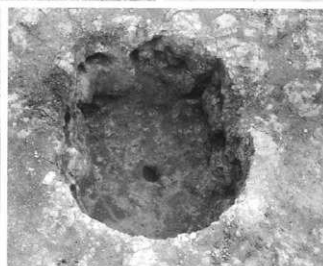




左：7号陥し穴断面

中：同 貼壁

右：同 完備状態



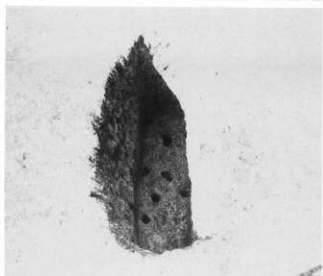
左：8号陥し穴断面

右：同 完備状態



左：9号陥し穴断面

右：同 完備状態



左：10号陥し穴断面

右：同 完備状態

左：11号陥し穴断面



右：同 粘壁の可能性をもつ覆土



左：12号陥し穴断面



右：同 完掘状態



左：12号陥し穴逆茂木痕断面



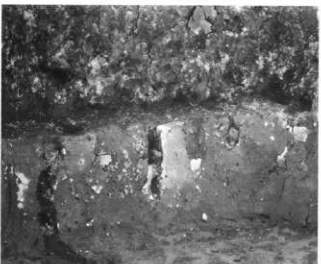
右：13号陥し穴断面



左：13号陥し穴粘壁の可能性をもつ覆土



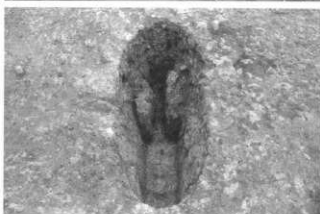
右：同 逆茂木痕断面





左：14号陥し穴完
掘状態

右：同 逆茂木痕
断面



左：15号陥し穴断
面

右：同 粘壁の可
能性をもつ覆
土



左：15号陥し穴完
掘状態

右：同 逆茂木痕
断面



左：17号陥し穴・
57号土坑断面

右：同 完掘状態



左：17号陥し穴逆
茂木痕断面

右：19号陥し穴断
面

左：19号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面参照



左：20号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面



左：21号陥し穴断
面



右：同 完掘状態



左：21号陥し穴逆
茂木痕断面



右：22号陥し穴断
面

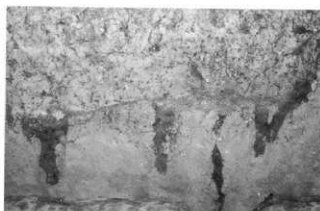
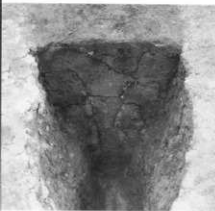


左：22号陥し穴完
掘状態



右：同 逆茂木痕
断面





左：23号陥し穴断面
中 同 完掘状態
右：同 逆茂木痕断面



左：24号陥し穴断面
中 同 7層堆積状態
右：同 完掘状態



左：24号陥し穴逆茂木痕断面
右：25号陥し穴断面



左：25号陥し穴貼壁の可能性をもつ覆土
中 同 完掘状態
右：同 逆茂木痕断面



左：26号陥し穴断面
右：同 完掘状態